

西原大塚遺跡第120地点
西原大塚遺跡第131地点
田子山遺跡第97地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

埼玉県志木市遺跡調査会

は じ め に

志木市遺跡調査会
会長 白砂 正明

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心まで 25 km という距離にあるため、住宅建設をはじめとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

ところで、市域を流れる柳瀬川や新河岸川を臨む台地縁辺部や、荒川が形成した沖積地の自然堤防上には、埋蔵文化財包蔵地が少なからず存在していますが、これらは様々な開発行為によって危機にさらされているのが現状です。

地域の歴史的遺産である文化財を保護・保存し、未来に残していくことは、私達に与えられた責務になっており、今回、ここに報告する 2 遺跡 3 件の発掘調査は、保育園建設や共同住宅建設などに伴う記録保存を目的として実施したもので、多大な成果を得ることができました。

本書は発掘調査の記録を掲載した報告書であり、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、地域の歴史研究のために活用されることができれば、これ以上の喜びはありません。

最後になりますが、発掘調査及び遺物整理・調査報告書作成にあたりましては、開発当事者をはじめ関係各位の皆様に多くのご協力とご援助を賜わりました。あらためて厚くお礼を申し上げる次第です。

例　　言

- 1 本書は、埼玉県志木市幸町三丁目に所在する西原大塚遺跡（県No.09-007）第120地点、第131地点、
及び志木市本町三丁目に所在する田子山遺跡（県No.09-010）第97地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者から志木市遺跡調査会が
委託を受け実施した。
- 3 本書の作成は、志木市遺跡調査会が行い、編集は佐々木保俊があたった。執筆は下記のとおりである。

第1章 佐々木保俊

第2章 第1節 佐々木 第2節 遺構 内野美津江 遺物 佐々木

　　第3節 遺構 内野 遺物 宮川幸佳

第3章 第1節 佐々木 第2節 遺構 内野 遺物 宮川 第3節 宮川

第4章 第1節 佐々木 第2節 遺構 内野 遺物 宮川

- 4 本書の挿図版の作成は執筆者が行ったが、高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美知子・矢野恵子の協力
を得た。

- 5 本書を取り扱った各遺跡の出土遺物及び記録類は、志木市教育委員会で保管している。

- 6 発掘調査及び出土品整理作業・発掘調査報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏にご教示・
ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・埼玉県立歴史と民俗の博物館

埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館・埼玉県立埋蔵文化財センター

翻埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会

和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市教育委員会

志木市文化財保護審議会・志木市立郷土資料館・志木市西原特定土地地区画整理組合

志木市立第四小学校・開発主体者各位

会田 明・浅野 信英・浅野 晴樹・荒井 幹夫・飯田 充晴・市毛 敦・出居 博

井上 尚明・井上 肇・今井 哲・上田 寛・上村 安生・碓井 三子・梅沢太久夫

江原 順・大滝 孝久・大竹 幸恵・大竹 憲昭・大谷 徹・岡本 東三・織笠 明子

書上 元博・柿沼 幹夫・片平 雅俊・加藤 秀之・金井塙良一・金子 直行・川崎 志乃

隈本 健介・栗島 義明・栗原 和彦・栗原 文藏・黒須 和彦・小出 輝雄・肥沼 正和

小久保 徹・小菅 将夫・小渕 良樹・小滝 勉・小宮 恒雄・近 春奈・齋藤 欣延

斎藤 祐司・坂爪 久純・笹森 健一・佐藤 康二・塙野 博・設楽 博己・斯波 治

白石 浩之・實川 理・實川 順一・十菱 駿武・真保 昌弘・鈴木 一郎・鈴木加津子

鈴木 敏弘・鈴木 裕芳・鈴木 正博・高橋 一夫・川代 隆・田中 英司・谷井 彪

坪田 幹男・照林 敏郎・上肥 孝・戸倉 茂行・中島岐視生・中島 宏・長綱 賢

中東 耕志・中村 倉司・中山 清隆・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早川 泉

早坂 廣人・樋口 誠司・藤波 啓容・福田 聖・細野 高伯・堀 善之・松本 富雄

松本 完・水村 孝行・三田 光明・宮崎 朝雄・村田 章人・守屋 幸一・矢口 孝悦

柳井 彰宏・柳田 敏司・山田 尚友・山村 貴輝・吉川 國男・領塙 正浩・若井千佳子

和田 晋治・渡辺 誠

7 調査組織

〈役員〉会長 細田 信良（志木市教育委員会教育長）（～平成17年6月）

　　榎木 博（　　〃　　）（平成17年10月～平成20年3月）

　　白砂 正明（　　〃　　）（平成20年4月～）

会長職務代理者

新井 茂（志木市教育委員会教育政策部長）（平成17年7月～9月）

副会長 新井 茂（　　〃　　）（平成17年10月～）

理事 神山 健古（志木市文化財保護審議会会长）

井上 國夫（志木市文化財保護審議会副会長）

高橋 長次（志木市文化財保護審議会委員）

高橋 豊（　　〃　　）

内田 正子（　　〃　　）

理事兼事務局長

大熊 章只（生涯学習課長）（～平成18年3月）

宮川 英夫（参事兼生涯学習課長）（平成18年4月～平成19年3月）

吉田 洋（生涯学習課長）（平成19年4月～）

監事 古屋 大輔（生涯学習課主任）（～平成18年3月）

桙島 秀俊（　　〃　　）（　　〃　　）

原田 隆一（教育経務課長）（平成18年4月～平成20年3月）

菊原 龍治（　　〃　　）（平成20年4月～）

鈴木幸治郎（出納室長）（平成18年4月～）

〈事務局〉土岐 隆一（生涯学習課副課長）（平成20年4月～）

醍醐 一正（生涯学習課主幹）（～平成19年3月）

内田 誠（　　〃　　）（平成18年4～8月）

今野 美香（　　〃　　）（～平成19年11月）

大熊 克之（　　〃　　）（平成19年12月～）

佐々木俊俊（生涯学習課主査）

清水 隆（　　〃　　）（平成19年4～7月）

尾形 則敏（生涯学習課主任）

倉部 恵子（　　〃　　）（～平成18年3月）

高野 雅也（　　〃　　）（～平成18年3月、平成20年4月～）

松永真知子（　　〃　　）（平成18年4月～）

10 発掘調査および整理作業参加者

西原大塚遺跡第120地点

調査員

内野 美津江

発掘作業協力員

朝香 輝朗・岸田 純一・高杉 朝子・塚田 和枝・土屋 富子
永井 真理・成田 しのぶ・二階堂美知子・松崎 陽子・矢野 恵子

整理作業協力員

朝香 載朗・塚田 和枝・土屋 富子・成田 しのぶ・松崎 陽子
宮川 幸佳

西原大塚遺跡第131地点

調査員

内野 美津江

発掘作業協力員

朝香 載朗・岸田 純一・高杉 朝子・塚田 和枝・土屋 富子
永井 真理・成田 しのぶ・二階堂美知子・松崎 陽子・矢野 恵子

整理作業協力員

岸田 純一・高杉 朝子・塚田 和枝・土屋 富子・永井 真理
成田 しのぶ・二階堂美知子・松崎 陽子・宮川 幸佳・矢野 恵子

田子山遺跡第97地点

調査員

内野 美津江

発掘及び整理作業協力員

大澤 修一・岸田 純一・高杉 朝子・成田 しのぶ・二階堂美知子
宮川 幸佳・矢野 恵子

凡　　例

- 1 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

- 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J = 繩文時代住居跡 Y = 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡 H = 奈良・平安時代住居跡

D = 上坑 M = 溝跡 F = 方形周溝墓

- 遺構・遺物の挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

- 遺物写真図版の縮尺は、任意とした。

- 遺物写真図版中の遺物番号は、遺物挿図版中の遺物写真番号と一致する。

- 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み中の数値は床面若しくは確認面からの深さを、凸堤上の数値は床面からの高さを示し、単位はcmである。

- 遺構挿図版中の遺物出土位置の番号は、遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

- 2 住居跡の記述の中で使用した主軸とは、繩文時代及び弥生時代後期～古墳時代前期においては炉跡と入口（推定）を結んだ線を、奈良・平安時代においてはカマドが設置された壁に直交する線をいう。

- 3 遺構の土層説明や土器の記述の中で用いた色彩の表示方法は『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修によった。

目 次

はじめに	
例 言	i
凡 例	iii
目 次	iv
挿図目次	v
図版目次	vi
第 1 章 遺跡の立地と環境	1
第 1 節 市域の地形の概要	1
第 2 節 市域の遺跡の概要	1
第 2 章 西原大塚遺跡第120地点の調査	3
第 1 節 調査の経緯	3
第 2 節 繩文時代の遺構と遺物	7
第 3 節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	56
第 3 章 西原大塚遺跡第131地点の調査	66
第 1 節 調査の経緯	66
第 2 節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	68
第 3 節 小括	86
第 4 章 田子山遺跡第97地点の調査	88
第 1 節 調査の経緯	88
第 2 節 平安時代の遺構と遺物	90
引用・参考文献	95
報告書抄録	97

挿図目次

第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5,000)	3
第3図 遺構分布図 (1/300)	5
第4図 140号住居跡 (1/60)	7
第5図 140号住居跡出土遺物 1 (1/4)	8
第6図 140号住居跡出土遺物 2 (1/3)	10
第7図 496~503号土坑 (1/60)	12
第8図 504~516号土坑 (1/60)	17
第9図 土坑出土遺物 1 (1/4)	21
第10図 土坑出土遺物 2 (1/3)	22
第11図 土坑出土遺物 3 (1/3)	23
第12図 517~522・526~528・530号土坑 (1/60)	26
第13図 土坑出土遺物 4 (1/3)	28
第14図 523~525・529・531~540号土坑 (1/60)	32
第15図 土坑出土遺物 5 (1/3)	35
第16図 541~549・556・557号土坑 (1/60)	44
第17図 土坑出土遺物 6 (1/3)	45
第18図 土坑出土遺物 7 (1/3)	46
第19図 550~555号土坑 (1/60)	47
第20図 土坑出土遺物 8 (1/3)	48
第21図 140号住居跡・土坑出土石器 (1/3)	54
第22図 522号住居跡 (1/60)	57
第23図 526号住居跡 (1/60)	58
第24図 527号住居跡 (1/60)	59
第25図 528号住居跡 (1/60)	61
第26図 528号住居跡出土遺物 (1/4)	61
第27図 26号方形周溝墓 (1/60)	62
第28図 522・527・528号住居跡、26号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	63
第29図 遺構分布図 (1/300)	66
第30図 529号住居跡 (1/60)	68
第31図 530号住居跡 (1/60)	69
第32図 530号住居跡出土遺物 (1/4)	69
第33図 29号方形周溝墓 (1/80)	71
第34図 29号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	71
第35図 30号方形周溝墓 (1/80)	73
第36図 30号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	74

第37図	30号方形周溝墓出土遺物 2 (1/1)	74
第38図	31・32号方形周溝墓 (1/80)	77
第39図	31・32方形周溝墓出土遺物 (1/4)	81
第40図	33号方形周溝墓 (1/80)	83
第41図	33号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	84
第42図	529・530号住居跡、29～33号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	85
第43図	周辺の地形と調査地点 (1/5,000)	88
第44図	遺構分布図 (1/300)	89
第45図	69号住居跡 (1/60)・カマド (1/30)	90
第46図	70号住居跡 (1/60)	92
第47図	69・70号住居跡出土遺物 (1/4)	92
第48図	12号溝跡 (1/60)	93
第49図	掘立柱建築遺構 (1/60)	94

図版目次

- 図版1 西原大塚遺跡第120地点
調査区近景、140号住居跡遺物出土状態、140号住居跡、140号住居跡炉跡
496号土坑、497号土坑遺物出土状態、497号土坑（西から）
- 図版2 西原大塚遺跡第120地点
497号土坑（南から）、498・499号上坑、500号土坑、501号土坑、502号上坑
503号土坑遺物出土状態、503号土坑、504号土坑
- 図版3 西原大塚遺跡第120地点
505～507号土坑、508号土坑、509号土坑、510号土坑遺物出土状態、510号上坑
511号土坑、512号土坑、513号土坑
- 図版4 西原大塚遺跡第120地点
514号土坑、515号土坑、516号土坑遺物出土状態、516号土坑
517号土坑遺物出土状態、517号土坑、518号土坑、519号土坑
- 図版5 西原大塚遺跡第120地点
520号土坑、521号土坑、522号土坑遺物出土状態、522号土坑
523号土坑遺物出土状態、523号土坑、523・524号土坑、525号上坑
- 図版6 西原大塚遺跡第120地点
526号土坑、527号土坑、528・530号土坑、529号土坑
531号土坑、532号土坑、533号土坑、534号土坑
- 図版7 西原大塚遺跡第120地点
535号土坑、536号土坑遺物出土状態、536号土坑、537号土坑、538号土坑
539号土坑、540号土坑遺物出土状態、540号土坑
- 図版8 西原大塚遺跡第120地点
542号土坑遺物出土状態、542号上坑、543号土坑、544号土坑
545号土坑、546号土坑、547号土坑、548号土坑
- 図版9 西原大塚遺跡第120地点
549号土坑遺物出土状態、549号土坑、550号土坑、551号土坑
552号土坑、553号土坑、554号土坑、555号土坑
- 図版10 西原大塚遺跡第120地点
556号土坑、557号土坑、調査風景、522住居跡、526号住居跡
527号住居跡、528号住居跡、25・26号方形周溝墓
- 図版11 西原大塚遺跡第120地点
140号住居跡出土遺物
- 図版12 西原大塚遺跡第120地点
496・497・500～507・509・510号土坑出土遺物
- 図版13 西原大塚遺跡第120地点
511・513・515～520号土坑出土遺物

- 図版14 西原大塚遺跡第120地点
521～532・535号土坑出土遺物
- 図版15 西原大塚遺跡第120地点
536～544土坑出土遺物
- 図版16 西原大塚遺跡第120地点
545～551・553～556号土坑出土遺物
522・527・528号住居跡出土遺物
26号方形周溝墓出土遺物
- 図版17 西原大塚遺跡第131地点
調査区近景、調査風景、529号住居跡、530号住居跡
29号方形周溝墓遺物出土状態、29号方形周溝墓
30号方形周溝墓遺物出土状態、30号方形周溝墓
- 図版18 西原大塚遺跡第131地点
31・32号方形周溝墓遺物出土状態、31・32号方形周溝墓
32号方形周溝墓覆土堆積状態、33号方形周溝墓
529・530号住居跡出土遺物、29号方形周溝墓出土遺物
- 図版19 西原大塚遺跡第131地点
30～33号方形周溝墓出土遺物
- 図版20 田子山遺跡第97地点
調査区近景、調査風景、69号住居跡遺物出土状態、69号住居跡
70号住居跡、12号溝跡、3号掘立柱建築遺構
69・70号住居跡出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形の概要

志木市は埼玉県の南東部に位置し、首都圏から25kmという距離にある。市の南西は朝霞市・新座市と接し、北東は荒川によってさいたま市と、北西は柳瀬川によって富士見市と画される。市の規模は東西4.73km・南北4.71km・面積9.06km²を測る。

市域の地形は、市の中央部を南東流する新河岸川によって大略二分され、北東部は荒川（旧入間川）によって形成された低地、南西部は武藏野台地の野火止台にあたる。より詳しくみると、市の北西部を流れる柳瀬川は流末で90度近く東方に流れを変えて市のはば中央部で新河岸川に合流する。

武藏野台地は古多摩川の扇状地といわれ、標高100mを測る青梅市付近を扇頂にして西から東に向けて大きく広がる。志木市の台地部分は、武藏野台地の北東端部にあたり、北東に向けて緩やかに傾斜し、南西奥部の新座市との境付近で標高約19m、先端で9m前後を測る。また、朝霞市との境には南西方向に小さな谷があり込むため、市域の台地部分は大きな舌状を呈している。

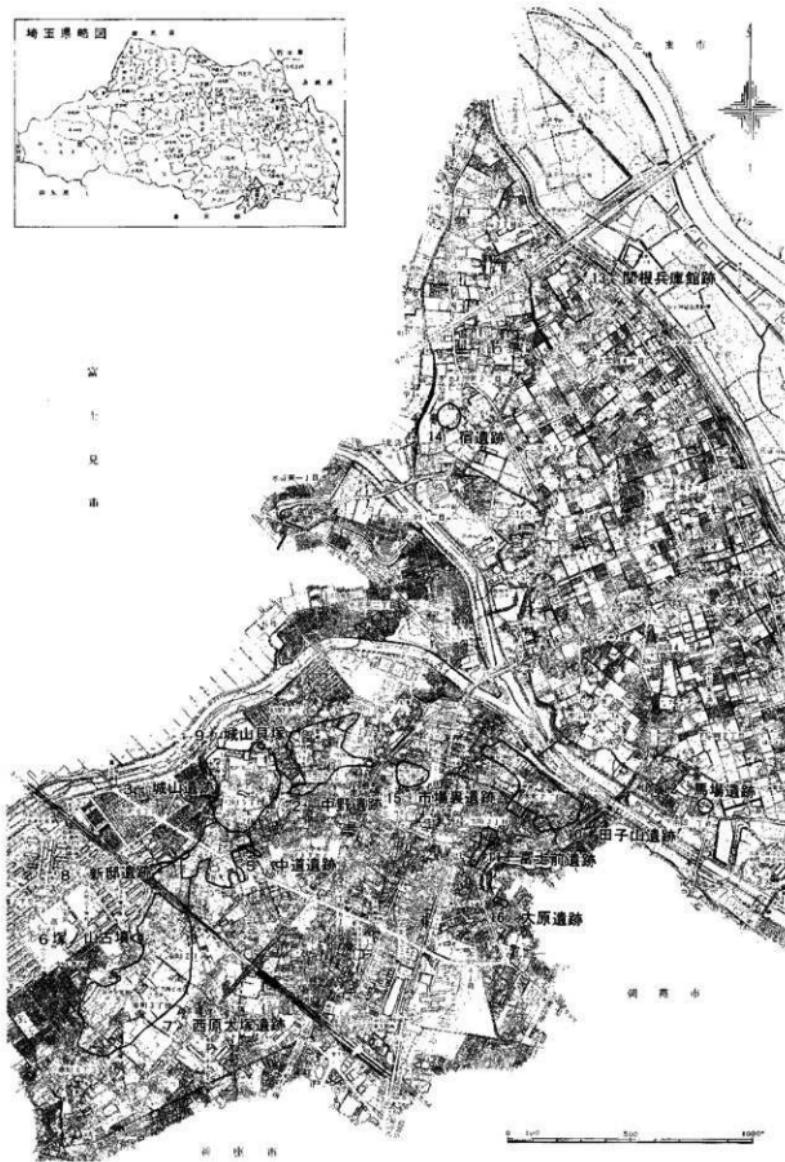
荒川が形成した低地は、市域では上流部で標高約6m、下流部で約5mとあまり比高差はないが、部分的に自然堤防がみられ、僅かな起伏が認められる。

第2節 市域の遺跡の概要

市域の埋蔵文化財包蔵地は、主に柳瀬川と新河岸川を臨む台地上の縁辺部に集中する。

柳瀬川流域には上流から、西原大塚遺跡（旧石器時代、縄文時代早期～晚期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世）、新邸遺跡（縄文時代前期、古墳時代前期、中・近世）、中道遺跡（旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世）、城山遺跡（旧石器時代、縄文時代草創・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世）、中野遺跡（旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世）。柳瀬川と新河岸川の合流する付近に市場裏遺跡（弥生時代後期）。新河岸川流域には田子山遺跡（縄文時代草創・中・後・晚期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、近代）、富士前遺跡（弥生時代後期、古墳時代前期）。また、朝霞市との境にある谷の奥部には大原遺跡（近世）がある。

荒川低地には現在、宿遺跡（近世）、馬場遺跡（古墳時代前期）、関根兵庫館跡（近世）があるが、自然堤防上には未発見の遺跡がある可能性も残されている。



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

第2章 西原大塚遺跡第120地点の調査

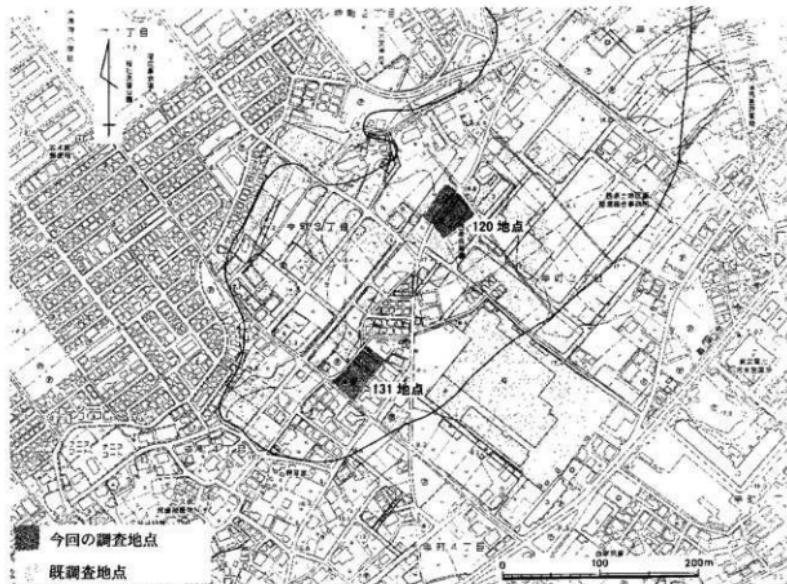
第1節 調査の経緯

(1) 遺跡の立地と環境

西原大塚遺跡は市の南端、幸町二～四丁目に広がる面積約163,000m²の市域最大規模の集落跡である。遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高は14～16mで北西方向に徐々に傾斜しているが、概ね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は約8mを測る。崖下には小規模な湧水地が認められるが、2ヵ所は比較的の規模が大きくなっているため崖線は凹凸をなす。

遺跡を載せる台地上には畠地を多く残しているが、現在、本地区的土地区画整理事業がほぼ完了し、それに伴い住宅建設の件数が激増していて、埋蔵文化財に対する影響が危惧されている。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に行われ、それ以降、教育委員会・志木市史編さん室・遺跡調査会が発掘調査を行っていて、旧石器時代・縄文時代早～晚期・弥生時代後期・古墳時代前・後期・奈良・平安時代、中・近世の集落遺跡であることが知られてきている。



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5,000)

（2）調査に至る経過

平成17年5月、開発主体者の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に、志木市幸町三丁目38街区1・2画地（面積1,297.11m²）に計画されている、既存の保育所の増・改築に係る埋蔵文化財の有無・取り扱いに関する照会があった。

教育委員会では、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡に含まれているため、何らかの保存措置が必要であり、その対処方法を検討するための確認調査が必要である旨の回答を行った。

保育所建設は建築工事を2期に分けて実施する計画であり、1期分の開発地として1画地（460.56m²）に関する確認調査依頼書が、平成17年6月に個人から提出されたため、教育委員会では6月22日に確認調査を実施、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われる住居跡と方形周溝墓を検出した。

教育委員会では、この結果を踏まえて保存方法について個人と協議したが、開発計画の変更が無理であるという結論に達し、2画地も含めて記録保存を目的とする継続した発掘調査を行うことにし、調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。

遺跡調査会ではこれを受け、発掘届が提出されたため、即刻委託契約を締結し、関係書類を埼玉県教育委員会に提出、発掘調査を開始した。

なお、発掘調査通知番号は教生文第2-035号 平成17年7月15日付である。

2期の2画地（836.55m²）の調査に関しては、平成18年5月に綱島氏から確認調査依頼書が提出されたため、教育委員会では5月17日に確認調査を実施、縄文時代中期及び弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われる住居跡などを検出した。

遺跡調査会では前年度からの継続調査として変更契約を締結、埋蔵文化財に影響を与えない園庭部分を除く556.55m²を発掘調査することにし、発掘届を関係書類とともに埼玉県教育委員会に提出、発掘調査を開始した。

なお、発掘調査通知番号は、教生文第2-017号 平成18年5月26日付である。

（3）発掘調査の経過

1期調査は平成17年6月27日から開始した。バックホーを使用し表土剥ぎを行う。

28日には遺構確認作業を実施し、確認調査で検出した住居跡（522Y）と方形周溝墓（26方）のプランを明確にした後、それぞれの精査を開始した。

29日には522Yの土層図、26方の土層図・平面図の作成を行う。

30日には522Yの精査を行う。26方の写真撮影を行う。

7月1日には522Yの精査を行う。

5日には522Yの写真撮影、平面図・断面図の作成を行い、実質的な調査を終了した。

7日には埋め戻しを完了した。

2期調査は平成18年5月30日から開始した。排土置場の関係から調査区を2分割し、西半からバックホーを使用し表土剥ぎを行う。

31日には表土剥ぎと並行して遺構確認作業を行う。住居跡とともに土坑が群をなしていることが判明した。

6月1日には遺構確認作業終了後、土坑（496～503D）、住居跡（526Y）、溝跡（46M）の精査を開

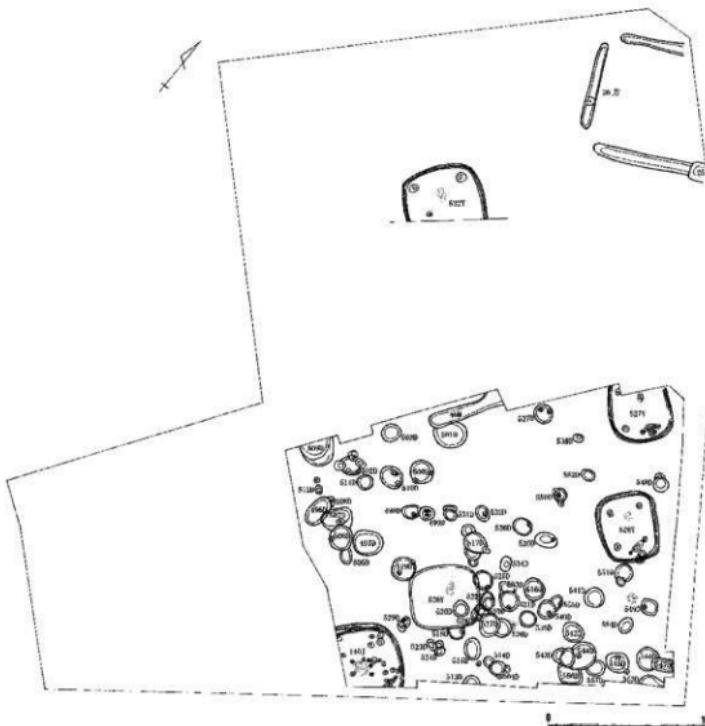
始する。496～502D、46Mの土層図を作成する。上坑は出土遺物や覆土の状況などから縄文時代のものと考えられた。また、溝跡は検出された位置から土地の区画に設けられたものと推定された。

2日には504Dの精査を開始する。526Yの土層図を作成する。496・497・502Dの写真撮影、平面図の作成を行う。498～501Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。503Dの写真撮影、土層図・平面図・断面図の作成を行う。46Mの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。

5日には140J、505～511Dの精査を開始する。526Yの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。504Dの写真撮影、平面図・上層図・断面図の作成を行う。505～510Dの土層図を作成する。

6日には140Jの精査を行う。512～515Dの精査を開始する。508・509Dの写真撮影を行う。510Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。512・513Dの土層図を作成し写真撮影を行う。514Dの土層図を作成する。

7日には140Jの柱穴・壁溝の精査を行う。516・517Dの精査を開始する。505～507Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。508Dの平面図・断面図を作成する。509Dの平面図、516Dの土層図を作成する。



第3図 遺構分布図 (1/300)

8日には140J・516Dの遺物出土状態の写真撮影と平面図の作成を行う。518～521Dの精査を開始する。517Dの土層図の作成と写真撮影を行う。519～521Dの土層図を作成する。

12日には140Jの炉跡の精査と土層図の作成を行う。522～526Dを掘り始める。516Dの平面図・断面図、517・520・521Dの平面図、518・522・523・525Dの土層図を作成する。519Dの写真撮影を行う。

13日には140Jの炉跡の精査と平面図・断面図の作成を行う。528～532Dを掘り始める。514・516・518・522～524・530Dの写真撮影を行う。517・520Dの写真撮影と断面図の作成を行う。519・525Dの写真撮影と平面図・断面図の作成を行う。526～528Dの土層図作成と写真撮影を行う。529Dの土層図・平面図・断面図の作成と写真撮影を行う。

14日には533～536Dを掘り始める。511・514・522Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。513・515・518・523・524・526～528・530Dの平面図・断面図を作成する。531・532・535Dの写真撮影、土層図・平面図・断面図の作成を行う。533・534Dの写真撮影、土層図・平面図の作成を行う。536Dの土層図を作成する。

15日には536Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を実施し、西半の調査を終了する。

17日にはバックホーを使用して、東半の表土剥ぎを開始する。

19日には表土剥ぎ及び西半の埋め戻しを行う。遺構確認作業の結果、縄文時代中期と思われる土坑多数と古墳時代前期のものと思われる住居跡2軒(527・528Y)を検出する。537・538D、527・528Yを掘り始める。537・538D、528Yの土層図を作成する。

20日には539～542Dを掘り始める。537・539・540D、527Yの土層図を作成する。538Dの土層図作成と写真撮影を行う。527Yの遺物出土状態の写真撮影及び平面図の作成を行う。

21日には543～547Dを掘り始める。537Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。538Dの平面図・断面図を作成する。539・540Dの写真撮影を行う。541・542Dの土層図を作成する。527Yの柱穴・壁溝を掘り上げ、写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。528Yの写真撮影、断面図の作成を行う。

22日には548～551Dを掘り始める。527Dの断面図を作成し、写真撮影を行う。539Dの土層図・平面図を作成する。540・541・545Dの平面図・断面図を作成する。542Dの写真撮影、平面図の作成を行う。543・544・548～550Dの土層図を作成する。

23日には552～557Dを掘り始める。538・545Dの写真撮影を行う。540・542・548～550Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。543・544Dの写真撮影、断面図の作成を行う。546・547・552・554Dの土層図・平面図・断面図を作成し、写真撮影を行う。553Dの土層図・平面図を作成し、写真撮影を行う。555・556Dの土層図を作成する。

26日には555Dの断面図を作成する。556Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。557Dの土層図・平面図・断面図の作成、写真撮影を行う。全ての遺構の調査を終了し器材を撤収するとともに、埋め戻しを開始する。

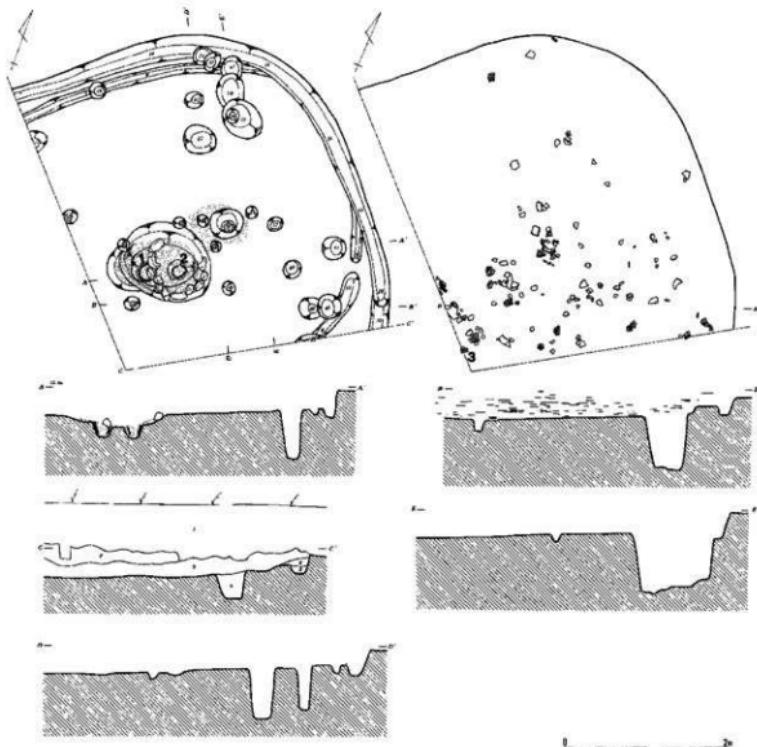
28日には埋め戻しを完了する。

第2節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

140号住居跡 (第4図)

〔構造〕西側と南側は調査区外にある。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方向) 不明。(壁高) 15~35cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 住居の拡張があったと思われ、部分的に2重に巡る。内側は上幅13~20cm・下幅5~10cm・深さ6~11cmを測る。外側は上幅20~30cm・下幅10~15cm・深さ7~16cmを測る。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。(炉) 130×100cmの梢円形を呈する石匂埋甕炉。深さ15cm前後の掘り込みをもち、深鉢形土器の胸部を埋設している。石匂いの疊の下にも埋設土器が検出されたが、拡張前の住居のものであろう。深さ18cm前後の掘り込むをもち、深鉢形土器の口縁部を埋設している。(柱穴) 拡張前の3本、拡張後の2本が主柱穴の一部と思われる。



第4図 140号住居跡 (1/60)

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 いわゆる廃棄パターンの状態を呈し、覆土2層から多量の土器片が出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

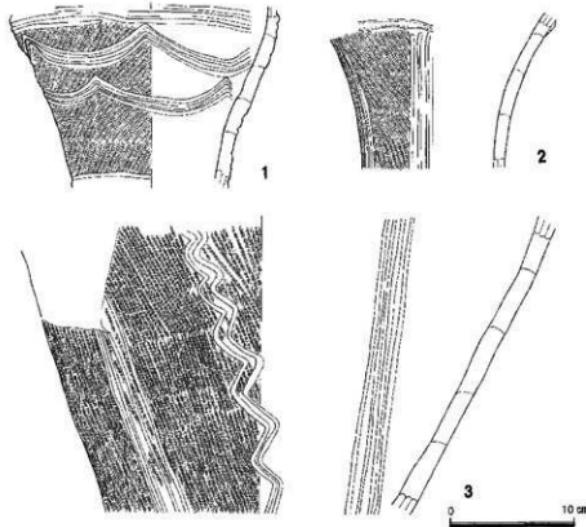
140号住居跡出土遺物（第5・6図、第21図1～5）

第5図1・2は炉に埋設された土器で、共に比熱のため器面が著しく荒れている。

1は胴部上半以上を利用している。口唇部を一部欠くが口径22cmを測る。R Lの単節斜繩文を地文とし、半截竹管による3条一組の平行沈線により文様が描かれる。口縁部及び胴部中位に平行沈線を横走させ、その間に4単位の連弧文を2段、入組み状に施す。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。拡張前の埋設土器。

2は胴部中位を利用している。上位に低い隆帯が巡り、L Rの単節斜繩文を地文とし3条一組の平行沈線による懸垂文が6単位施される。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。

3はLの撫糸文を地文とし、4条一組の平行沈線を5単位垂下させ、その間に2条一組の蛇行する沈線を施す。色調は灰白色 (10YR8/2) から明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には細礫を含む。覆土中



第5図 140号住居跡出土遺物 1 (1/4)

からの出土。

第6図4は口縁部に隆帯を波状に貼付し区画を作る。波頂部は口唇部を突出して小突起になり、沈線による円文が施される。また、波頂部から隆帯を垂下させ、横走する平行沈線と組み合わされて区画が形成される。区画内には縦位の集合する沈線が充填される。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

5はRLの単節斜繩文を地文とし、横位の蛇行する隆帯の貼付がみられる。色調は黒褐色(10YR3/2)からにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

6はRLの単節斜繩文を地文とし、平行沈線を横位・縦位に施して区画を形成する。平行沈線の交点には渦巻文が配される部分がある。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には石英・輝石を僅かに含む。

7は連弧文系の土器。LRの単節斜繩文を地文とする。文様は半截竹管によって描かれ、口縁部には2条一対の沈線を巡らせ、3条一組の沈線による連弧文が施される。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く、輝石を僅かに含む。

8・9は曾利系の土器。8は文様が半截竹管により描かれる。肥厚する口唇端部は集合する沈線が、口縁部には重弧文が施される。色調は暗褐色(10YR3/3)を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。9はLRの単節斜繩文を地文とし、蛇行する隆帯が口唇端部から垂下される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10は壺状の器形になろうか。屈曲する頸部に隆帯がめぐり、口縁部は直線的に開く。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈し、胎土には細礫・輝石を多く含む。

11は丸棒状の施文具により文様が描かれる。2条の横走する沈線間に刺突文が充填される。以下、「匚」字状の懸垂文が施される。懸垂文内の繩文は単節RL。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

12はLの捺糸文を地文とし、文様は半截竹管により描かれる。3条の横走する平行沈線により上下に分け、上部は連弧文と略三角形の沈線文の組み合わせ、下部は縦位の沈線が施されるようである。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・輝石を含む。

13は縦位の密集する沈線を地文とし、横線文・波状文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

14は条線を地文とし、沈線による渦巻文が施される。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・白色粒子を含む。

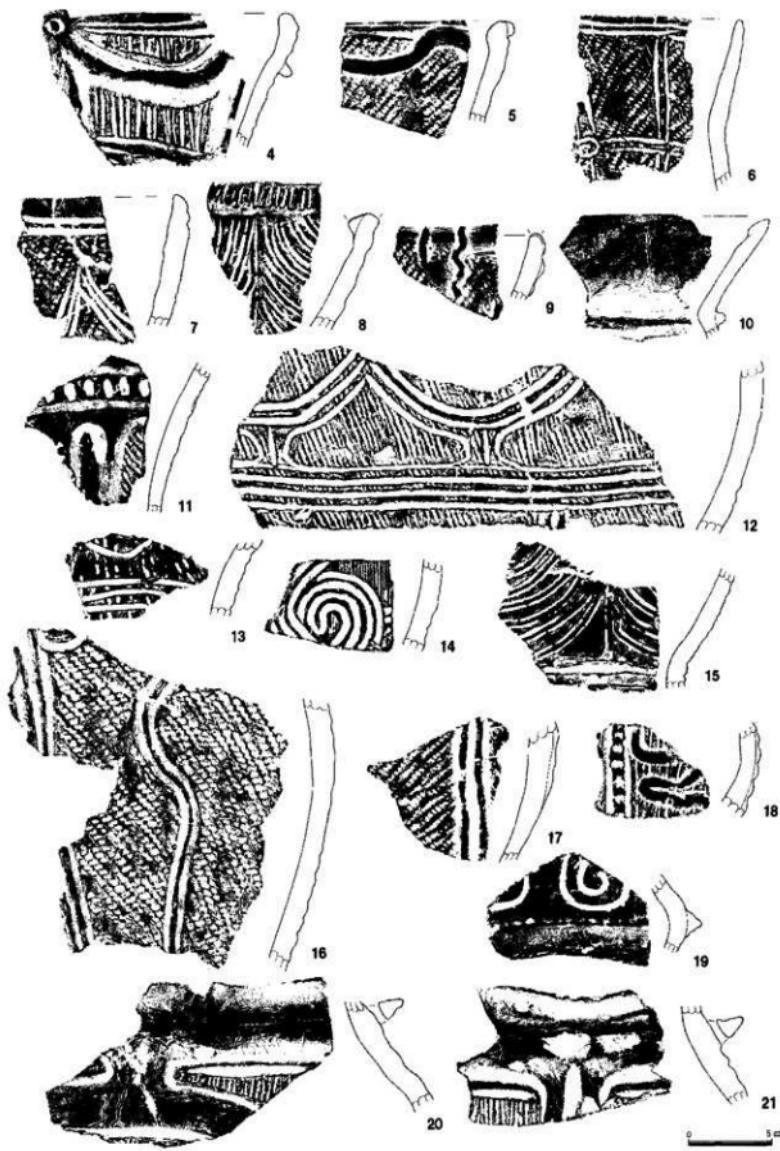
15は半截竹管により文様が描かれる。くびれ部に沈線が巡り、縦位の平行沈線で画し、重弧文が施される。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

16はLRの単節斜繩文を地文とし、3条一組の直行する懸垂文と2本一対の蛇行する懸垂文が施される。色調は暗赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

17はRLの単節斜繩文を地文とし、2本一対の隆帯が垂下する。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・白色粒子を僅かに含む。

18は縦位の密集する沈線を地文とする。半截竹管の刺突が加えられた隆帯と蛇行する隆帯が垂下する。色調は暗赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

19は浅鉢形上器であろうか。内屈する土器の上部に沈線による渦巻文が施される。色調はにぶい褐色



第6図 140号住居跡出土遺物2 (1/3)

(7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

20・21は同一固体と思われ有孔鈎付土器。縦位の集合する沈線を地文とし、隆帯による区画がなされる。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には細礫・輝石を含む。

4~21は、いずれも覆土中の出土。

第21図1~5は打製石斧。

1・2は両側縁に僅かなくびれをもつ分銅形に近い石斧。1は基部の一部を欠く。刃部はやや尖刃状を呈する。凝灰岩製で、重量78.5g。2は基部側1/2程度を欠く。表面に大きく礫面を残し、刃部は平刃状を呈する。粘板岩製で、重量は48.1g。

3は撥形の石斧。表面に大きく礫面を残す。刃部は僅かに円刃状を呈する。礫岩製で、重量は107.5g。

4・5は短冊形の石斧で、基部側1/2程度を欠く。共に横長の剥片を素材とする。4の刃部はほぼ円刃状を呈する。緑色片岩製で、重量は47.5g。5の刃部はほぼ平刃状を呈する。硬砂岩製で、重量は65.4g。

(2) 土坑

496号土坑(第7図)

〔構造〕 507・508号土坑との前後関係は不明である。(平面形) 楕円形。(規模) 190×130cm・深さ22cm 前後を測る。坑底は浅い皿状となり、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-10° - E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに土器片が出上した。

〔時期〕 加曾利E式期。

496号土坑出土遺物(第10図1~3)

1はR Lの単節斜繩文を地文とし、丸棒状の施文具による円形の刺突文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

2は条線が施される。色調は明黄褐色(10YR6/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

3はLの捺糸文が施される。色調は黒褐色(10YR3/2)を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。

497号土坑(第7図)

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 170×150cm・深さ41cm前後を測る。坑底はやや浅い鉢状となり、壁は75° 前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。(長軸方位) N-65° - E。

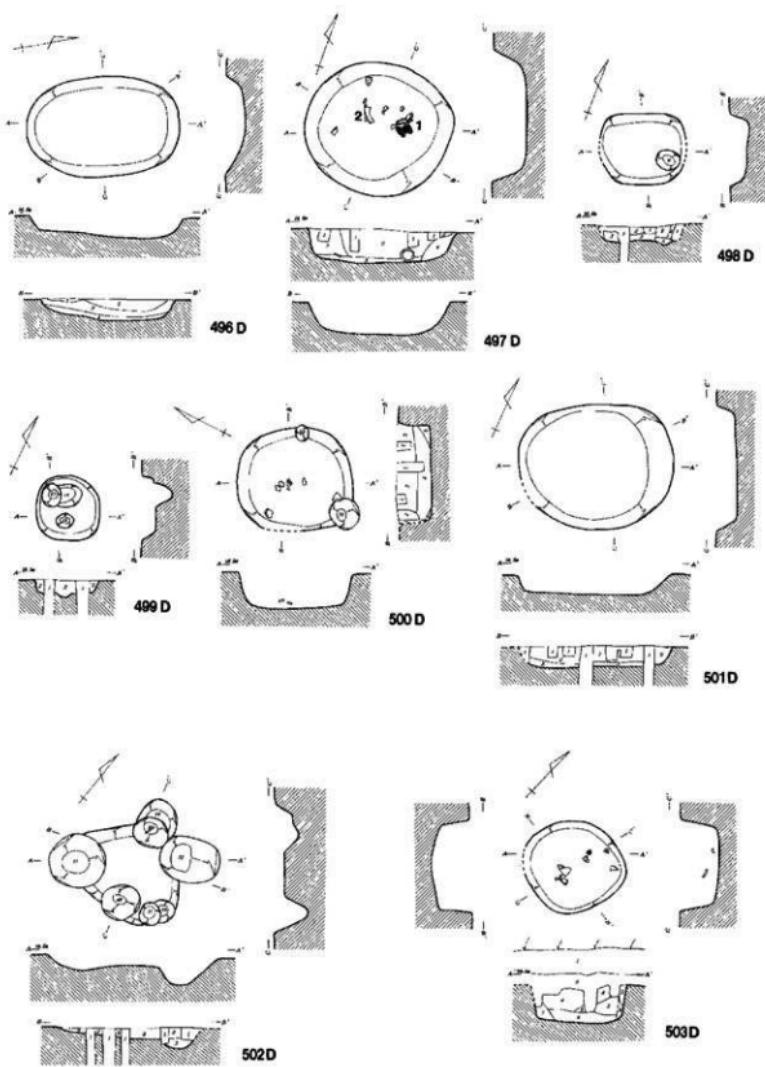
〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。



第7図 496~503号土坑 (1/60)

5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土 2層から土器片が多く出土した。坑底に完形土器が1個体出土した。

〔時期〕 勝坂III式期。

497号土坑出土遺物（第9図1・2、第10図4～7）

第9図1は口縁部の一部と底部を欠損する。頭部がくびれ、口縁部が直線的に開き、口唇部が短く内屈する深鉢形土器。頭部に隆帯を巡らせ口縁部と胴部を画する。胴部上位の文様は、3本一組の縦位の短隆帯を対面する4ヶ所に配して区画し、区画内には長梢円形に隆帯が貼付される。胴部の文様は2本一对の隆帯による、「し」字状の懸垂文が3単位、幅狭の「H」字状の懸垂文が2単位貼付され、半截竹管による縦位の密集した沈線が施される。色調は口縁部が暗褐色 (7.5YR3/4)、胴部が赤褐色 (5YR4/8) を呈し、胎土には粗砂を多く、雲母・白色粒子を僅かに含む。坑底に横転した状態で出土した。

2は口縁部1/5程度の破片からの推定復元のため正確さを欠く。口縁部は内湾し、口唇部は短く外屈する。刻みが加えられた隆帯により梢円形の区画が作られ、区画内には沈線による渦巻文や縦位・横位の集合沈線が充填される。色調は明褐色 (7.5YR5/6) 呈し、胎土には白色チャートを多く含む。覆土中からの出土。

第10図4は斜位の沈線と縦位の連続する幅広の刺突文がみられる。色調は橙色 (5YR6/1) を呈し、胎土には雲母・白色粒子を含む。

5・6は半截竹管による連続爪形文が付加された隆帯が貼付される。5の色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、細礫を含む。6の色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

7は縦位の沈線が密集して施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

498号土坑（第7図）

〔構造〕 (平面形) 條円形。(規模) 115×90cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。東側に小ピットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は不良である。(長軸方位) N—75°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

499号土坑（第7図）

〔構造〕 (平面形) 條円形。(規模) 85×75cm・深さ17cm前後を測る。坑底には小ピットの重複があり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は不良である。(長軸方位) N—17°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕検出されなかった。

〔時期〕覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

500号土坑（第7図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）145×130cm・深さ42cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、南側の壁を切って掘り込みがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位）N—20°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕4層から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E式期。

500号土坑出土遺物（第10図8～10）

8・9は同一個体か。RLの単節斜縄文を地文とし、隆帯による楕円形の区画がなされようか。色調は暗褐色 (7.5YR3/3) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

10は無節RLの斜縄文を地文とし、横位の隆帯から2本の隆帯が垂下する。色調は赤褐色 (5YR4/6) から暗褐色 (7.5YR3/3) を呈し、胎土には細礫を含む。

501号土坑（第7図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）190×145cm・深さ24cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、比較的浅い。壁は70°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位）N—68°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

501号土坑出土遺物（第10図11～16）

11はRLの単節斜縄文を地文とする。沈線による「匚」字状の懸垂文が施されようか。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

12は匚唇部下に太沈線が巡り、綴位の条線が施される。色調は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

13はRLの単節縄文が施される。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14はR Lの単節斜縄文を地文とする。横位に隆帯を貼付し、沈線による曲線的な文様が描かれる。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

15はL R、16はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線による懸垂文が施される。15の色調は暗褐色（7.5 YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。16の色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

502号土坑（第7図）

〔構造〕（平面形）不整形。（規模）不明×115cm・深さ9cm前後を測る。坑底は浅い皿状となり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。周囲に小ピットの重複が著しい。ピットとの前後関係は確認できなかつた。（長軸方位）N—65°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

502号土坑出土遺物（第10圖17~21）

17は胸部下端の破片。R Lの単節斜縄文を地文とする。沈線のなぞりがある隆帯が垂下し、半截竹管による平行沈線が2段施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細謹・白色粒子を含む。

18・19は連弧文系の土器。18はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線により連弧文が描かれる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。19はR Lの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による横位の平行沈線と連弧文が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。

20は縦位の密集する沈線を地文とする。太い隆帯が巡り、刻みが付加された隆帯が2本垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

21は縦位の沈線が多条に施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

503号土坑（第7図）

〔構造〕（平面形）椭円形。（規模）125×120cm・深さ44cm前後を測る。坑底は平坦で、やや北に傾斜している。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—80°—W。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。

硬質。

- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 4・6層から土器片が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

503号土坑出土遺物（第10図22～27）

22はL Rの単節縦繩文を縦位に施して地文とし、半截竹管による沈線が3条巡る。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

23はL Rの単節斜繩文を地文とする。隆帯による楕円形のX画がなされようか。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈し、胎土には輝石を多く含む。

24は斜位の条線を地文とし、4条の沈線がみられる。色調は明赤褐色 (5YR5/8) を呈し、胎土には細礫を多く含む。

25・26はL Rの単節斜繩文を地文とし、平行する沈線が垂下する。25の色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。26の色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には輝石を多く含む。

27は胸部下端の破片。条線が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

504号土坑（第8図）

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 95×90cm・深さ20cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。東側に小ピットがあり壁を破壊している。(長軸方位) N—48—W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。

- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

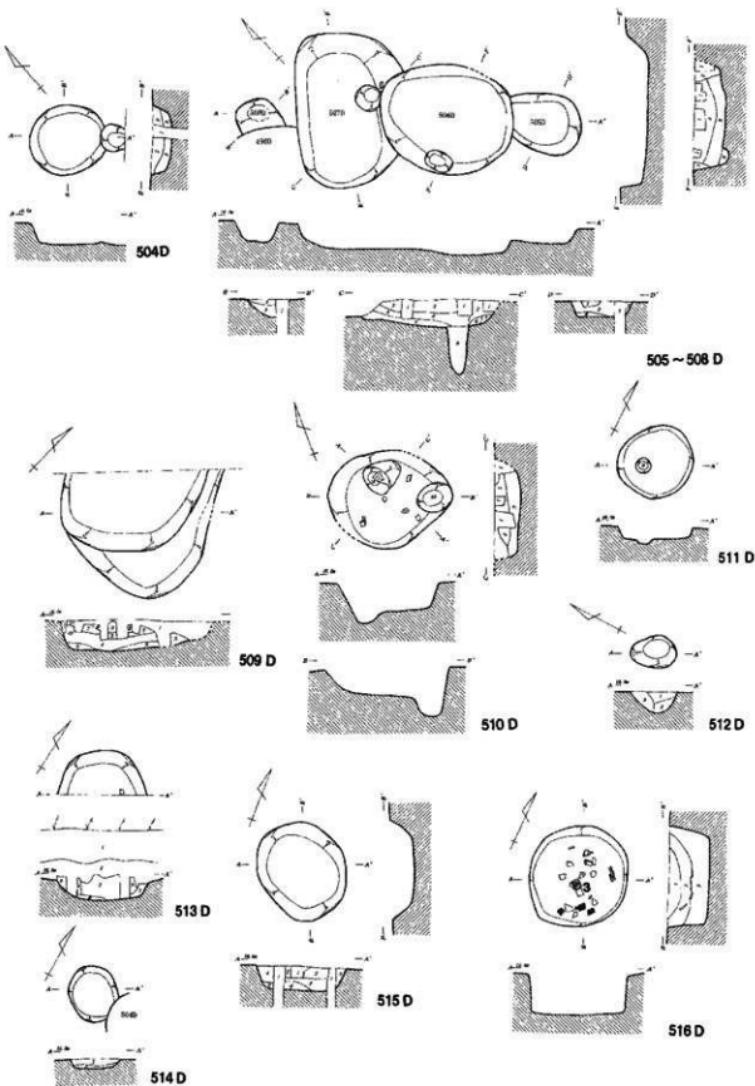
504号土坑出土遺物（第10図28～31）

28は口唇部下に2条の沈線が巡り、沈線間に刺突が加えられる。以下、Lの撲糸文が施される。色調は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

29はLの撲糸文を地文とし、3条一組の沈線により連弧文が施される。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈し、胎土には粗砂を含む。

30はLの撲糸文を地文とし、弧線が描かれる。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈し、胎土には粗砂を含む。

31はR Lの単節斜繩文が施される。色調は暗褐色 (10YR3/3) を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。



第8図 504~516号土坑 (1/60)

Scale bar: 0 to 2m

506号土坑（第8図）

〔構造〕 506号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明×75cm・深さ18cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 繩文時代中期。

505号土坑出土遺物（第10図32・33）

32は口縁部から重弧文が施される。色調は黄橙色（7.5YR7/8）を呈し、胎土には粗砂を含む。

33は隆帯に沿って結節沈線文が施される。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

506号土坑（第8図）

〔構造〕 505・507号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）170×140cm・深さ38cm前後を測る。坑底はややすく鉢状となり、西側に小ビットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。

（長軸方位）N-45°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

506号土坑出土遺物（第10図34～38）

34は大きく内湾する口縁部破片。R Lの単節斜繩文を地文とし、口唇部下に三角文に類似する連続する刺突文が施され、以下、沈線による波状文が巡る。色調は暗褐色（7.5YR3/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

35はL Rの単節斜繩文が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

36は条線を地文とし、縦位に沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

37は半截竹管により縦位に沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

38は条線が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

507号土坑（第8図）

〔構造〕 496・506号土坑との前後関係は不明である。（平面形） 楕円形。（規模） 200×140cm・深さ33cm 前後を測る。坑底は平坦で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。やや深い小ビットがある。（長軸方位） N-35° -E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

- 6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

- 7層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。硬質。

- 8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曽利E II式期。

507号土坑出土遺物（第10図39～44）

39は羽状に施されたL Rの単節縄文を地文とし、沈線による懸垂文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

40は断面三角形の低い隆帯が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

41はLの撚糸文を地文とし、2条の沈線が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細縞を僅かに含む。

42はR Lの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色（5YR5/8）を呈し、胎土には粗砂を含む。

43はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線による文様が描かれる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

44はL Rの単節斜縄文を地文とし、沈線の懸垂文がみられる。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

508号土坑（第8図）

〔構造〕 496号土坑との前後関係は不明である。（平面形） 楕円形か。（規模） 不明×55cm・深さ20cm前後を測る。やや大きめのビットを思わせる。壁は60° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位） N-35° -E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

509号土坑（第8図）

〔構造〕 北側は調査区外で、南側は重複した形をなしている。（平面形）不整形。（規模）不明×190cm・深さ14～39cmを測る。坑底は平坦で壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—45°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

509号土坑出土遺物（第11図1～6、第21図6）

第11図1はLの燃え文を地文とし、隆帯の貼付による楕円形の区画が作られようか。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。

2・4はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯が垂下する。2の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。4の色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

3は条線を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調は暗赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には細礫を含む。

5はL Rの単節縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を含む。

6はL Rの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第21図6は両側縁が僅かにくびれる打製石斧。基部を欠損する。刃部は円刃状を呈する。粘板岩製で、重量は211.5g。

510号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）150×125cm・深さ36cm前後を測る。坑底はややすく鉢状で東側と西側に浅い掘り込みがある。壁は75°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—72°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

510号土坑出土遺物（第11図7～11）

7は口唇部下に3条の沈線が巡り、L Rの単節斜縄文が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8はL Rの単節斜繩文を地文とし、平行する沈線が垂下する。色調は褐色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細縫を僅かに含む。

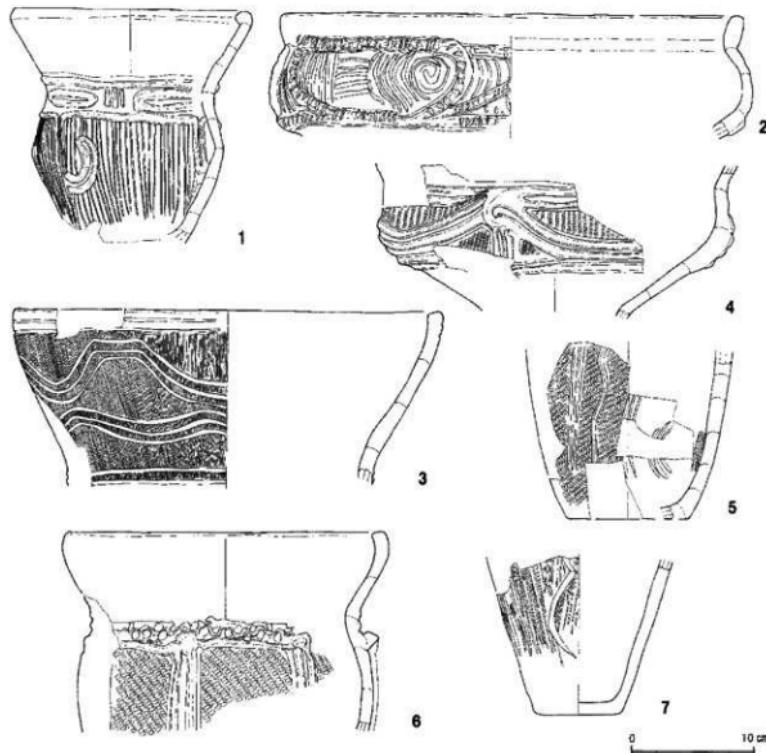
9は条線が施される。色調は赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細縫を含む。

10・11は曾利系の土器。10は口唇部下に沈線が巡り、以下、斜位の集合する沈線が施される。肥厚する口縁部内面には斜位の集合する沈線が加えられる。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。11は重弧文が施されようか。内面には縦位の沈線がみられる。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には細縫を僅かに含む。

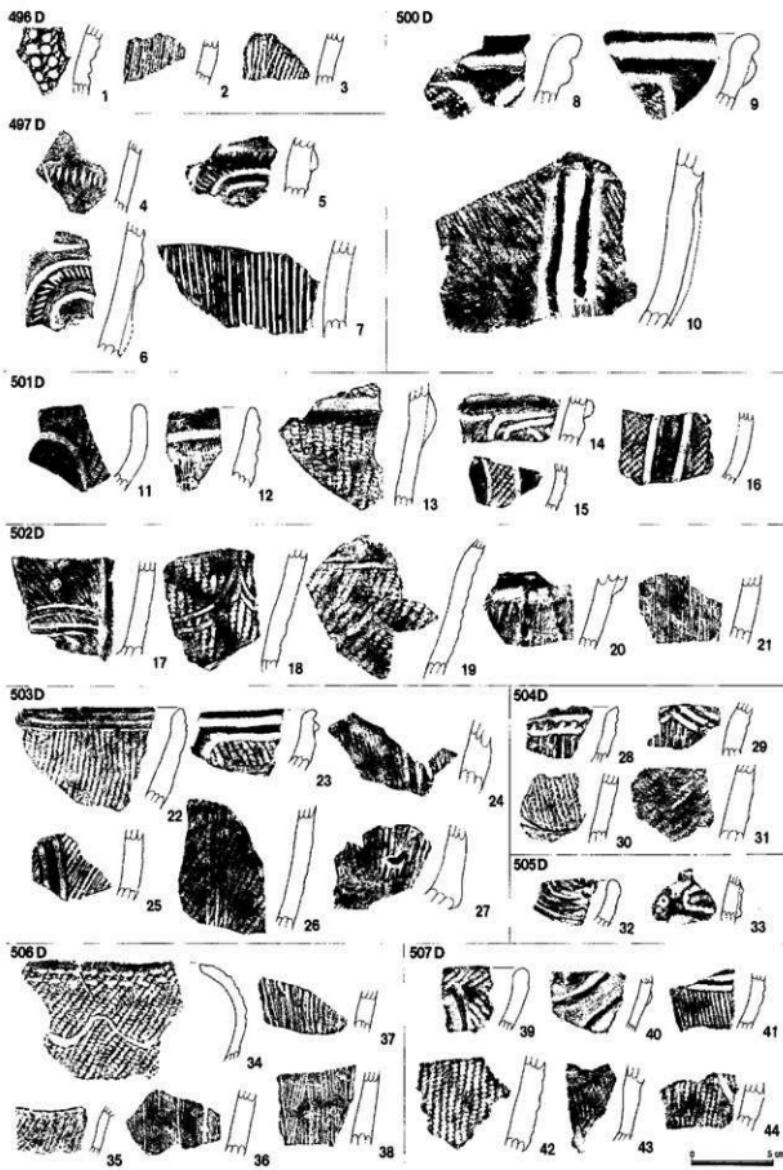
511号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径95cm・深さ14cm前後を測る。坑底は浅いすり鉢状で小ピットがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N—20°—W。

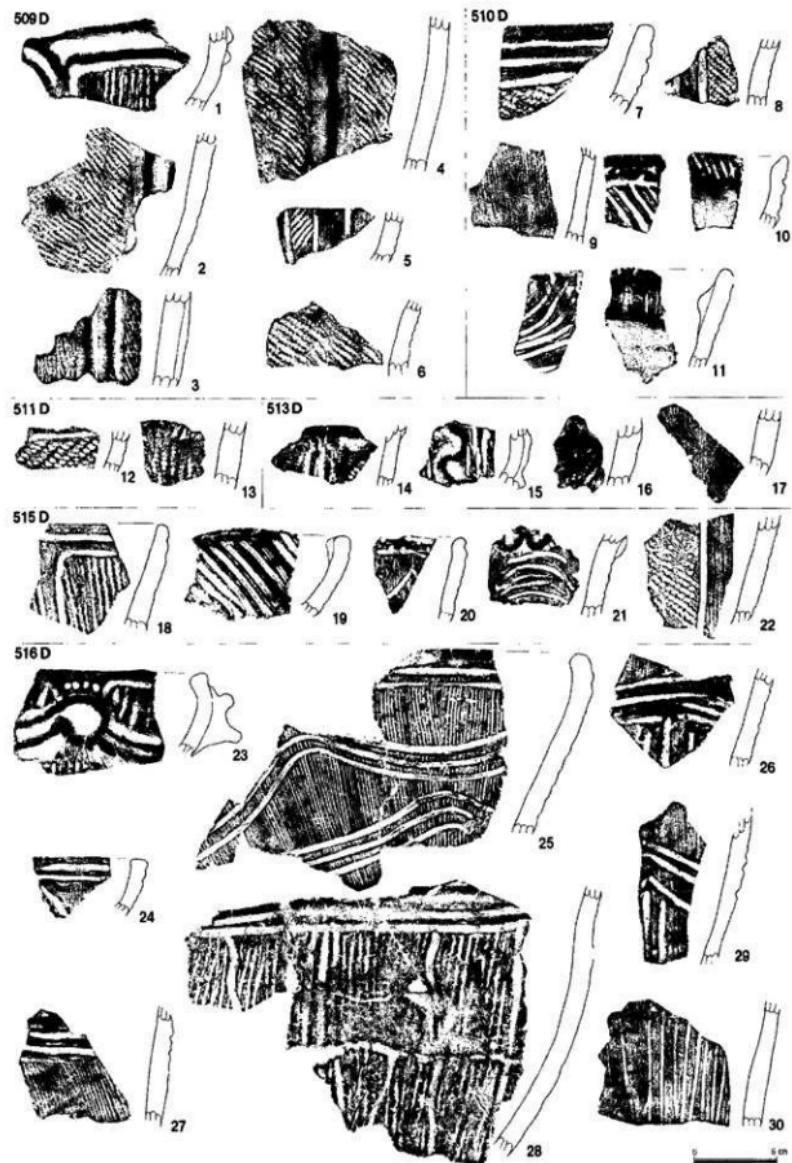
〔覆土〕黒褐色土（10YR3/2）の単一土層。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。



第9図 土坑出土遺物 1 (1/4)



第10図 上坑出土遺物 2 (1/3)



第111図 土坑出土遺物3 (1/3)

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

511号土坑出土遺物（第11図12・13）

12は横位の沈線とR Lの単節斜繩文が施される。色調は明褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土には細縫が多く含む。

13はL Rの単節繩文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。

512号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）60×40cm・深さ31cm前後を測る。規模の小さいすり鉢状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-32°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 覆土の状態から繩文時代のものと思われる。

513号土坑（第8図）

〔構造〕南側は調査区外である。（平面形）楕円形か。（規模）不明×110cm・深さ22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

6層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

7層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

8層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

513号土坑出土遺物（第11図14～17）

14はL Rの単節斜繩文を地文とし、横位の隆帯と2本の垂下する隆帯がみられる。色調は褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には細縫・雲母を僅かに含む。

15は蛇行する隆帯と、半截竹管による平行沈線が垂下する。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細縫を含む。

16はR Lの単節斜繩文が施される。色調は橙色（5YRE6/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

17は条線が施される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には細縫を僅かに含む。

514号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）70×60cm・深さ10cm前後を測る。坑底は浅い皿状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—25°—W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕検出されなかった。

〔時期〕覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

515号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）130×110cm・深さ27cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位）N—70°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

6層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む、炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

515号土坑出土遺物（第11図18～22）

18はLの撚糸文を地文とする。口唇部下に沈線を巡らせ、縦長の矩形の区画が作られようか。色調は暗赤褐色（5YR3/4）を呈し、胎土には粗砂が含まれる。

19は斜位の沈線が集合して施される。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

20は口唇部下に2条の沈線を巡らせ、半截竹管による刺突が加えられる。条線を地文とし、連弧文が施されようか。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

21は波行する隆帯が横位に貼付され、以下、多段の沈線による弧線が施される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

22はL Rの単節斜綱文を地文とし、沈線が垂下する。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

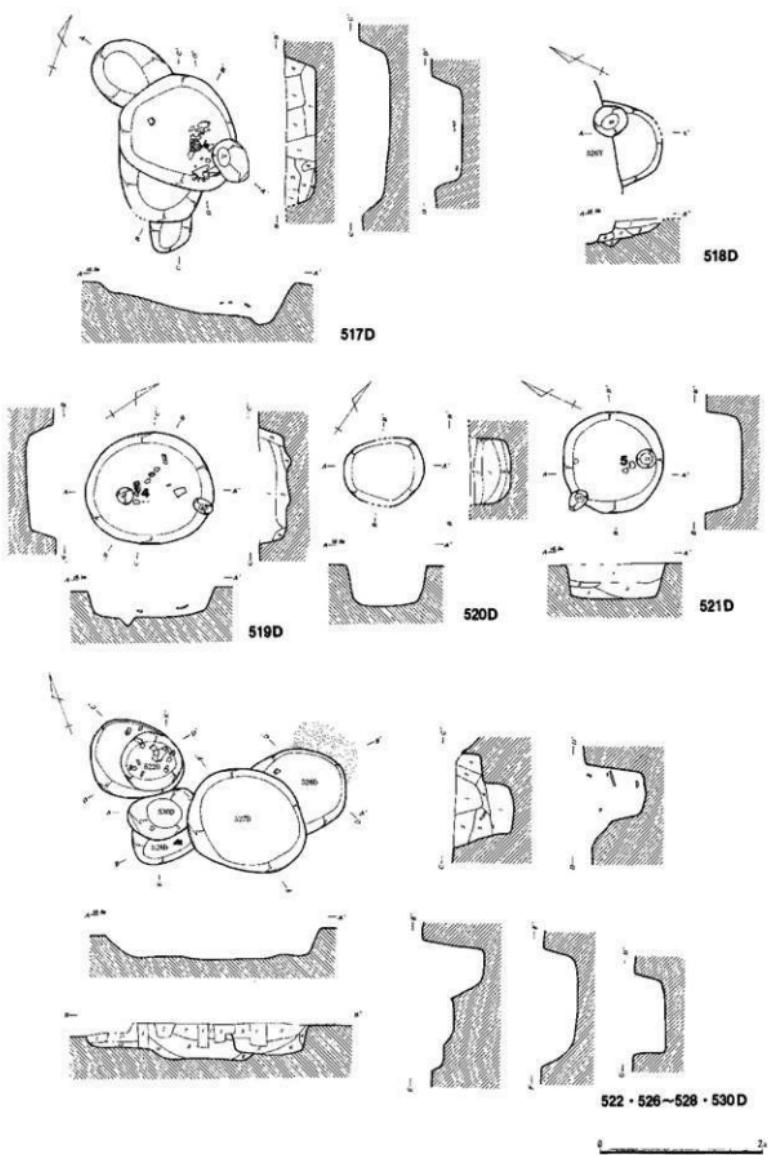
516号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径130cm・深さ50cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位）N—28°—W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。



第12図 517~522・526~528・530号土坑 (1/60)

硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
〔遺物〕 2層から土器片が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

516号土坑出土遺物（第9図3、第11図23～30）

第9図3は頭部以上1/3程度の遺存度。口縁部が僅かに内湾しながら開く。口唇部及び頭部に2条の沈線を巡らせ口縁部を画する。条線を地文とし、3条一組の沈線により不規則な波状文を2段巡らせる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には片岩類を僅かに含む。

第11図23は渦巻文が付加された2本一对の隆帯により区画がなされ、縦位の集合する沈線が充填される。渦巻文の上位には円形の刺突文が施される。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

24・25は連弧文系の土器。条線を地文とする。24は口唇部下に2条の沈線が巡り、斜位の沈線がみられる。色調は暗褐色 (7.5YR3/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。25は口唇部下に2条の沈線が巡り、3条一組の沈線による波状文が2段施される。色調は褐灰色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

26・27・29は同一個体か。条線を地文とし、3条一組の沈線を斜位・縦位に施す。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28はLの捲糸文を地文とする。4条の沈線を巡らせ、3条一組の沈線による懸垂文、ゆるやかに蛇行する懸垂文が交差に施される。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を僅かに含む。

30は縦位の沈線が集合して施される。色調は明黄褐色 (10YR6/6) を呈し、胎土には輝石を多く含む。

517号土坑（第12図）

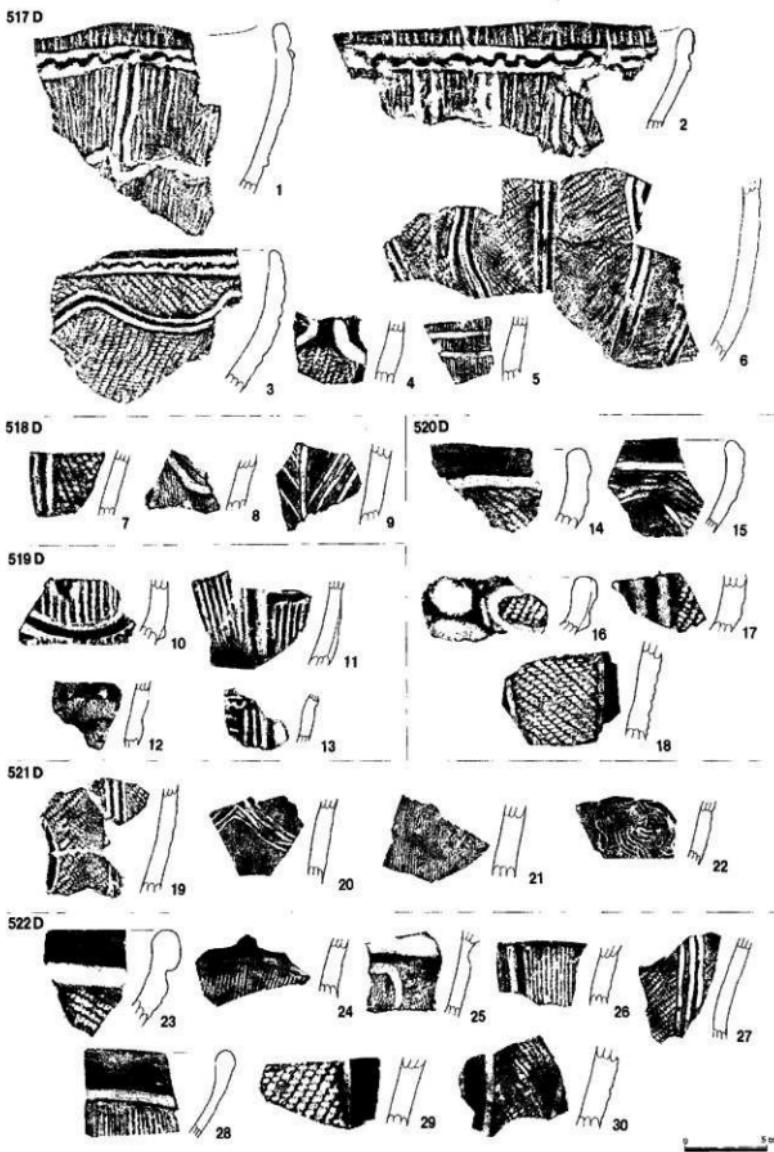
〔構造〕 重複しているピットとの前後関係は不明である。(平面形) 不整形。(規模) 240×215cm・深さ38cm前後を測る。坑底は北西から南東にかけて傾斜する。壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-75°-W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 7層から土器片が多く出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。



第13図 土坑出土遺物4 (1/3)

517号土坑出土遺物（第13図1～6）

1・2は同一個体の土器か。小波状口縁を呈する。Lの燃糸文を地文とし、口唇部下には交互刺突を巡らす。2条一対の沈線が垂下し、波状沈線文が巡る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

3は口唇部下に半截竹管による平行沈線を巡らせ、交互刺突が加えられる。半截竹管による波状文を境にして、R Lの単節斜繩文を羽状に施す。色調は暗褐色（10YR3/3）を呈し、胎土には細礫を含む。

4はR Lの単節斜繩文を地文とし、太沈線により区画がなされる。色調は褐灰色（5YR4/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

5は条線を地文とし、横位の沈線が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

6はL Rの単節斜繩文を地文とし、半截竹管による平行沈線で直行・蛇行する懸垂文が交互に施される。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。外面には部分的に炭化物が付着する。

518号土坑（第12図）

〔構造〕 526号住居跡に切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×110cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-32°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。焼土粒子を含む。硬質。

5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

518号土坑出土遺物（第13図7～9）

7はL Rの単節斜繩文を地文とし、平行沈線が垂下する。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

8は条線を地文とし、連弧文が描かれようか。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

9は矢羽根状の沈線文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。

519号土坑（第12図）

〔構造〕（平面形）不整円形。（規模）径145cm・深さ36cm前後を測る。坑底は平坦で、南側に浅いピットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位）N-6°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 2層から少量だが大きめの土器片が出土した。

〔時期〕 加曾利E I式期。

519号土坑出土遺物 (第9図4、第13図10~13)

第9図4は1/5程の破片からの推定復元のため、径の大きさについては正確さに欠ける。Lの燃糸文を地文とし、2本一対の隆帯により区画を作る。頸部は無文帯になる。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

第13図10はLの燃糸文を地文とし、隆帯による区画が作られる。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

11は胸部下端の破片。2本一対の隆帯による区画がなされ、半截竹管による多条の沈線が充填される。色調は暗赤褐色 (5YR3/4) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

12はヒダ状圧痕文が横位に残される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

13は縦位に細い隆帯が貼付され、角押文が縦位・横位に施される。色調は赤褐色 (5YR4/6) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

520号土坑 (第12図)

〔構造〕 526号住居跡に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 95×85cm・深さ56cm前後を測る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。比較的掘り込みの深い良好な遺存状態である。(長軸方位) N—60°—E。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。526Y貼床。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

520号土坑出土遺物 (第13図14~18、第21図7)

第13図14は口唇部下に太沈線が巡り、RLの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、部分的に黒斑が認められる。胎土には細謹を僅かに含む。

15は口唇部下に太沈線が巡る。LRの単節縄文を地文とし、弧線が施される。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈し、粗砂を含む。

16は隆帯により渦巻文と区画文が作られ、区画内にはLRの単節斜縄文がみられる。色調は暗褐色

(10YR3/3)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

17はL Rの単節斜縄文を地文とし、3条の太沈線が垂下する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

18はL Rの単節斜縄文を地文とする。平行する沈線が垂下し、沈線間は磨消される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第21図7は幅広の大型剥片。礫面を打面として剥離している。安山岩製で、重量は61.5g。

521号土坑（第12図）

〔構造〕 533号土坑との前後関係は不明である。(平面形)円形。(規模)径125cm・深さ46cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。南側に浅い小ピットがある。遺存状態は良好である。(長軸方位)E-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

521号土坑出土遺物（第9図5、第13図19～22）

第9図5はL Rの単節斜縄文を地文とし、半截竹管により直行・蛇行する懸垂文が交互に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

第13図19はR Lの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による直行・蛇行する懸垂文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫を含む。

20は条線を地文とし、4条一組の沈線により連弧文が施される。色調は赤褐色(5YR4/8)を呈し、胎土には細礫を多く含む。

21は縦位、22は蛇行する条線が施される。21の色調は褐色(10YR4/6)を呈し、胎土には細礫を含む。22の色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

522号土坑（第12図）

〔構造〕 (平面形)楕円形。(規模)120×90cm・深さ72cm前後を測る。坑底は南側が一段低くなり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。(長軸方位)N-45°-W。

〔覆土〕

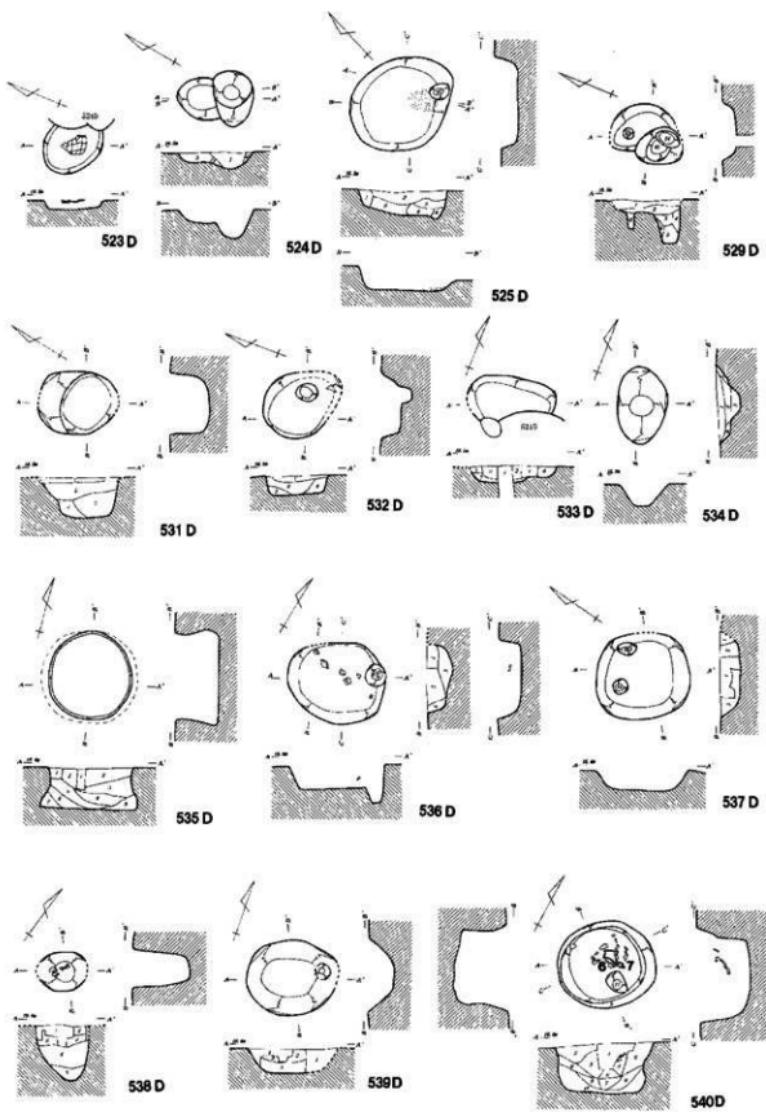
1層 黒褐色土(5YR2/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。硬質。

4層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

5層 灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。



第14図 523～525・529・531～540号土坑 (1 / 60)

6層 暗赤褐色土（5YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

7層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
やや硬質。

〔遺物〕東側の覆土中から土器片が多く出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

522号土坑出土遺物（第13図23～30、第21図8）

第13図23は口唇部下に太沈線が巡り、R Lの単節斜縄文が施される。色調は明黄褐色（10YR7/6）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

24はRの撚糸文を地文とし、沈線による弧線文が施される。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

25は条線を蛇行して施し、太沈線で文様が描かれる。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

26は半截竹管による集合する沈線が縦位に施され、2本の隆帯が垂下する。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

27はR Lの単節斜縄文を地文とし、3条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

28は口唇部下に太沈線が巡り、条線が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には粗砂・輝石を僅かに含む。

29・30は沈線間が磨消される。29はR L、30はL Rの単節斜縄文を地文とする。29の色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。30の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

第21図8は分銅形の打製石斧。横長の剥片を素材とする。表面に大きく礫面を残す。刃部は円刃状を呈する。硬砂岩製で、重量は61.5g。

523号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）70×65cm・深さ14cm前後を測る。坑底は浅い皿状で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-75°-W。

〔覆土〕ローム粒子を僅かに含む硬質の黒褐色土（10YR3/1）の單一土層。

〔遺物〕覆土上層からやや大きめの土器片1点が出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

523号土坑出土遺物（第15図1）

1は口縁部から胸部下端まで遺存する大破片。口縁部及び胴部下位に3条の沈線を巡らせ、その間に2条一対の沈線を2段施して区画し、L Rの単節斜縄文を充填する。色調は上半部が黒褐色（10YR3/1）、下半部がにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

524号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）ピットが2基連結した形状をとる。（規模）90×70cm・深さ38cm前後を測る。坑底は南側が一段低く、壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は不良である。（長軸方位）N-35°-W。

W。

(覆土)

- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

(遺物) 覆土中から土器片が僅かに出上した。

(時期) 加曾利E II式期。

524号土坑出土遺物 (第15図 2~4)

2はR L、3はL Rの単節斜繩文を地文とし、平行する沈線を垂下させ、沈線間は磨消される。2の色調は黒褐色 (7.5YR2/2) を呈し、胎土には片岩が目立つ。3の色調は橙色 (7.5YR7/6) を呈し、胎土には輝石を含む。内面には炭化物が付着する。

4は縦位・斜位に条線が施される。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫を含む。

525号土坑 (第14図)

(構造) 526号住居址に切られる。(平面形) 不整形。(規模) 140×115cm・深さ30cm前後を測る。坑底は浅く平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。南東側に焼土と浅いピットがある。(長軸方位) N-80°-W。

(覆土)

- 1層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼上粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/3)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 6層 暗赤褐色土 (5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。

(遺物) 覆土中から土器片が僅かに出上した。

(時期) 加曾利E式期。

525号土坑出土遺物 (第15図 5~7)

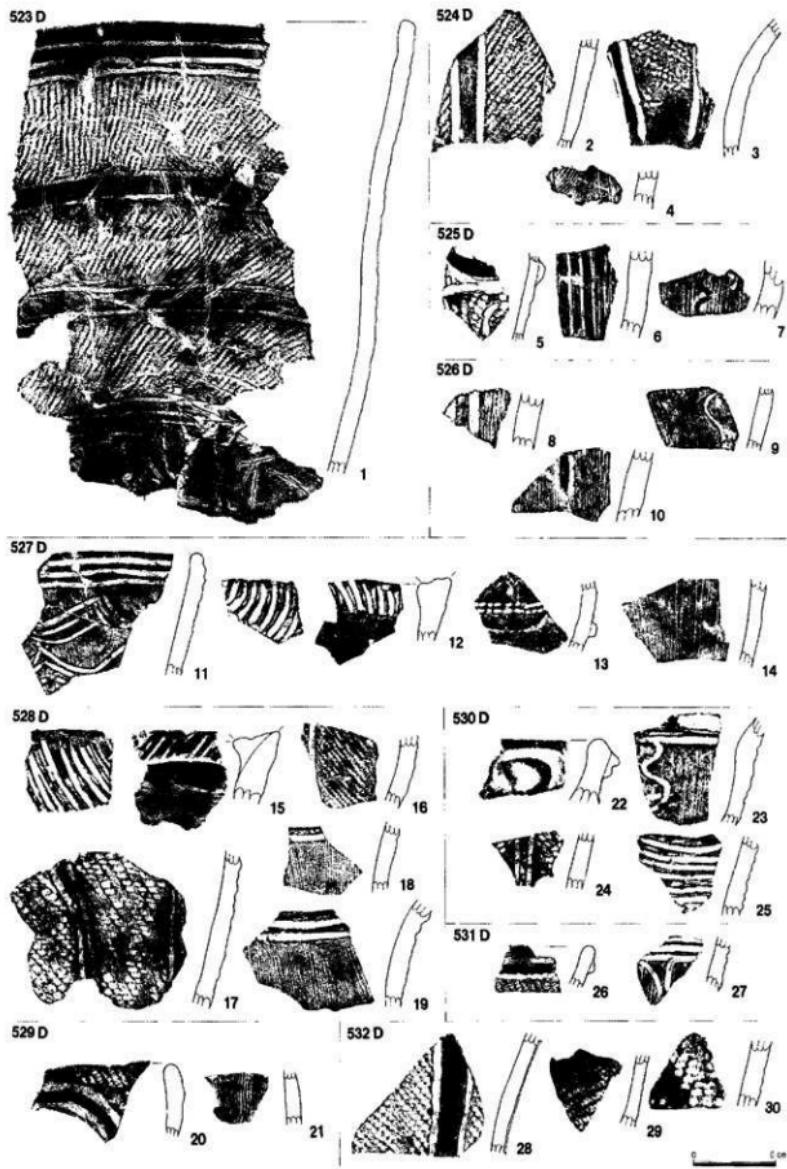
5は弧状に隆帯が貼付され、太沈線が巡る。R Lの単節斜繩文を地文とし、沈線による懸垂文が施されようか。色調は褐灰色 (7.5YR5/5) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

6は縦位に集合する沈線が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は縦位の条線を地文とし、蛇行する細い隆帯が垂下する。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には細礫が多く、雲母を僅かに含む。

526号土坑 (第12図)

(構造) 527号土坑を切る。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×105cm・深さ41cm前後を測る。坑底は平坦で浅い皿状となり、壁は80°前後の角度で立ち上がる。東側の焼土を切る。(長軸方位) N-80°-E。



第15図 土坑出土遺物 5 (1/3)

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 褐色土 (10YR4/4)。ロームブロック。硬質。

5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

526号土坑出土遺物（第15図8～10）

8は条線を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

9は縦位・斜位の条線を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

10は縦位の条線を地文とし、降帶が垂下する。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

527号土坑（第12図）

〔構造〕 526号土坑に切られる。528・530号土坑との前後関係は不明である。（平面形） 楕円形。（規模） 145×130cm・深さ46cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は良好である。（長軸方位） N-25°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

527号土坑出土遺物（第15図11～14）

11は連弧文系土器。口唇部下に3条の沈線が巡り、条線を地文とし、3条一組の沈線による連弧文が2段観察できる。色調は灰黄褐色 (10YR4/2) を呈し、胎土には粗砂を含む。

12は曾利系の土器。口縁部に重弧文、口唇端部に集合する沈線が施される。色調は黒褐色 (10YR3/2) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

13は断面三角形の隆帶で区画されようか。隆帶に沿って2条の結節沈線文が施され、区画内には沈線による横位の鋸歯文がみられる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には雲母を多く含む。

14は条線が縦位に施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

528号土坑（第12図）

〔構造〕 526号住居跡に切られる。527号土坑・530号上坑の前後関係は不明である。(平面形) 楕円形か。
 (規模) 不明×不明・深さ30cm前後を測る。坑底は浅い皿状となる。壁は60° 前後の角度で立ち上がる。
 (長軸方位) E—W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

528号土坑出土遺物（第15図15～19）

15は曾利系の土器。口縁部に重弧文、口唇端部に斜位の集合する沈線が施される。色調は明赤褐色 (5YR5/8) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

16・17はR Lの単節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。16の色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。17の色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。
 18・19は同一個体か。条線を地文とし、横位に沈線が施される。色調は明黄褐色 (10YR6/6) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

529号土坑（第14図）

〔構造〕 (平面形) 不整形。(規模) 85×80cm・深さ17cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70° 前後の角度で立ち上がる。南側の浅い掘り込みとの前後関係は不明である。(長軸方位) N—55° —W。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

529号土坑出土遺物（第15図20・21）

20はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の大沈線により弧線が描かれる。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

21は継位に条線が施される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

530号土坑（第12図）

〔構造〕 526号住居跡に切られる。527・528号土坑の前後関係は不明である。(平面形) 楕円形。(規模) 80×55cm・深さ26cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60° 前後の立ち上がる。(長軸方位) N—85° —

W。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む硬質の灰黄褐色土（10YR4/2）の单一上層。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

530号土坑出土遺物（第15図22～25）

22は隆帯が渦巻状に貼付される。色調は明赤褐色（5YR5/8）を呈し、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

23は横位に沈線が施され、条線を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

24はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

25は集合する沈線が弧状に施される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細礫を含む。

531号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）100×75cm・深さ50cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。北側に浅い掘り込みがある。（長軸方位）N-30°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

531号土坑出土遺物（第15図26・27）

26は口縁部に隆帯が巡り、R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

27は3条の沈線が巡り、条線を地文とし、弧線が施される。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には細礫を含む。

532号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）100×80cm・深さ23cm前後を測る。坑底は平坦で、東側に浅いピットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-72°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E II式期。

532号土坑出土遺物（第15図28～30）

28はL R Lの複節斜繩文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨消される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

29・30はR Lの単節斜繩文が施される。29の色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。30の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

533号土坑（第14図）

〔構造〕521号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明×110cm・深さ17cm前後を測る。坑底は浅く皿状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。遺存状態は不良である。（長軸方位）N-68°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕検出されなかった。

〔時期〕覆土の状態から、繩文時代のものと思われる。

534号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）100×60cm・深さ26cm前後を測る。坑底はすり鉢状で、壁は70°前後で立ち上がる。遺存状態は不良である。（長軸方位）N-25°—W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から、繩文時代のものと思われる。

535号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径120cm・深さ54cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが坑底から30cmがオーバーハングしている。比較的大きく掘り込みも深い整った土坑である。

（長軸方位）N-13°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗赤褐色土 (5YR3/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。やや粘性あり。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。やや粘性あり。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

535号土坑出土遺物（第17図1～7）

- 1は口唇部下に太沈線が巡り、条線を地文とし、沈線による区画が作られようか。色調は褐灰色 (7.5 YR5/1) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。
- 2は連弧文系土器。条線を地文とし、半截竹管による3条一組の沈線により文様が描かれる。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には細謹を多く含む。
- 3は口縁部及び口唇端部に斜位の集合する沈線が施される。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。
- 4は条線を地文とし、蛇行する隆帯が垂下する。色調は浅黄橙色 (10YR8/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。
- 5はL Rの単節斜繩文を地文とし、沈線により橢円形の区画がなされる。区画の連結部分は渦巻文になる。色調は橙色 (7.5YR7/6) を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。
- 6はL Rの単節斜繩文を地文とし、3条一組の沈線が弧状に施される。色調は暗褐色 (7.5YR3/3) を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。
- 7はLの燃糸文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

536号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）120×100cm・深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後で立ち上がる。東側の壁際にやや浅いピットがある。遺存状態は良好である。（長軸方位）N—55°—E。
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 3層から土器片が出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

536号土坑出土遺物（第17図8～11）

8は隆帯により区画と渦巻文が作られる。区画内はL Rの単節斜縄文になる。色調は暗褐色（7.5YR 3/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

9はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯により区画がなされる。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

10はL Rの単節斜縄文を地文とし、沈線が弧状に施される。色調は褐灰色（10YR5/1）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

11はR Lの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨消される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

537号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）120×105cm・深さ24cm前後を測る。坑底はやや隆起する。壁は50°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—35°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕

覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕

繩文時代中期。

537号土坑出土遺物（第17図12～14）

12は細い隆帯と沈線を巡らせ、その間に斜位の沈線が施される。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

13は平行する沈線間に斜位の沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

14はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が弧状に施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

538号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）62×55cm・深さ70cm前後を測る。ピット状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（長軸方位）N—55°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土（0YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕

覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕

加曾利E II式期。

538号土坑出土遺物（第17図15～17）

15は降帯により区画がなされる。区画内にはR Lの単節斜縄文がみられる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

16は沈線が巡り、R Lの単節斜縄文を地文とし、沈線による「匁」字状の懸垂文が施される。色調は橙色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

17はLの無節斜縄文が施される。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

539号土坑（第14図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）110×95cm・深さ33cm前後を測る。坑底はすり鉢状となり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。東側に小ビットがある。（長軸方位）N-70°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出たした。

〔時期〕 加曾利E式期。

539号土坑出土遺物（第17図18・19）

18は口唇部下に太沈線が巡り、R Lの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

19はL Rの単節斜縄文を地文とし、平行する沈線が垂下する。沈線間は磨消される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

540号土坑（第14図）

〔構造〕 555号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）径110cm・深さ65cm前後を測る。坑底は平坦で、遺存状態は良好である。壁は80°前後の角度で立ち上がるが、坑底から30cm前後でオーバーハングしている。全体に掘り込みが深く整った土坑である。（長軸方位）E-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。硬質。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

6層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。硬質。

7層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

9層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

10層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 4・6層から土器片がまとめて出土したが、遺存状態が悪かった。

〔時期〕 加曾利E II式期。

540号土坑出土遺物（第9図6・7、第17図20～26、第21図9）

第9図6は1/5程の破片からの推定復元のため、径の大きさは確実さを欠く。無文の口縁部は内湾し、頸部はくびれ、胴部は膨らむ。屈曲した頸部には連続した交互刺突が巡らされる。L Rの単節斜繩文を地文とし、横位に隆帯を貼付し、2本一対の隆帯が垂下する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

7は条線を地文とし、蛇行する沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

第17図20は角頭状の小突起が付く口縁部破片。小突起には隆帯による渦巻文が付される。R Lの単節斜繩文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

21～23は連弧文系土器。21は条線を地文とし、3条一組の沈線により連弧文が描かれる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。22はLの撚糸文を地文とし、2条一対の沈線により波状文が施される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。23はR Lの単節斜繩文を地文とし、3条一組の沈線により弧線が描かれる。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

24は条線を地文とし、沈線が垂下する。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、粗砂を僅かに含む。

25は条線を地文とし、半截竹管による横位・縦位の平行沈線が施される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細蹠・片岩を多く含む。

26はLの撚糸文を地文とし、3条一組の沈線が垂下する。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細蹠を僅かに含む。

第21図9は短冊形の打製石斧。横長の剥片を素材とする。表面に蹠面を残す。刃部は尖刃状を呈する。硬砂岩製で、重量は94.5g。

541号土坑（第16図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）130×120cm・深さ40cm前後を測る。坑底は浅い皿状となり、壁は60°前後の角度で立ち上がる。比較的整った形状をしている。（長軸方位）N—57°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

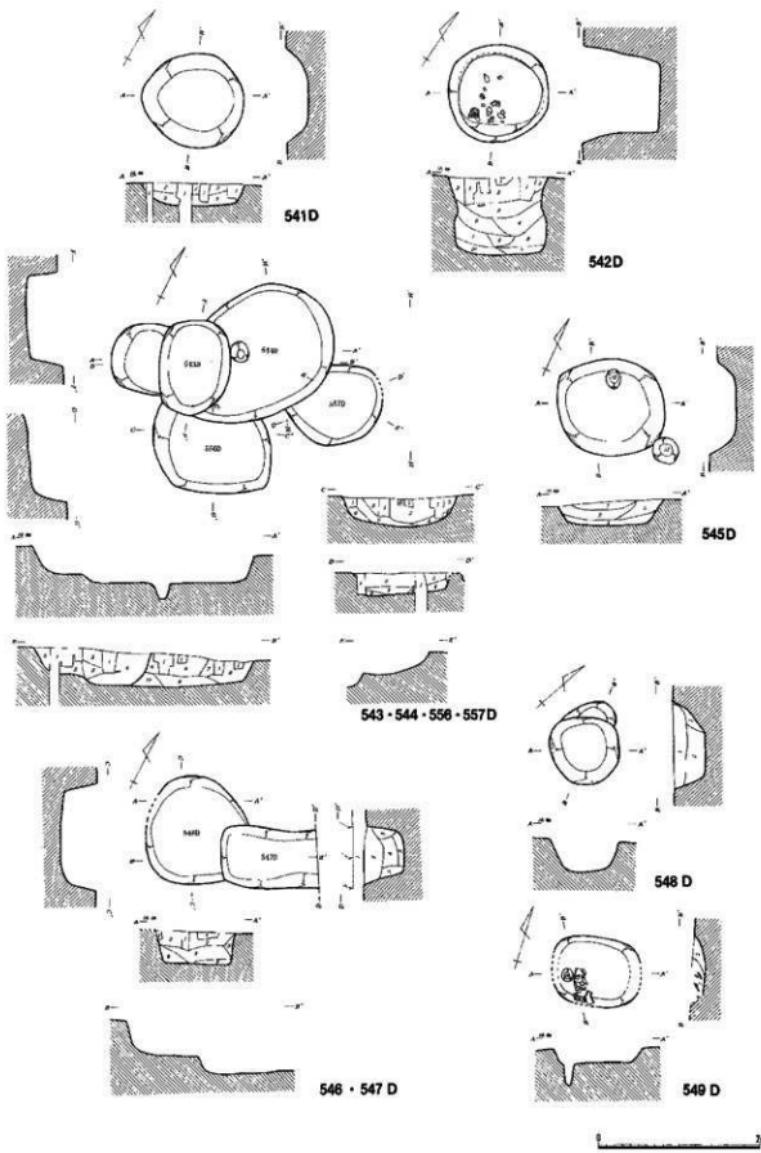
〔時期〕 加曾利E II式期。

541号土坑出土遺物（第17図27～29）

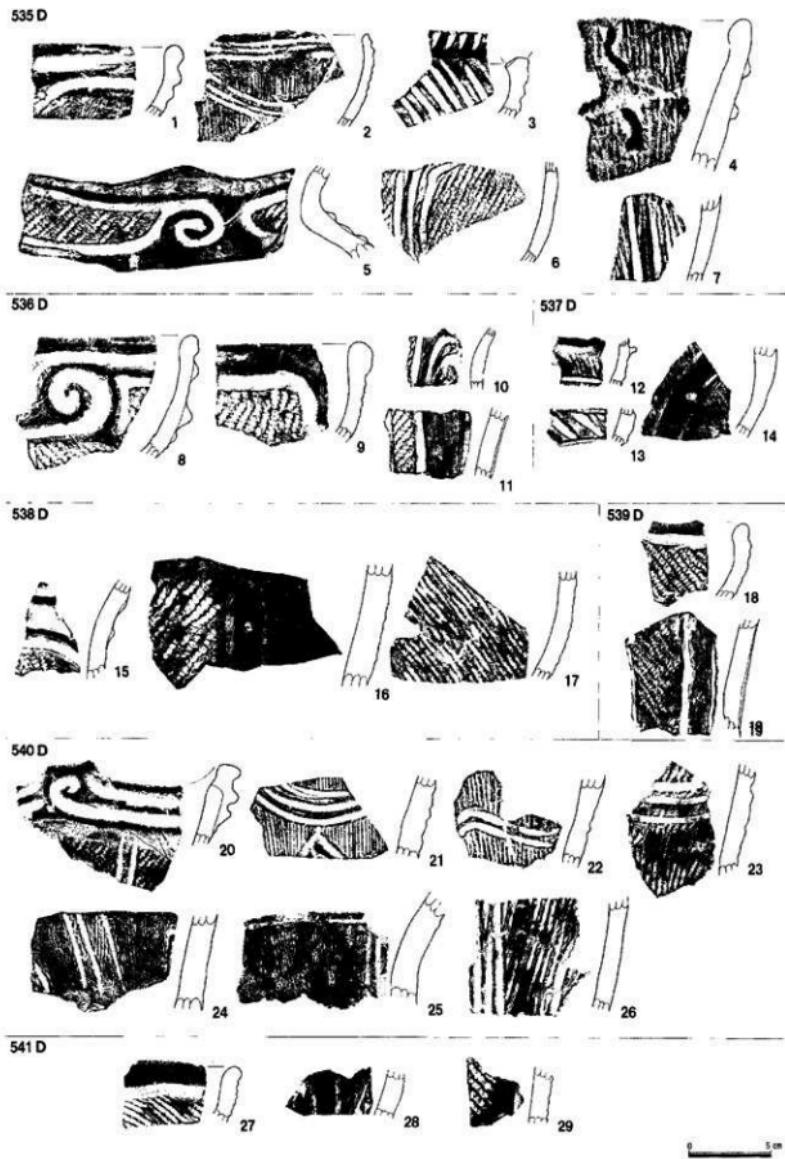
27は太沈線が巡り、R Lの単節斜繩文が施される。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

28は平行する沈線を縦位に施し、斜位の集合する沈線を両脇に配する。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

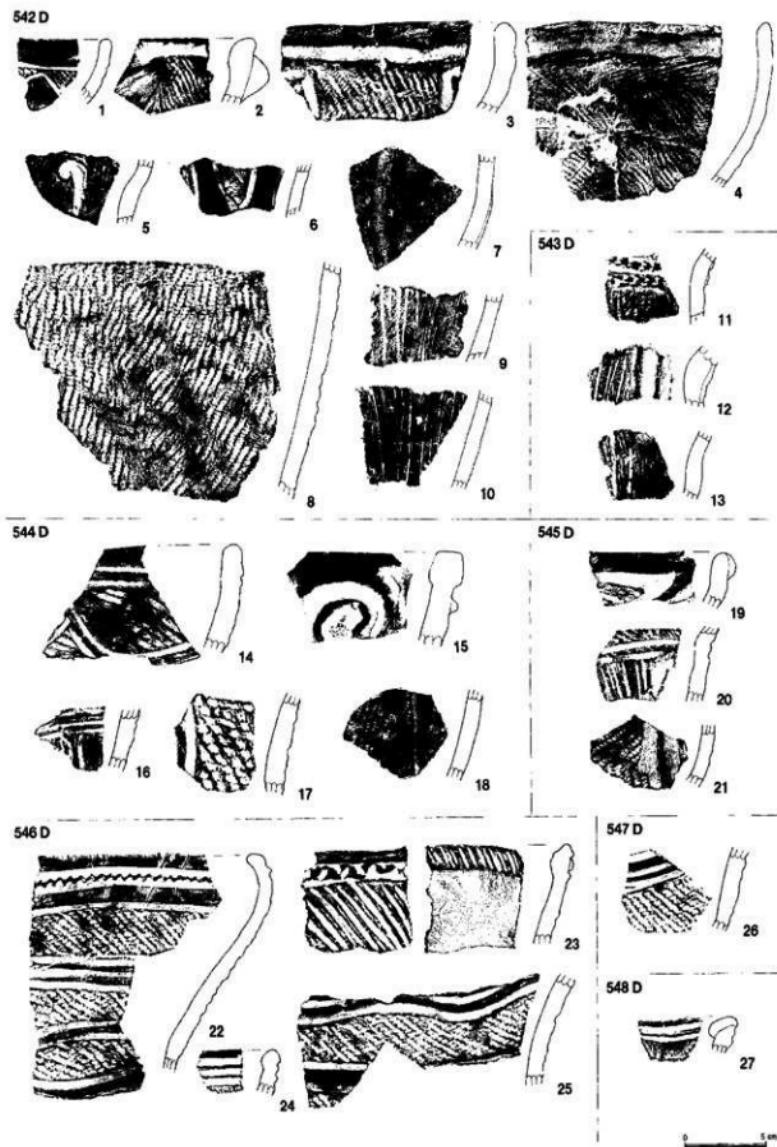
29はR Lの単節斜繩文を地文とし、縦位の隆帯が貼付される。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、



第16図 541～549・556・557号土坑 (1 / 60)



第17図 土坑出土遺物6 (1/3)



第18図 土坑出土遺物 7 (1 / 3)

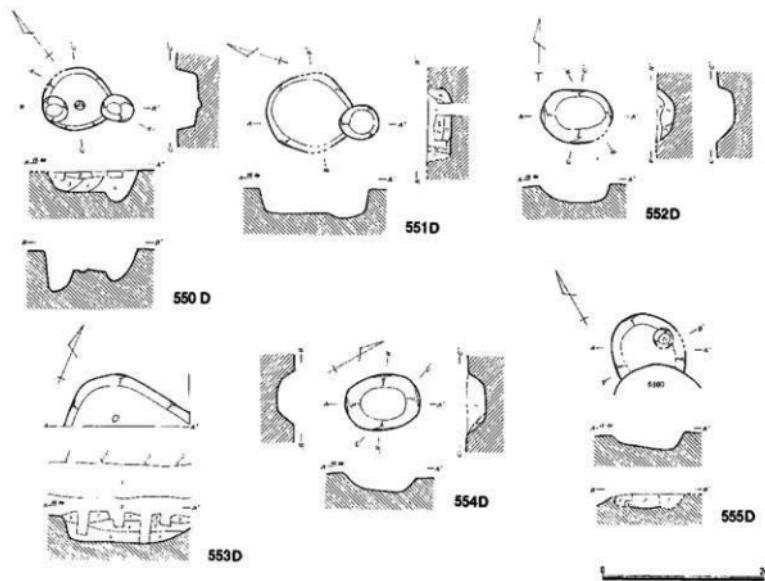
胎土には細礫を僅かに含む。

542号土坑（第16図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）120×110cm・深さ92cm前後を測る。坑底は平坦で依存状態は良好である。壁は80°前後の角度で立ち上がり、部分的にオーバーハングしている。掘り込みの深い良好な遺存状態である。（長軸方位）N—85°—E。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 褐色土（10YR4/4）。ロームブロック。ボロボロした感じ。
- 7層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟質。
- 9層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 10層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。



第19図 550～555号土坑（1/60）

〔遺物〕南側3層から土器片が多く出土した。

〔時期〕加曾利EⅢ式期。

542号土坑出土遺物（第18図1~10）

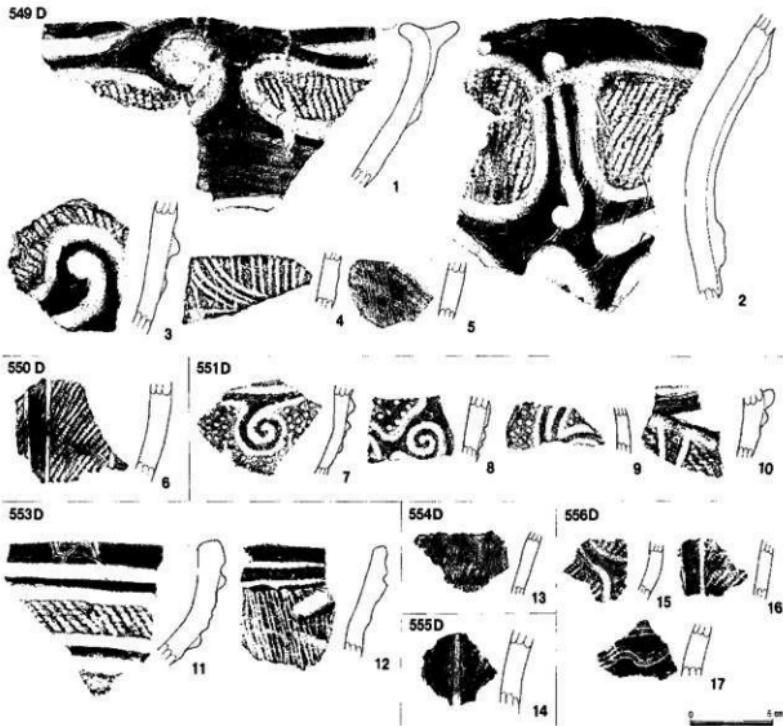
1は口唇部下に沈線が巡る。RLの単節斜繩文を地文とし、弧状の沈線が施され磨消される。色調はぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

2は口唇部下を肥厚させRLの単節斜繩文を施す。色調は暗赤褐色（2.5YR）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

3は口唇部下に凹線が巡り、RLの単節斜繩文を地文とし、「匁」字状の懸垂文が施される。色調はぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

4は口唇部下に狭い無文帯をもち、RLの単節斜繩文が施される。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細砂を僅かに含む。

5はRLの単節繩文を地文とし、太沈線が藤手文状に施される。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。



第20図 土坑出土遺物 8 (1/3)

6はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線により区画され、区画外は磨消される。色調はにぶい褐色(5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

7は低い隆帯が貼付される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には粗砂を含む。

8はRLの単節斜縄文が施される。色調は黄橙色(10YR7/8)を呈し、胎土には粗砂を含む。

9・10は条線が施される。9の色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。10の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

543号土坑（第16図）

〔構造〕 544号土坑を切る。556号土坑との前後関係は不明である。（平面形）不整楕円形。（規模）140×120cm・深さ42cm前後を測る。坑底は段差を持つ。遺存状態は良好である。壁は70°～80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-22°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から上器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

543号土坑出土遺物（第18図11～13）

11は2本の隆帯が横位に貼付される。隆带上には半截竹管による刺突が連続して加えられる。以下、RLの単節縄文が施される。色調は明赤褐色(5YR5/8)を呈し、胎土には細蹠・輝石を僅かに含む。

12は条線を地文とし、2本の隆帯が垂下する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、細蹠を僅かに含む。

13はRの撚糸文を地文とし、2本の沈線が垂下する。色調は灰褐色(7.5YR6/2)を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

544号土坑（第16図）

〔構造〕 543号土坑に切られる。556・557号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）215×155cm・深さ34cm前後を測る。坑底は平坦で西側に小ビットがある。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-50°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

7層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

8層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

9層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

10層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

544号土坑出土遺物（第18図14～18）

14は連弧文系土器。口唇部下に2条の沈線を巡らせ、Rの無節斜縄文を地文とし、2条一对の沈線による連弧文が施される。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

15は凹線により渦巻文が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

16は条線を地文とし、沈線を横位・縱位に施し区画する。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。

17はL R Lの複節斜縄文を地文とし、沈線が垂下する。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

18はR Lの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

545号土坑（第16図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）130×120cm・深さ20～30cmを測る。坑底は平坦で浅い皿状となる。壁は60° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-88° -W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

545号土坑出土遺物（第18図19～21）

19は隆帯により区画が作られる。区画内はL Rの単節縄文。色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

20は半截竹管による縱位・斜位の集合した沈線が施され、2条の沈線が巡る。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

21はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の凹線が垂下する。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

546号土坑（第16図）

〔構造〕 547号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）140×120cm・深さ44cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80° 前後の立ち上がる。掘り込みの深い整った形をしている。（長軸方位）N-33° -W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

546号土坑出土遺物（第18図22～25）

22・25は同一個体か。口唇部下に丸棒状施文具による交瓦刺突が巡らされる。L Rの単節斜縄文を地文とし、3条一組の沈線による横線文、2条一対の沈線による波状文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細謬を含む。

23は首利系の土器。口唇部下に交瓦刺突が巡り、以下、斜位の集合した沈線が施される。口唇部内面には斜位の沈線が施される。色調は黒褐色 (10YR2/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

24は口唇部下に3条の沈線が巡り、以下、条線が施される。色調は暗赤褐色 (5YR3/2) を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

547号土坑（第16図）

〔構造〕 東側は調査区外である。546号上坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明×50cm・深さ64cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—60°—E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや硬質。

3層 褐色土 (7.5YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

547号土坑出土遺物（第18図26）

L Rの単節斜縄文を地文とし、3条の太沈線が弧状に施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には粗砂を含む。

548号土坑（第16図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）110×90cm・深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で皿状となり、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—72°—E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

548号土坑出土遺物（第18図27）

口唇部下に2条の沈線が巡り、LRの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を含む。

549号土坑（第16図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）115×85cm前後を測る。坑底は浅い皿状である。遺存状態は不良である。西側の壁際に小ピットがある。壁は60°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—75°—E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 1層から少量の土器片が出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

549号土坑出土遺物（第20図1～5）

1は小波状口縁になる土器。波頂部には隆帶により渦巻文が作られ、波底部は楕円形の区画となる。区画内はRLの単節斜縄文になる。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には片岩を多く含む。

2はRLの単節斜縄文を地文とする。2本一対の隆帶により区画が作られる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には片岩を含む。

3はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帶による渦巻文が貼付される。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、胎土には片岩を僅かに含む。

4は縦位に集合する沈線上に、4条一組の沈線を弧状に施す。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

5は条線が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

550号土坑（第17図）

〔構造〕（平面形）不整円形。（規模）径80cm・深さ28cm前後を測る。坑底には浅いピットが2個確認された。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N—68°—W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

550号土坑出土遺物（第20図6）

LRの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には粗

砂・白色粒子を僅かに含む。

551号土坑（第17図）

〔構造〕（平面形）不整円形。（規模）径100cm・深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で浅い皿状である。壁は80°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-12°-W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

551号土坑出土遺物（第20図7~10）

7~9は同一個体。隆帯により渦巻文・区画文が作られ、丸棒状の施文具による刺突文が施される。色調は赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

10は隆帯の貼付により区画がなされる。以下、L Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調は黒褐色（5YR2/2）を呈し、胎土には細礫を僅かに含む。

552号土坑（第17図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）90×70cm・深さ23cm前後を測る。坑底は浅いすり鉢状で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N-88°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。

3層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 覆土の状態から、繩文時代のものと思われる。

553号土坑（第17図）

〔構造〕南側は調査区外である。（平面形）不明。（規模）不明×不明・深さ28cm前後を測る。坑底はやや南に傾斜している。壁は70°前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）不明。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

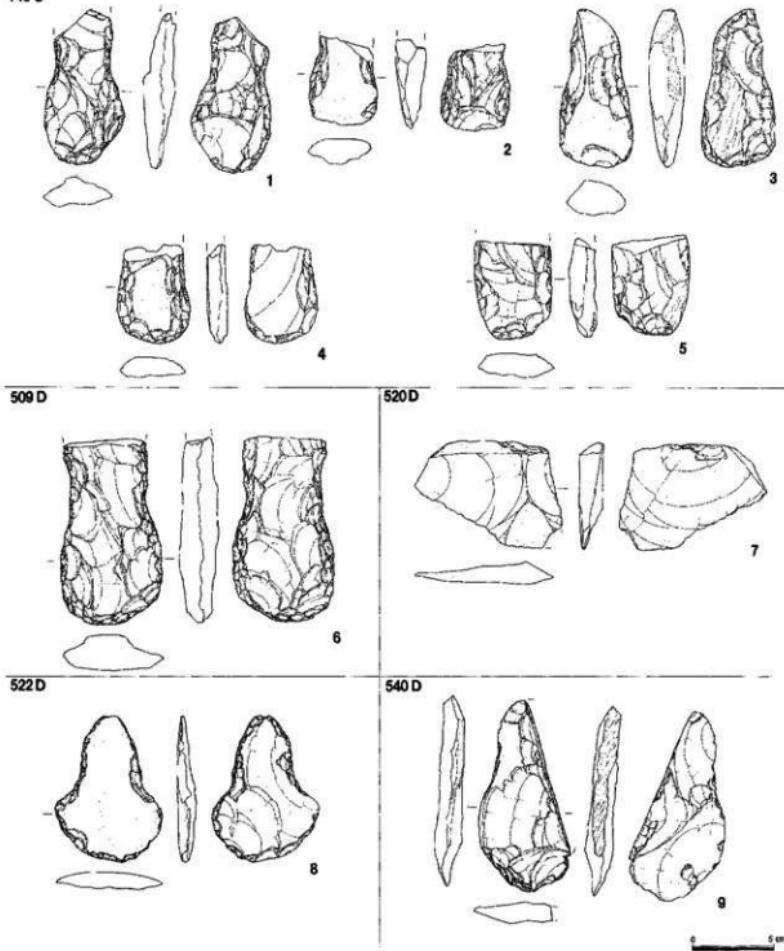
〔時期〕 加曾利E II式期。

553号土坑出土遺物（第20図11・12）

11は隆帶により区画が作られる。区画内はR L Rの複節斜縞文になる。色調はにぶい黄橙色（10YR 6/4）を呈し、胎土には細謹を僅かに含む。

12は口唇部下に2条の沈線が巡り、Lの燃糸文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、

140 J



第21図 140号住居跡・土坑出土上石器（1/3）

胎土には細礫を多く含む。

554号土坑（第17図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模） $100 \times 70\text{cm}$ ・深さ 20cm 前後を測る。坑底は浅い皿状で、遺存状態は不良である。壁は 60° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N— 20° —E。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

2層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

554号土坑出土遺物（第20図13）

蛇行する条線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫を多く含む。

555号土坑（第17図）

〔構造〕 540号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明× 95cm ・深さ 16cm 前後を測る。坑底は北側に僅かに傾斜している。東側の壁際に小ビットがある。壁は 60° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N— 5° —W。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E式期。

555号土坑出土遺物（第20図14）

R Lの単節斜繩文を地文とし、2条の沈線が垂下する。沈線間は磨消される。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

556号土坑（第16図）

〔構造〕 543・544号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明× 140cm ・深さ 34cm 前後を測る。坑底は浅い皿状となる。壁は 80° 前後の角度で立ち上がる。（長軸方位）N— 70° —E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロック・ローム小ブロックを僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。

6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 加曾利E II式期。

556号土坑出土遺物（第20図15～17）

15はL Rの単節斜縄文を地文とし、沈線による区画が作られる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

16はL Rの単節斜縄文を地文とし、2条の沈線が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

17は3条一組の沈線により波状文が施される。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。

557号土坑（第16図）

〔構造〕 544号土坑との前後関係は不明である。（平面形）楕円形。（規模）不明×110cm・深さ22cm前後を測る。坑底は浅い皿状となる。壁は80°前後の立ち上がりである。（長軸方位）N-15°-E。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 検出されなかった。

〔時期〕 覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

（1）住居跡

522号住居跡（第22図）

〔構造〕 南側は搅乱により破壊されている。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×490cm。（主軸方位）N-55°-W。（壁高）29~42cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20cm前後・下幅6cm・深さ4~29cm前後を測り、全周するとと思われる。（床面）住居壁際と炉の周辺を除きよく硬化している。（炉）住居中央より北に偏って位置する。95×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）北側の2本が主柱穴の一部と思われる。いずれも重複した形態をなす。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 不整合な堆積状態で、埋め戻された可能性がある。

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや軟質。

3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。

- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 10層 黑褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 11層 黑褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 13層 黑褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 14層 黑色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 15層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 16層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 17層 褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

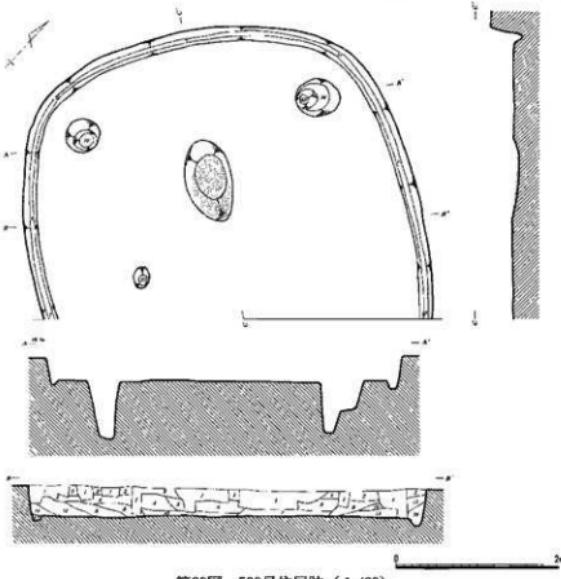
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

522号住居跡出土遺物（第28図1）

壺形土器（1）

頸部から肩部にかけての破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色



第22図 522号住居跡 (1/60)

(10YR4/1) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

526号住居跡（第23図）

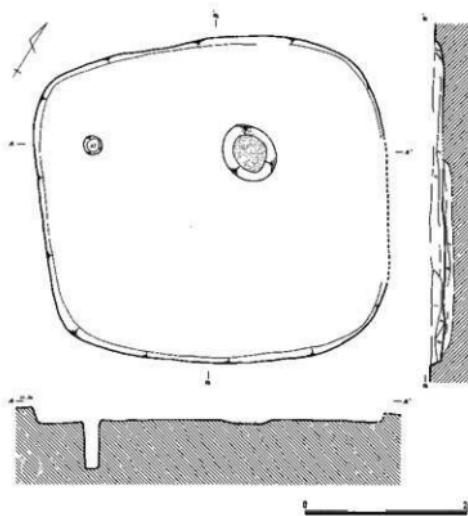
〔構造〕 518・520・525・528・530号土坑を切る。(平面形) 圓丸長方形。(規模) 430×405cm。(主軸方向) N—30°—W。(壁高) 9～16cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居跡と炉の周辺を除き硬化面を認める。平坦で遺存状態は良好である。(炉) 住居中央よりやや東に偏って位置する。75×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北西コーナーに1本が検出されたのみである。(貯藏穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 農作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 褐色土(10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。非常に硬質。貼床。
- 7層 灰黃褐色土(10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 僅かな出土であり、図示できるものはなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期



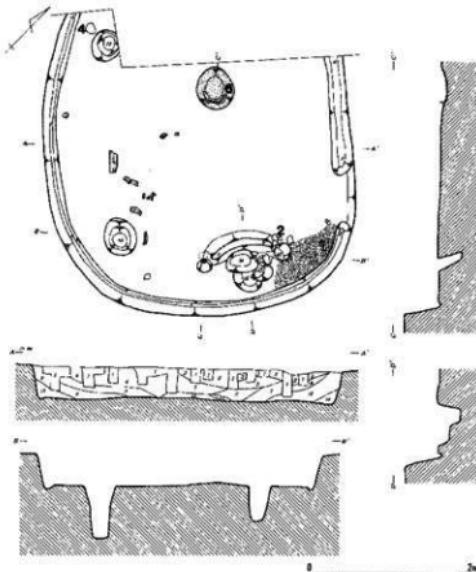
第23図 526号住居跡 (1/60)

527号住居跡（第24図）

〔構造〕北側は破壊されている。(平面形)隅丸長方形か。(規模)不明×380cm。(主軸方向)N-50°W。(壁高)39~43cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅20~25cm・下幅5~10cm・深さ2~6cmを測り、ほぼ全周すると思われる。(床面)住居壁際周辺と炉の周囲を除いて硬化面を認められる。平坦で遺存状態は良好である。(炉)住居中央より北に偏って位置する。50×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cm前後の掘り込みをもつ。南側の掘り込み内側に台付甕の頸部から体部上半にかけての破片を埋設している。(柱穴)各コーナーの3本が主柱穴の一部と思われる。南壁下中央より僅かに北に偏った1本は住居中央に向って穿たれていて梯子穴を想定させる。(貯藏穴)南壁下中央より東に偏って位置する。55×50cmの重複した形態をなして、深さ16cm前後を測る。南側に幅30cm前後・高さ2cm前後で僅かに弧状の凸堤を構築している。

〔覆土〕不整合な堆積状態で、埋め戻された可能性がある。

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや軟質。
- 4層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。



第24図 527号住居跡 (1/60)

8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。

9層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

10層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

11層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。焼土粒子を多く含む。やや軟質。

12層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。やや軟質。

13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

東コーナー、床面上に砂粒混じりの暗赤褐色土の堆積が認められた。

〔遺物〕貯蔵穴付近と赤褐色土付近から土器片が多く出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期

〔所見〕床面上に炭化材が散布するなど、焼失家屋の可能性がある。

527号住居跡出土遺物（第28図2～6）

壺形土器（2）

肩部破片。L Rの単節縄文の端末結節が施される。外面は縄文帯以外は横方向にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調は黒褐色（7.5YR2/1）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

壺形土器（3～6）

3は頸部から肩部の破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

4は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には細密なハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。色調は明赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡西コーナー付近の床面上から出土した。

5は口頭部破片。頭部でくびれて口縁部は大きく開く器形である。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

6は頸部から体部上半にかけての破片。内外面共にヘラナデされるが、頸部外面は継方向、内面は横方向、体部外面に横方向の細密なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。炉の南側を囲むように立てて設置してあり、炉施設として使用されていた事が推測される。

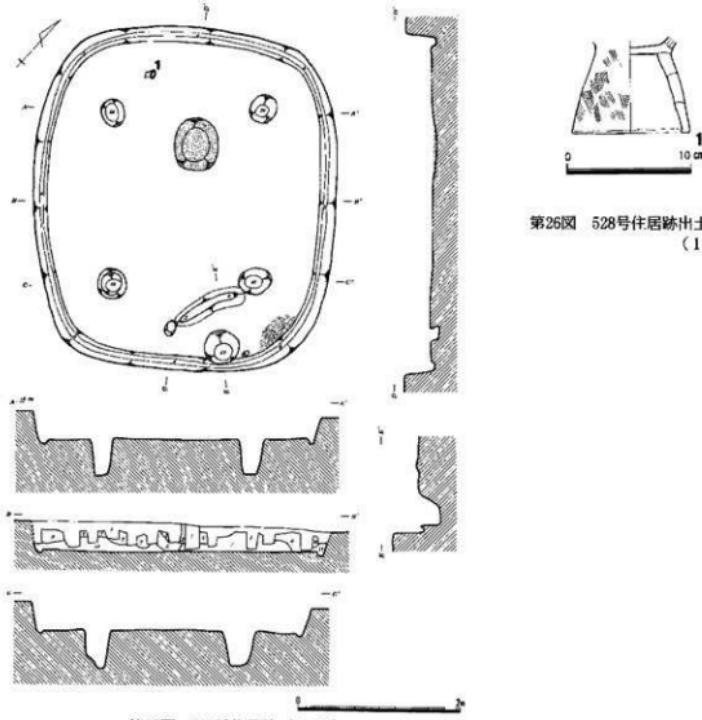
528号住居跡（第25図）

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）430×375cm。（主軸方向）N-41°-W。（壁高）30～37cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～20cm・下幅4cm前後・深さ4cm前後を測り全周する。（床面）住居壁際周辺と炉の周囲を除き硬化面を認める。平坦で遺存状態は良好である。（炉）住居中央よりやや北西に偏って位置する。65×55cmの楕円形を呈する地床炉で、5cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴になろうか。いずれも、掘り込みの深い良好な遺存状態である。

南壁下中央より僅かに北に偏った1本は入口施設にならうか。(貯蔵穴) 南壁下中央より僅かに東に偏って位置する。径45cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。北側に幅25cm前後・高さ4cm前後の直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕 不整合な堆積状態で、埋め戻された可能性がある。

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。



第26図 528号住居跡出土遺物
(1/4)

第25図 528号住居跡 (1/60)

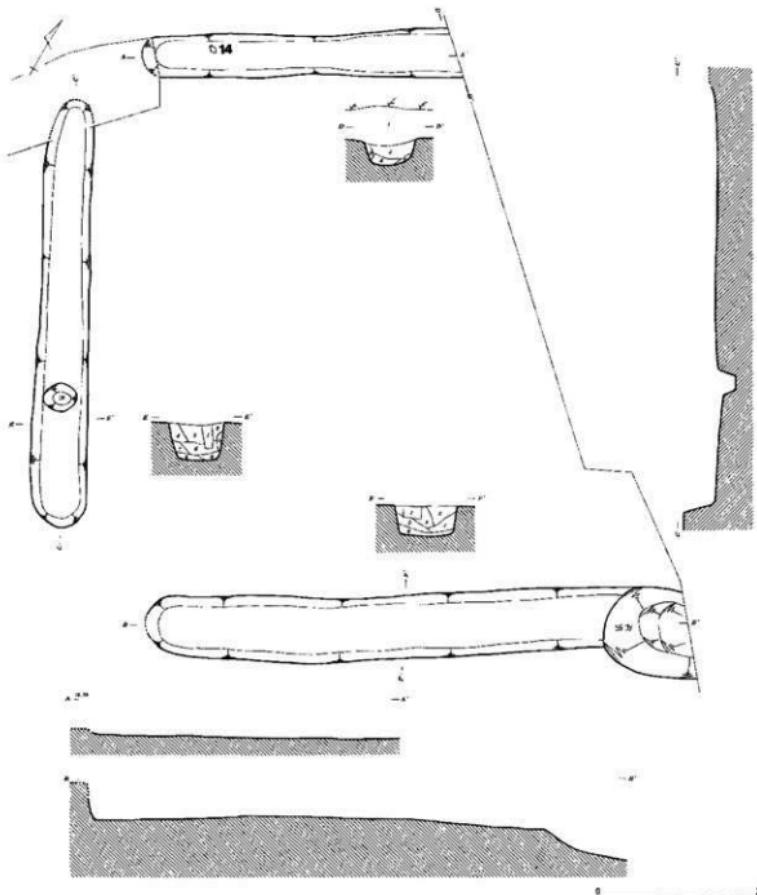
10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

東コーナー、床面上に砂粒混じりの暗赤褐色土の堆積が認められた。

〔遺物〕床面上から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期



第27図 26号方形周溝墓 (1/60)

528号住居跡出土遺物（第26図1、第28図7～13）

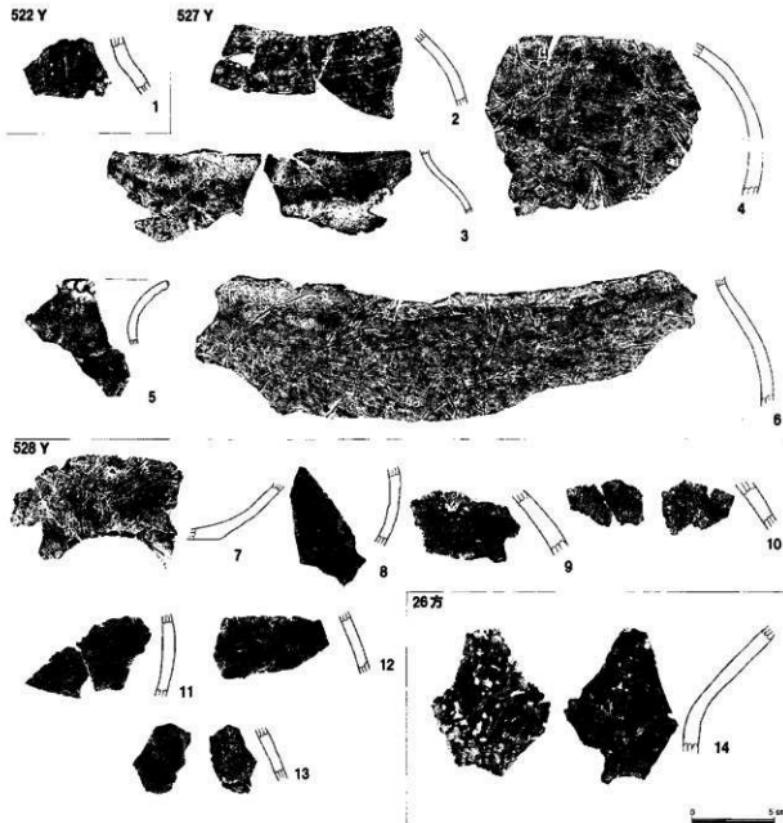
壺形土器（7～10）

7は底部破片。平底の底部から立ち上がり開く器形である。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。

8は体部破片。外面は丁寧にヘラミガキが施され、内面はヘラナデされる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

9・10は同一個体。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土。



第28図 522・527・528号住居跡、26号方形周溝墓出土遺物（1/3）

變形土器（第26図1、第28図11～13）

1は脚台部のみ残存する。底径9.6cm。裾部へかけて直線的に開く器形である。脚裾端部には粘土のはみ出しがみられる。甕部内面はヘラナデされ、炭化物が付着する。脚台部内外面共にヘラナデされるが外側にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には蹠・粗砂・白色粒子を含む。住居跡西コーナーからやや北寄りの床面上から出土した。

11～13は体部破片。11と13は同一個体であると推測される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外側にはハケ目痕が残る。色調は11・13が灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、12は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には蹠・粗砂を含む。覆土中からの出土。

（2）方形周溝墓

26号方形周溝墓（第27図）

〔周溝の構造〕北東溝は調査区外。25号方形周溝墓に切られる。

（南東溝）上幅80cm前後・下幅60cm前後・深さ41cm前後を測る。南側で途切れる。東側は25号方形周溝墓に切られる。

（南西溝）上幅60cm前後・下幅35cm前後・深さ33cm前後を測る。西側と南側で途切れる。

（北西溝）上幅55cm前後・下幅45cm前後・深さ31cm前後を測る。西側で途切れる。北側は調査区外。

（断面形）溝底は平坦で軟弱である。壁は80°前後の角度で立ち上がり、台形を呈する。

〔覆土〕

（南東溝）

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。

5層 黒褐色土（10YR4/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。

（南西溝）

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

8層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。硬質。

（北西溝）

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期

26号方形周溝墓出土遺物（第28図14）

壺形土器（14）

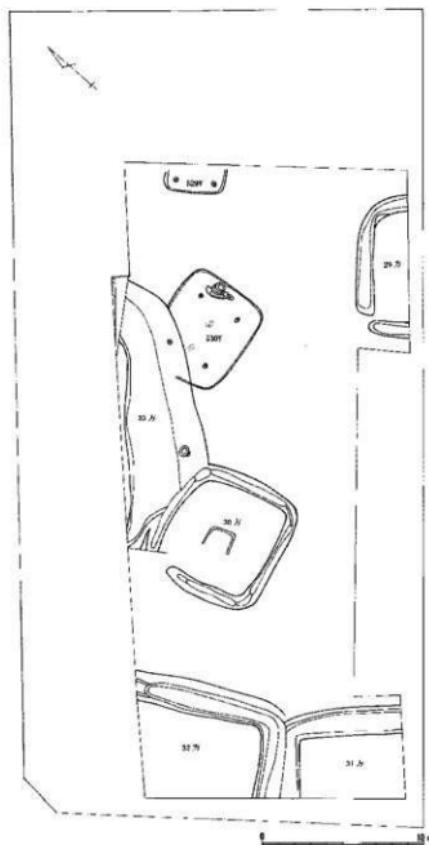
口頸部破片。口縁部内面上端には櫛描波状文が施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ口痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北西溝から出土した。

第3章 西原大塚遺跡第131地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 遺跡の立地と環境

第2章第1節(1)を参照。



第29図 遺構分布図（1/300）

(2) 調査に至る経過

平成18年8月、開発主体者の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に志木市幸町三丁目63街区12～17画地（面積1,254.75m²）に計画されている共同住宅建設に係る埋蔵文化財の有無・取り扱いに関する照会があった。

教育委員会では、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていて、何らかの保存措置を図らなければならず、その対処方法を検討するための確認調査が必要である旨の回答を行った。

その後、個人から確認調査依頼書が提出されたため、教育委員会ではこれを受理し、8月22・23日の両日に確認調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期のものと思われる住居跡と溝跡を検出した。

教育委員会では、これらの保存方法について個人と協議を行ったが、開発計画の変更が無理という結論に達したため、発掘調査による記録保存を行うことにし、調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。

遺跡調査会ではこれを受け、発掘届が提出されたため委託契約を締結し、関係書類を埼玉県教育委員会に提出し、調査の体勢を整えた。なお、発掘調査面積は建造物建設部分472.21m²である。

なお、発掘調査番号は、教生文第2-068号 平成18年11月28日付である。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は8月30日から開始した。確認調査の時点で遺構の検出されなかった部分を堆土置場とし、バックホーを使用し表土剥ぎを行った。

31日には器材の搬入を行う。表土剥ぎと並行して遺構確認作業を開始し、検出された住居跡（529Y）と方形周溝墓（29方）の精査を開始する。

9月1日には表土剥ぎと遺構確認作業を行う。

4日には529Yの土層図の作成と写真撮影を行う。また、29方の遺物出土状態の写真撮影、土層図・平面図・断面図の作成を行う。31・32方の精査を開始するが、両遺構は重複ないし溝の共有が考えられる方形周溝墓であった。

5日には31・32方の精査を行う。また、529Yの写真撮影、29方の断面図作成・写真撮影を行う。

6日は雨の中、31・32方の精査を行う。

7日には31・32方の精査とともに土層図の作成を行う。30方を掘り始める。

8日には31・32方の遺物出土状態の写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。

11日には30方の精査とともに、遺物出土状態の写真撮影、土層図・平面図の作成を行った。また、31・32方の写真撮影を行う。530Yの精査を開始する。

12・13日は雨の中を強行。530Yの精査を行う。

14日には530Yの精査を行う。また、33方を掘り始める。

15日には530Y、30・33方の精査を行う。530Yの土層図・平面図の作成、30方の写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。

19日には33方の精査を行う。530Yの断面図の作成、30方の写真撮影、断面図の作成を行う。

20日には33方の写真撮影、土層図・平面図・断面図の作成を行う。器材を撤収し調査を終了する。

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 住居跡

529号住居跡 (第30図)

〔構造〕大部分が調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 19~31cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦だが軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。

5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質
〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

529号住居跡出土遺物 (第42図1)

壺形土器 (1)

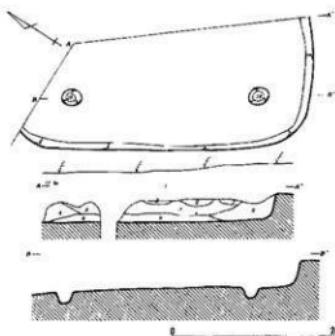
肩部破片。外面にはヘラ書き沈線による山形文を施し、L Rの単節繩文が充填されている。文様帶以外ヘラミガキされ、赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4)、赤彩部分が明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが精製され、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

530号住居跡 (第31図)

〔構造〕北西側が33号方形周溝墓に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 650×525cm。(主軸方位) E-W。(壁高) 12~48cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。

(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居東側に硬化面を認める。全体に軟弱である。(炉) 住居中央より西に偏って位置し、2ヶ所確認する。炉の移動が考えられる。東側は50×45cmの楕円形を呈し、深さ2cmの掘り込みをもつ。西側は65×50cmの楕円形を呈し、深さ2cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーに近い4本が主柱穴と思われる。東壁際中央の1本は入口施設と思われる。

(貯蔵穴) 東壁際中央よりやや北に偏って位置する。55×50cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測り、西側に段をも

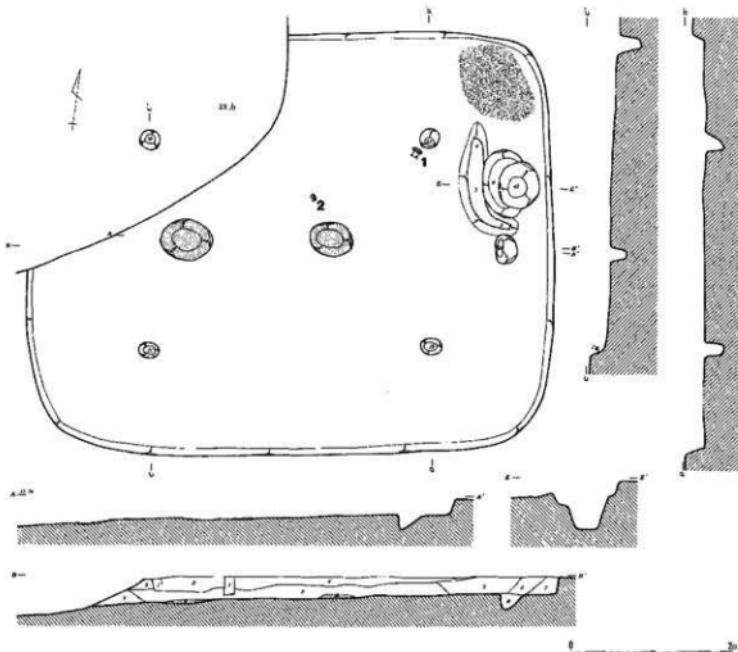


第30図 529号住居跡 (1/60)

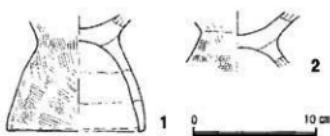
つ。周囲には弧状に凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。



第31図 530号住居跡 (1/60)



第32図 530号住居跡出土遺物 (1/4)

8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

9層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。やや硬質。

10層 にぶい赤褐色土 (5YR4/3)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。やや硬質。

北東コーナー、床面上に砂粒混じりの暗赤褐色土の堆積が確認された。

〔遺物〕 覆土中から上器片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

530号住居跡出土遺物（第32図、第42図2～4）

壺形土器（第42図2）

単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキが施され、赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4)、赤彩部分はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

壺形土器（第32図1・2、第42図3・4）

1は台付壺形土器の脚台部のみ残存する。脚台部へかけて内湾しながら開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。内面には工具痕がみられる。色調はにぶい黄色 (10YR4/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡北東側ピット脇の床面上から出土した。

2は台付壺形土器の接合部破片。接合部で屈曲し、脚台部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

3は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

4は脚台部破片。脚台端面には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

（2）方形周溝墓

29号方形周溝墓（第33図）

〔周溝の構造〕 南東側1/2前後は調査区外である。西コーナー部は溝が途切れる。

〔北東溝〕 確認できる範囲では長さ220cm・上幅110cm前後・下幅45cm前後・深さ48cmを測る。

〔南西溝〕 確認できる範囲では長さ260cm・上幅80cm前後・下幅45cm前後・深さ48cmを測る。

〔北西溝〕 長さ600cm・上幅100～130cm・下幅35～80cm・深さ48～55cmを測る。

〔断面形〕 いずれも逆台形で、壁は70°前後の角度で立ち上がる。溝底はほぼ平坦である。

〔覆土〕

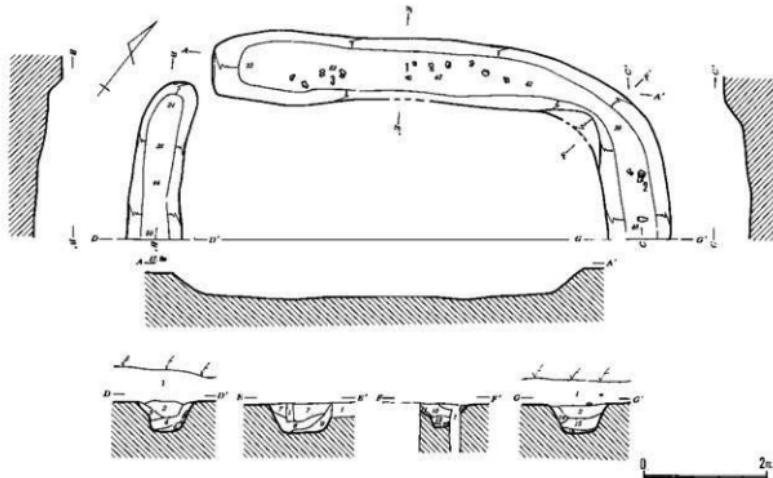
1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。

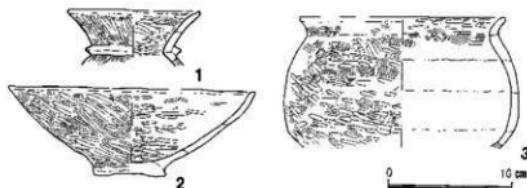
3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 14層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第33図 29号方形周溝墓 (1/80)



第34図 29号方形周溝墓出土遺物 (1/4)

16層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 大部分が溝底から45cm前後の浮いた状態で、北東溝と北西溝から上器片が多く出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

29号方形周溝墓出土遺物 (第34図、第42図5~11)

壺形土器 (第34図1、第42図5~7)

1は口縁部の1/3程度残存する。推定口径10.7cm。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部外面には断面三角形の凸帯が一周する。口唇部内外面共にヨコナデされる。口縁部外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/2) を呈し、胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北西溝中央付近から出土した。

5は口縁部破片。頸部でくびれて口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされ、赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。北溝内ブリッジ付近から出土した。

6は頸部破片。外面には半円状の櫛描文がみられる。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。北西溝中央付近から出土した。

7は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面には輪積痕が残り、斑点状の剥離が顕著である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。北西溝内の北コーナー寄り付近から出土した。

鉢形土器 (第34図2~3)

2は口縁部の一部を欠損する。口径20cm・底径5.5cm・器高7.5cmを測る。底部はやや張り出して、口縁部にかけて直線的に大きく開く。壺形土器の体部下半で切ったような器形である。底面は中心部がややくぼんでおり調整痕はみられない。口唇部はヨコナデ。以下内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北コーナーに近い北東溝内から出土した。

3は全体の1/4程度残存する。推定口径17cm。張りのない体部から頸部でくびれて口縁部は外傾する器形である。口唇部はヨコナデ、以下外面は部分的にヘラミガキされるがハケ目痕が残る。内面は口縁部が一部ヘラミガキされ、以下ヘラナデされるが輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。ブリッジ付近の北西溝内から出土した。

壺形土器 (第42図8~11)

8は口頸部から体部にかけての破片。頸部でくびれて口縁部は外傾する器形である。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調は外面が黒褐色 (7.5YR3/1)、内面がにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。北西溝内の北コーナー寄り部分から出土した。

9は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。北東溝から出土した。

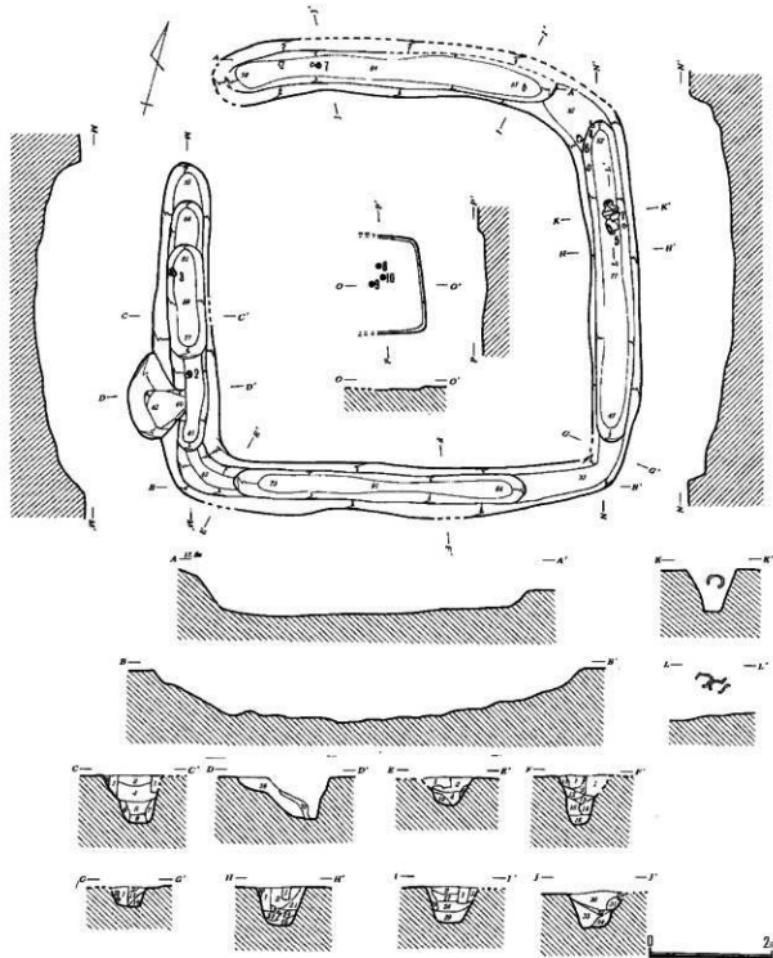
10は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には縦方向、内面には横方向のハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。北西溝内中央からやや北寄り付近から出土した。

11は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は浅黄橙色(10YR8/4)を呈し、胎土には躊・粗砂・白色粒子を含む。北西溝中央付近から出土した。

30号方形周溝墓（第35図）

〔周溝の構造〕北西コーナー部は溝が途切れる。

〔東溝〕長さ530cm・上幅85cm前後・下幅30cm前後・深さ65cm前後を測る。コーナー部が浅く、中央部



第35図 30号方形周溝墓 (1/80)

が深くなる。

(西溝) 長さ470cm・上幅90cm前後・下幅30cm前後・深さ85cm前後を測る。コーナー部が浅く、中央部が深くなる。南西コーナー部に近い位置に、幅120cm・深さ45cmの溝の外側に向けて穿たれた土坑状の掘り込みが存在し、溝の法面にあたる部分はロームによりバッキングされたような状態であった。

(南溝) 長さ550cm・上幅85cm前後・下幅35cm前後・深さ83cm前後を測る。コーナー部が浅く、中央部が深くなる。

(北溝) 長さ570cm・上幅90cm前後・下幅35cm前後・深さ65cm前後を測る。

(断面形) 逆台形を呈する。

(覆土)

1層 耕作土。

2層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

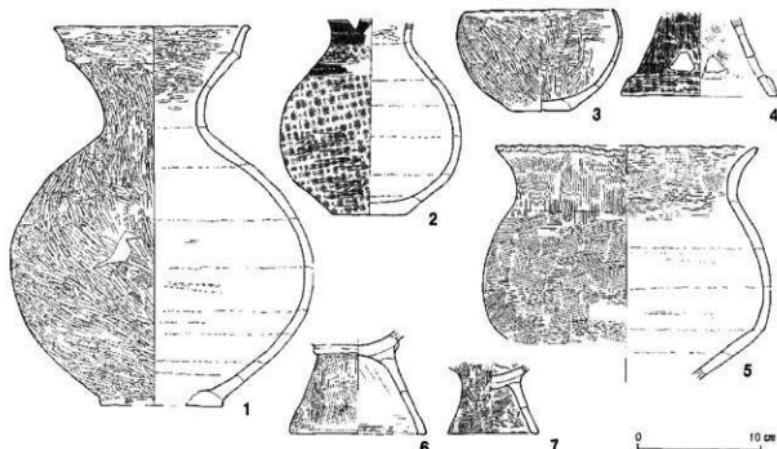
3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

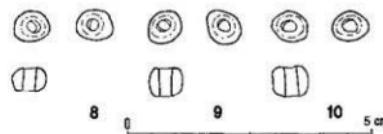
5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。



第36図 30号方形周溝墓出土遺物1 (1/4)



第37図 30号方形周溝墓出土遺物2 (1/1)

- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 14層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 15層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 16層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 18層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 19層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 20層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 21層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 22層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 23層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 24層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 25層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 26層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 27層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 28層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 29層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 30層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 31層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 32層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 33層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 34層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 35層 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。叩き締めた感じ。
- 36層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 各コーナーに近い位置の上層部に、遺物の出土が多い。

〔主体部〕 周溝内、ほぼ中央に位置する。西半は耕作により破壊されている。

〔掘り込み〕 不明×162cm、深さ7cmの規模をもつが明瞭でない。平面形は長方形になろうか。坑底はほぼ平坦である。

〔覆土〕 ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む、やや軟質の黒褐色土 (10YR3/1)。

〔遺物〕 覆土中からガラス小玉3個が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

30号方形周溝墓出土遺物（第36・37図、第42図12~15）

臺形土器（第36図1・2）

1はほぼ完形。口径16cm・底径10cm・器高31cmを測る。底部は平底。最大径を胴部中位にもつ体部はやや長胴の球形を呈する。頸部はくびれてゆるやかに外傾しながら立ち上がり、途中弱い稜をもち、直立気味に立ち上がる。口縁部外面には粘土紐を貼付し、複合口縁状を呈する。口唇部外面にも粘土紐を貼り付けている。口縁部内外面は横方向にヘラミガキされる。体部外面は縦方向にヘラミガキされるが部分的に消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされる。底部には焼成後の穿孔がみられる。穿孔は外から内へと穿たれている。色調は橙色（5YR6/5）を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。北東コーナーに近い東溝内へ、方台部側から転落したような状態で、溝の上層部から出土した。

2は頸部以下1/2程度残存する。底径5.8cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部は球状を呈する。頸部から肩部にかけて、沈線で区画されたLRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外にヘラミガキされ、赤彩される。色調は橙色（5YR6/8）、赤彩部分にはぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西溝内の南西コーナー寄りから出土した。

高环形土器（第36図4）

脚台部の1/2程度残存する。推定底径12.7cm。裾部は粘土紐を貼り付けて肥厚させている。脚台部には三角形の窓が推定4箇所に穿孔されている。外面はヘラミガキされ、赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）、赤彩部分は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、北東コーナーより出土した。

鉢形土器（第36図3）

全体の2/3程度残存する。口径12.2cm・底径5cm・器高8.5cmを測る。やや上げ底の底部から体部は塊状を呈し、口縁部は内湾する。口唇部内外面ヨコナデ。体部は内外面共に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には礫・粗砂を含み、橙色粒子を多く含む。西溝内中央付近から出土した。

甕形土器（第36図5～7、第42図12～15）

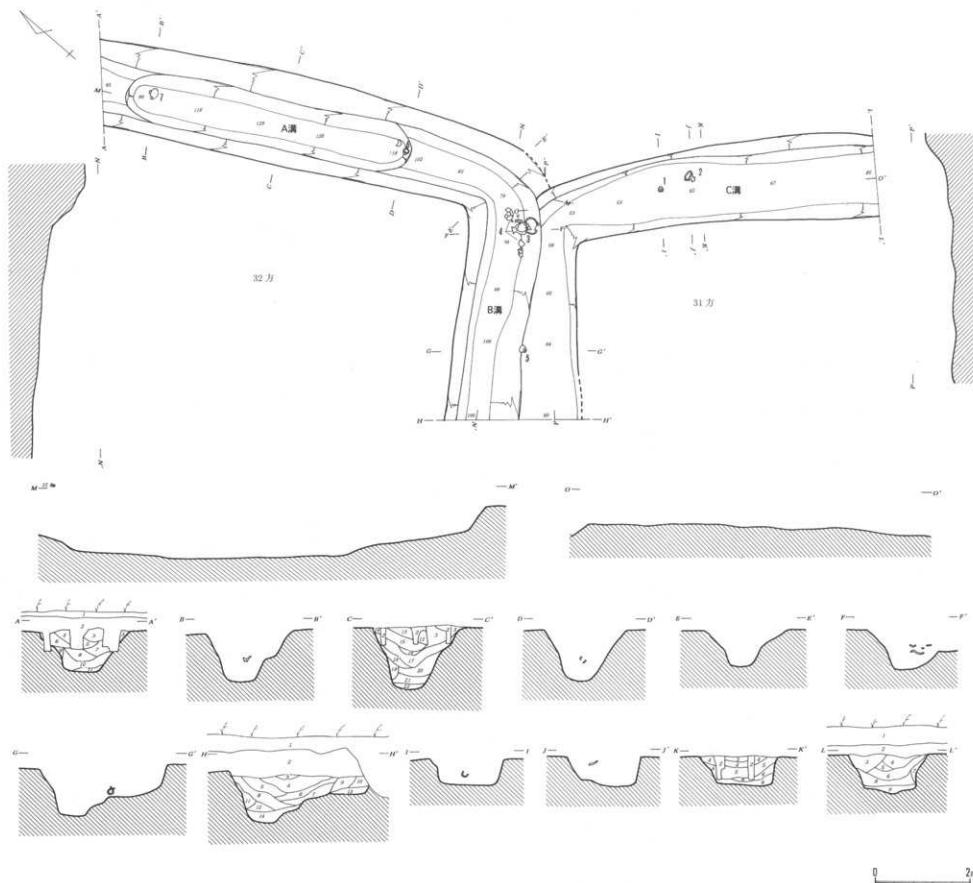
5は台付甕形土器の甕部2/3程度残存する。推定口径11.5cm。体部はややつぶれた偏球状を呈し、頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外傾する器形である。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面には幅広いハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。東溝内中央付近から完形の状態で出土した。方台部から転落したと推測される出土状態である。

6は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。底径11cm。接合部には断面三角形の凸帯が巡る。脚裾部へかけて直線的に開く器形である。色調はにぶい橙色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。北東コーナーから出土した。

7は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。底径7.4cm。裾部へかけて「ハ」字状に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面は縦方向、内面は横方向のハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。北溝内の陸橋部付近から出土した。

12・13は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は12が浅黄橙色（7.5YR8/3）、13は灰褐色（7.5YR7/4）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

14は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。7と同位置から出土した。



第38図 31・32号方形周溝墓 (1/80)

15は脚台部破片。外外面へラナデされるが、器面の荒れが激しく不明瞭。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

ガラス製小玉（第37図8～10）

8は長さ0.6cm・径0.75cm・穴径0.3cm・重量0.3g。

9は長さ0.7cm・径0.7cm・穴径0.3cm・重量0.3g。

10は長さ0.6cm・径0.75cm・穴径0.3cm・重量0.4cmを測る。

いずれも色調は濃紺色を呈する。主体部の坑底から出土した。

31号方形周溝墓（第38図）

〔周溝の構造〕南東側と北西側は調査区外。B溝は32号方形周溝墓と共有する。

（B溝）上幅110～140cm・下幅40～100cm・深さ53～64cmを測る。北側コーナーは上幅140cm前後・下幅38cm前後・深さ53cm前後を測る。

（C溝）上幅140～180cm・下幅40～105cm・深さ53～85cmを測る。東方向へ僅かに傾斜を伴っている。

（断面形）溝底は部分的に隆起しているが、全体に平坦である。壁は内側が80°前後の急斜な角度で立ち上がり、外側は60°前後の角度で立ち上がり、遺存している部分では段をもち、逆台形を呈する。

〔覆土〕C溝。

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

7層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

9層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。

〔遺物〕C溝の4層と5層にほぼ完形の土器が2個体出土した。B溝のコーナー下層から壺形土器が割れた状態だが、ほぼ完形で出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

31号方形周溝墓出土遺物（第39図1・2、第42図16）

鉢形土器（第37図1）

小形で完形。口径10.5cm・底径6cm・器高8.5cmを測る。平底の底部はやや張り出している。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、短い口縁部は外傾する。外面はヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされると推測されるが斑点状の剥離が著しく不明瞭。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。C溝内北コーナー寄り5層内から出土した。

高杯形土器（第37図2）

いわゆる元屋敷系高杯ではほぼ完形。口径12.5cm・底径13cm・器高17cmを測る。杯部下端に僅かに稜をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がり、外傾する器形である。口唇部内面は面取りされる。脚台部は円錐形を呈し、裾部へかけてゆるやかに開く器形である。途中直径1cmの円窓が3箇所に穿たれている。

坏部内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。脚台部外面も同じく縦方向にヘラミガキされ赤彩されるが、脚台部内面はヘラナデされる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）、赤彩部分はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含むが精製され、きめ細かく堅緻である。C溝内北コーナー寄り4層内から出土した。

菱形土器（第41図16）

口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

32号方形周溝墓（第38図）

〔周溝の構造〕南西側と北西側は調査区外。B溝は31号方形周溝墓と共有する。

（A溝）上幅165～195cm・下幅35～50cm・深さ87～132cmを測る。

（B溝）上幅145cm前後・下幅48～60cm・深さ98～105cmを測る。東側コーナーは上幅170cm・下幅40cm・深さ80cm前後を測る。

（断面形）北東側の溝底は周囲より1段長く梢円形状に低くなっている。全体に平坦である。壁は内側が80°前後の急斜な角度で立ち上がり、外側が60°前後の角度で立ち上がり段をもち、逆台形を呈する。

〔覆土〕

A溝。

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

9層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

11層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。

12層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや軟質。

13層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。

14層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

15層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。

16層 黑褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。

17層 黑褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや軟質。

18層 黑褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

19層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。

20層 黑褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

21層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

22層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。

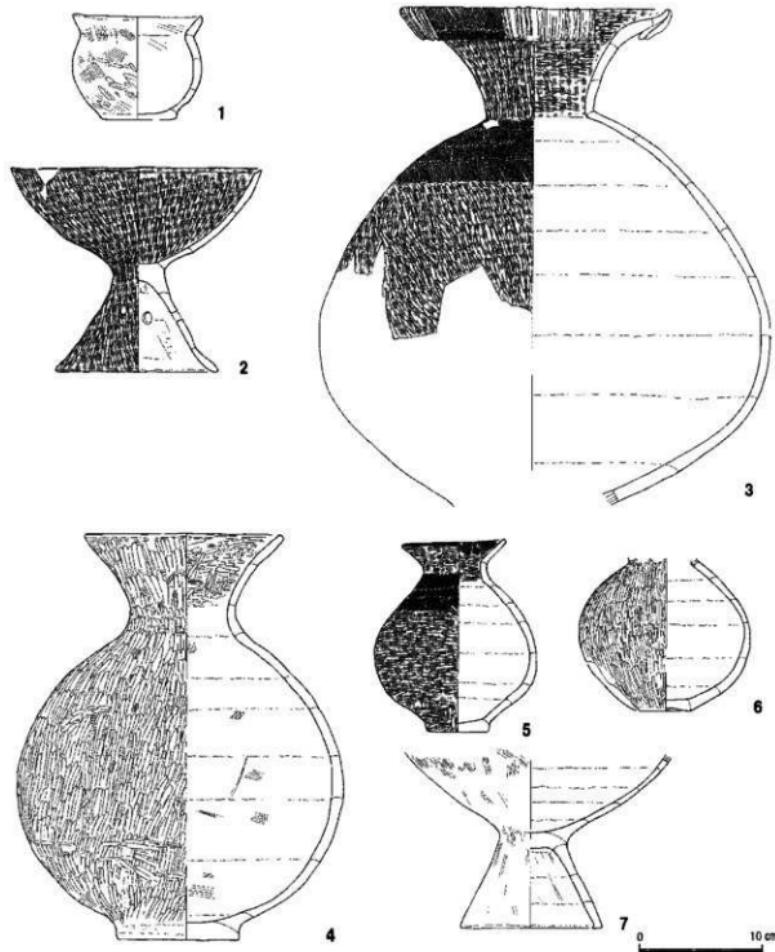
B溝

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。



第39図 31・32方形周溝墓出土遺物 (1 / 4)

- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 12層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。
- 13層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。

〔遺物〕 A溝の下層に小型壺形土器が出土した。B溝のコーナー部下層に壺形土器が割れた状態だが、ほぼ完形で出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

32号方形周溝壺出土遺物（第39図3～7・第42図17～23）

壺形土器（第39図3～6、第42図17・18）

3は全体の1/2程度残存する大型の壺。口径12cm。体部は張りが強く、やや下膨れな球状を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、複合口縁部は直立しながら開く器形である。口縁部外面には地文にRLの単節繩文の端末結節の羽状繩文が施され、8か9本一単位の棒状浮文が4箇所に施される。肩部には撫りの異なる単節繩文が羽状に4段施される。繩文帯以外へラミガキされ、赤彩される。色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)、赤彩部分は赤褐色(10YR4/4)を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かい。B溝内東コーナー付近から出土した。

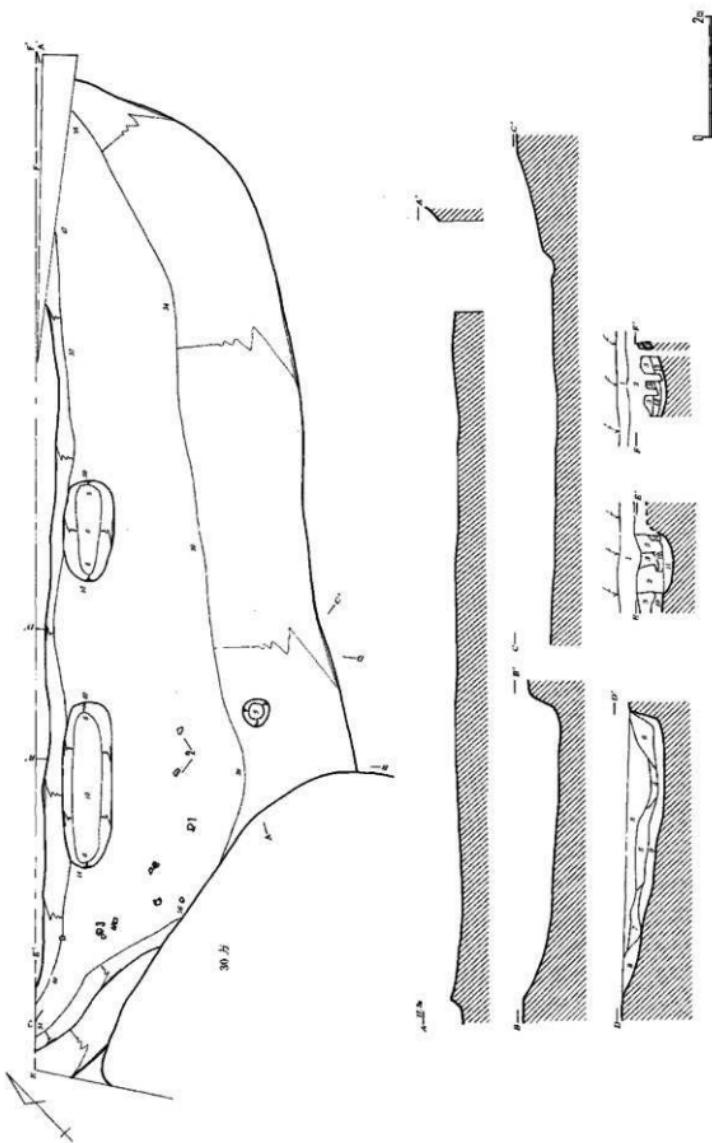
4は体部の1/4程度を欠損する。底径10cm・口径16.5cm・器高33.5cmを測る。底部は平底でやや張り出している。体部は球状を呈し、頸部はやや強くくびれて口縁部は外反する器形である。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面は口縁部が横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。頭部以下へラナデされる。底面には木葉痕が残る。色調は橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。B溝内東コーナー付近から出土した。

5は完形の小形壺。底径5cm・口径8.5cm・器高26cmを測る。底部は平底で張り出している。体部は球状を呈し、頸部は屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇端面にはLRの単節繩文が施される、口縁部内面にはRL単節繩文が施される。肩部外面には撫りの異なる単節繩文が羽状に4段施される。繩文帯以外へラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色(10YR8/4)、赤彩部分はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。B溝中央付近から出土した。

6は口縁部を欠損する小形壺。底径4.5cm。僅かに凹んだ底部から大きく開き、体部は張りの強い球状を呈する。体部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナー寄りA溝内から出土した。

17は肩部から体部にかけての破片。肩部には櫛描横線文が施される。文様帯以外へラミガキされ、赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

18は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土である。



第44図 33号方形圓石室 (1/50)

壺形土器（第39図7、第41図19～23）

7は台付壺形土器の体部下半以下が残存する。脚台部は直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰白色（10YR8/2）を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。A溝内の土坑状掘り込み内から出土した。

19は口頭部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

20・21は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は20が灰黃褐色（10YR5/2）を呈し、21は橙色（5YR6/6）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中から出土した。

22・23は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は22がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、23は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

33号方形周溝墓（第40図）

〔周溝の構造〕 530Yに切られ、30号方形周溝墓を切るようである。大部分が調査区外である。溝底に椭円形の土坑状の掘り込みが2基検出されたが、不明瞭である。

（規模） 上幅80～250cm・下幅30～140cm・深さ38～58cmを測る。

（断面形） 内側はほぼ垂直に近い85°前後の角度で立ち上がるが、外側は本調査5基のうちもっとゆるやかな10°前後の角度で立ち上がる。溝底はほぼ平坦である。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。

5層 黑褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

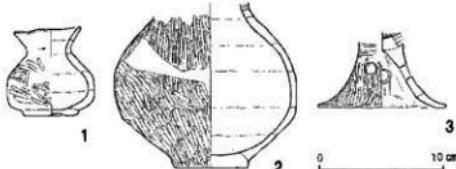
6層 黑褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

7層 黑褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

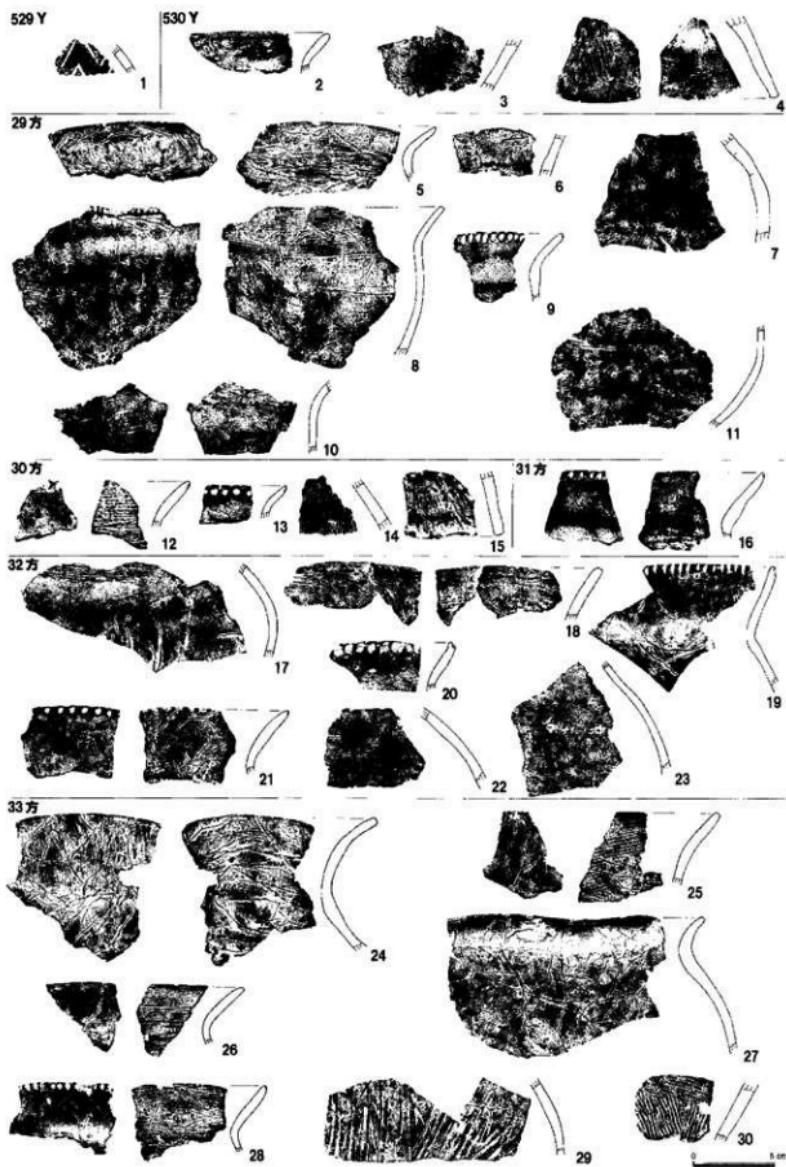
8層 灰黃褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

9層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

10層 黑褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。



第41図 33号方形周溝墓出土遺物（1/4）



第42図 529・530号住居跡、29~33号方形周溝墓出土遺物 (1/3)

- 11層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
 12層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
 13層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

(遺物) 覆土上層に口縁部が一部破損している小型壺形土器と高环形土器の台部が出土した。

(時期) 古墳時代前期。

33号方形周溝墓出土遺物 (第41図、第42図24~30)

壺形土器 (第41図1・2、第41図24~26)

1は口縁部の大半を欠く小形壺。底径4.5cm・推定口径5.4cm・器高7cmを測る。底部は僅かに張り出しており、底面は凹状を呈する。体部は玉葱状を呈し、頸部は強くくびれて口縁部は外反する。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー覆土上層より出土した。

2は頸部以下1/2程度残存する小形壺。推定底径6cmを測る。やや張り出した平底の底部から立ち上がり、体部下半に僅かに稜を持つ球状の体部を作出する。外面はヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー覆土上層から出土した。

24は口縁部破片。頸部は強くくびれて、口縁部は大きく開く器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。南コーナー付近の覆土中から出土した。

25は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中から出土した。

26は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

高环形土器 (第41図3)

脚台部の2/3程度残存する。推定底径10.5cm。裾部へかけて末広がりに広がる器形である。脚台部上部外面には6本一単位の櫛描文が施される。脚台部中位には、直径1.1cmの円窓が3箇所に外側から内側にかけて穿孔されている。外面は縦方向にヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナー覆土上層より出土した。

壺形土器 (第42図27~30)

27は口縁部破片。頸部は屈曲し、口縁部は強く外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/3) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。南コーナー覆土上層より出土した。

28は口縁部破片。口唇部外面には征目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。覆土巾からの出土。

29・30は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は29が灰黄褐色、30はにぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

第3節 小括

本調査区からは5基の方形周溝墓が検出された。いずれも古墳時代前期に比定されるが、ここでは方形周溝墓の出土土器の変遷を、壺形土器を軸に、筆者が既発表済みである当該遺跡の方形周溝墓におけるI期～VI期にあてはめて、簡単にまとめてみる（宮川2003）。

まず5基の中で一番古相を示すのは30号方形周溝墓から出土した土器群であろう。1・2の壺形土器は頸部のくびれも強くなく、体部の張りも弱いという特徴を示す。Ⅲ期初頭にとりあえず置いてみる。

次に29号方形周溝墓と思われる。出土遺物が少なくはっきりと時期を特定できないが、1の壺形土器をみると、頸部に断面三角形の凸帯が巡り、頸部は「く」字状に屈曲する特徴を持つ事から30号方形周溝墓より新相を示すと考えられるため、Ⅲ期後半に比定した。

33号方形周溝墓については出土遺物が当該方形周溝墓のものであると確定的ではないが、遺構の形態が既発掘済みの10号方形周溝墓に酷似しており、3の東海西部に系譜をもつ高環形土器の脚台部がラッパ状に広がる形態という、狭間II式後半以降の特徴を持つことから、10号方形周溝墓と同時期であると考えられる為、Ⅳ期初頭に置くことにする。

32号方形周溝墓は31号方形周溝墓と溝の一本を共有していて、同時期に存在していた可能性が高いが、遺物の特徴からみると若干の差がある。例えば31号出土の元屋敷系高環形土器は環部に僅かに稜を持ち、脚台部がやや直線的に開く事から、同じIV期でも古相を示す。32号3の壺形土器の頸部が屈曲し、肩部に羽状縞文が施される特徴や、4・5の壺形土器の体部が球状を呈し、頸部のくびれも強いという特徴からも31号より新相を示す。IV期後半～V期に設定されよう。

以上の検討結果、今回出土した方形周溝墓の構築順位は30→29→33→31・32であると推測される。

当該遺跡については未発表資料が多いが、筆者が前回発表した時より資料も増加した。それらが蓄積されるにつれ、前稿で筆者がI～VI期について、I～Ⅲ期を弥生時代後期に設定したが、Ⅲ期以降については古墳時代前期に設定したほうが良いのではないかと考るに至った。よってI期は比田井氏編年（比田井2001）の弥生後期Ⅲ段階古相、II期は弥生後期Ⅲ段階新相、Ⅲ期は古墳時代Ⅰ段階古相前半、IV期は古墳時代Ⅰ段階古相後半に設定したい。今後時期設定区分についても再考する必要があると痛感しております、本報告書の発表後稿を改めて検討したいと思う。

第4章 田子山遺跡第97地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 遺跡の立地と環境

田子山遺跡は、本町2・3丁目に広がる面積約62,000m²の集落跡である。本遺跡の周辺は当市でも早い時期から市街地が形成された地域であるため住宅の密集地となっていて、発掘調査の原因も再開発によるものが大部分である。

遺跡は、武藏野台地野火止台の最先端に位置し、標高約15m、低地との比高差10m前後を測る。崖線は直線的でかなり急斜であり、崖下には舟運で著名な新河岸川が南東流する。また、遺跡の東側には大きな谷があり込んでいる。

本遺跡は、これまでの発掘調査から縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 調査に至る経過

平成19年8月、八正建設株式会社 桶口佳史氏から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に、志木



第43図 周辺の地形と調査地点 (1/5,000)

市本町三丁目1816-14・15番地（面積311.79m²）に計画されている住宅建設（木造2階建て4棟）に係る埋蔵文化財の有無・取り扱いに関する照会があった。

教育委員会では、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていて、何らかの保存措置を図らなければならず、その対処方法を検討するための確認調査が必要である旨の回答を行った。

その後、樋口氏から確認調査依頼書が提出されたため、教育委員会では9月4日に確認調査を実施し、奈良・平安時代のものと思われる住居跡及び溝状の遺構を検出した。

教育委員会では、これらの保存方法について樋口氏と協議をおこなったが、開発計画の変更が無理という結論に達したため、発掘調査による記録保存を行うこととし、調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。

遺跡調査会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘届が提出されたため委託契約を締結し、関係書類を埼玉県教育委員会に提出し、調査を開始した。

なお、発掘調査通知番号は、教生文第2-062号 平成20年2月6日付である。

（3）発掘調査の経過

発掘調査は9月25日から開始した。バックホーを使用して表土の掘削を行うと同時に、協力員を導入して遺構確認作業を実施し、住居跡2軒（69H・70H）と溝跡1条（12M）を検出した。調査区内にはコンクリート等の廃棄物が埋められた擾乱が3ヶ所に認められ、検出された遺構もこれにより大きく破壊されていた部分があった。遺構確認作業終了後、69Hと12Mの調査を開始する。

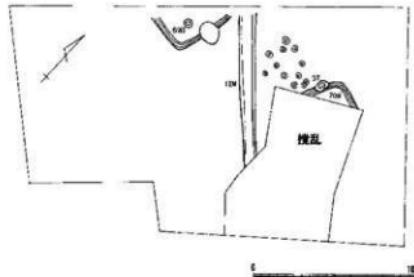
26日には69Hの調査を行うが、過半が調査区外にあった。12Mは東側が擾乱により破壊されていた。新たに70Hの調査を開始したが、擾乱により大きく破壊されていて、北西コーナー部が遺存しているのみであった。また、70Hと切り合う「鉤の手」状のピットを検出。掘立柱建築遺構（3T）の柱穴の一部と考えられた。70H・12Mの土層図作成を行う。

27日には70H・12Mの精査を終え、平面図・断面図の作成、写真撮影を行う。69Hの精査と、土層図・平面図の作成、写真撮影を行う。

28日には69Hのカマドの写真撮影を行い、実測を開始する。

10月1日にはカマドの実測を終了、器材の撤収と埋め戻しを開始する。

2日には埋め戻しを終え、発掘調査を終了した。



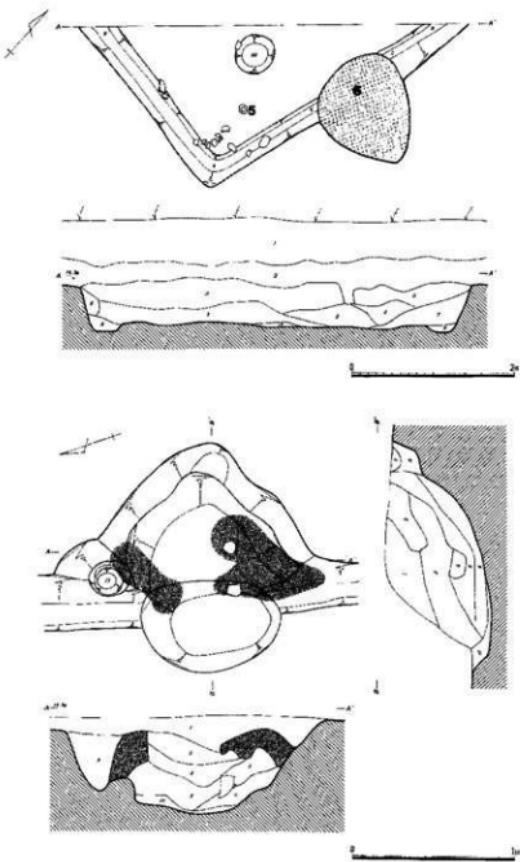
第44図 遺構分布図 (1/300)

第2節 平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

69号住居跡（第45図）

〔構造〕北西側は調査区外。(平面形) 正方形か。(規模) 不明。(主軸方位) N—103°—E。(壁高) 45~50cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅25~40cm・下幅8~15cm・深さ2~9cmを測る。(床面) 全体に軟弱である。(カマド) 東壁に位置する。長さ140cm・幅130cm・壁への掘り込み85cmを測る。天井部・袖部は暗灰黄色粘土(2.5Y5/2)で構築されている。覆土は1層一黒褐色土(10



第45図 69号住居跡 (1/60)・カマド (1/30)

YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を僅かに含む。やや軟質。2層—明褐色土(7.5YR7/1)。粘土ブロック。硬質。3層—黒褐色土(5YR3/1)ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。4層—灰赤褐色土(2.5YR4/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。やや硬質。5層—にぶい赤褐色土(2.5YR4/3)。焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を多く含む。硬質。6層—黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む。やや硬質。7層—にぶい赤褐色土(2.5YR4/3)。粘土が被熱したもの。硬質。8層—黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。やや硬質。9層—灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子・粘土粒子を多く含む。やや粘質。10層—黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・焼土ブロック・粘土粒子を含む。やや硬質。

(覆土)

1層 盛土。

2層 表土。

3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土(2.5Y3/2)。粘土粒子・粘土小ブロックを含む。焼土小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 暗灰黄色土(2.5Y4/2)。粘土粒子を多く含む。焼土小ブロックを含む。やや硬質。

6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

8層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

9層 褐色土(10YR4/4)。ロームブロックを多く含む。硬質。

10層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。

(遺物) 南東コーナー付近、床面から僅かに浮いた状態で出土した。

(時期) 平安時代(9世紀中葉)。

69号住居跡出土遺物(第47図1~6)

須恵器壺形土器(1~4)

1は1/2程度残存する。口径11.5cm・底径5.4cm・器高3.5cmを測る。比較的浅めの土器で、平底の底部から直線的に開き、口縁部は外反する器形である。底面には回転糸切痕を残す。色調は灰色(10Y4/1)を呈し、胎土には蹠・粗砂を含む。覆土中からの出土。

2は1/2程度残存する。口径11.8cm・底径7cm・器高3cmを測る。上げ底気味の底部からやや内湾気味に開き、口縁部は僅かに外反する。底部には回転糸切痕を残す。色調は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、胎土には蹠・粗砂を含む。覆土中から出土した。

3は1/6程度残存する。推定口径11.4cm・推定底径7.4cm・器高3.7cmを測る。平底の底部から直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。底部には回転糸切痕を残す。色調は灰色(10Y4/1)を呈し、胎土には蹠・粗砂を含む。覆土中からの出土。

4は1/2程度残存する。口径12.4cm・底径6.6cm・器高3.6cmを測る。上げ底気味の底部から直線的に開き、口縁部は僅かに開く器形である。底面には回転糸切痕を残す。色調は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。覆土中からの出土。

須恵器蓋形土器(5)

1/2程度残存する。口径17cm・器高3.4cmを測る。平坦な天井部から僅かに丸みをもちながら下がり、

屈曲して丸みを持った口唇部へ至る器形である。天井面には回転糸切痕を残す。色調は暗灰黄色（2.5 Y5/2）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。住居跡南東コーナー床面上から出土した。

土器類変形土器（6）

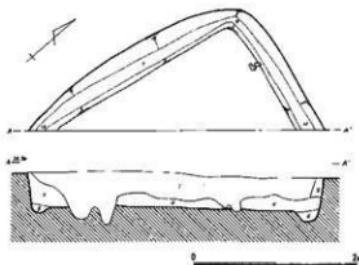
体部中位より上の1/3程度残存する。推定口径11.8cmを測る。頸部は「コ」字状を呈し、口縁部は外湾しながら開く器形である。口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面は横位のヘラケズリ、体部外面はヘラケズリされるが不明瞭。内面はヘラナデされる。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。カマド内からの出土。

70号住居跡（第46図）

〔構造〕北西コーナー付近を除き、攪乱により破壊されている。掘立柱建築遺構の柱穴と切り合うが、新旧関係は把握できなかった。（平面形）正方形か。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）40～45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅23～30cm・下幅5～17cm・深さ7～12cmを測る。（床面）部分的に硬化面が認められた。

〔覆土〕

- 1層 攪乱。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。



第46図 70号住居跡（1/60）



第47図 69・70号住居跡出土遺物（1/4）

6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
〔遺物〕覆土中から須恵器・土師器の小片が僅かに出土した。

〔時期〕平安時代。

70号住居跡出土遺物（第47図7）

須恵器紡錘車（7）

1/2程度残存する。直径5.5cm、厚さ0.7cm、穴径0.7cm、重量3.5gを測る。須恵器坏形土器の底部を再利用しており、片面には回転糸切痕が残る。色調は黄灰色（2.5Y5/1）を呈し、胎土には砾・粗砂を含む。覆土中からの出土。

(2) 溝跡

12号溝跡（第48図）

〔構造〕北西—南東方向に走向している。上幅75~98cm・下幅50cm前後・深さ25~48cmを測る。断面はおおむね逆台形を呈し70°前後の角度で立ち上がる。溝底はほぼ平坦であるが、南東から北西に向けて徐々に下がっている。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 表土。

3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

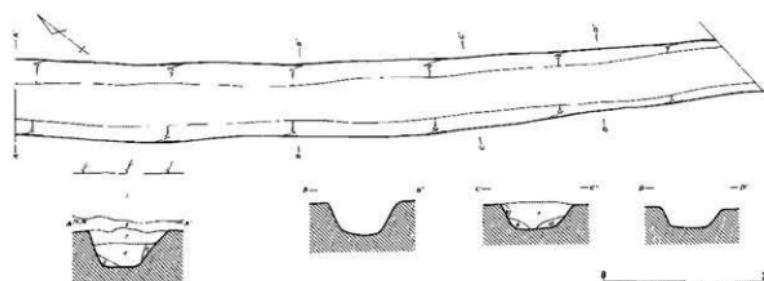
8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から須恵器・土師器の小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕平安時代か。



第48図 12号溝跡 (1/60)

- 1996「第2章 西原大塚遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群VII』志木市の文化財第23集
- 1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」志木市の文化財第24集
- 1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群VIII』志木市の文化財第25集
- 2002「第3章 西原大塚遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集
- 2003「第3章 西原大塚遺跡第54地点の調査」「志木市遺跡群13」志木市の文化財第35集
- 2004「第4章 西原大塚遺跡第65地点の調査」「志木市遺跡群14」志木市の文化財第36集
- 2007「第2章 西原大塚遺跡第67地点の調査」「志木市遺跡群15」志木市の文化財第37集
- 佐々木保俊・尾形則敏 1987「第2章 西原大塚遺跡第4地点の調査」「新邱遺跡第2地点 西原大塚跡第4地点発掘調査」志木市遺跡調査会調査報告第3集
- 1990『志木市遺跡群II』志木市の文化財第14集
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2001「第3章 西原大塚遺跡第43地点の調査」「志木市遺跡群」志木市の文化財第30集
- 2005『西原大塚遺跡第111地点』志木市遺跡調査会調査報告第8集
- 2005『西原大塚遺跡第110地点』志木市遺跡調査会調査報告第9集
- 佐々木保俊・間根正明・上田 寛・内野美津江・宮川幸佳 2000『西原大塚遺跡第45地点の発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第6集
- 谷井 駿 1975「西原・大塚遺跡発掘調査報告」『志木市の文化財第4集』
- 西相模考古学研究会 2001『弥生後期のヒトの移動』西相模考古学研究会・六一書房
- 根本 順 2003「東の上遺跡の基礎研究V」「あらかわ』第6号 あらかわ考古談話会
- 比田井克人 2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版
- 宮川幸佳 2003「西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器」『埼玉考古』第38号
- 2004「志木市西原大塚遺跡出土の古墳時代前期後半の上器」『埼玉考古』第39号

報告書抄録

ふりがな	にしらおおつかいせきだい120ちでん たごやまいせきだい97ちでん	にしらおおつかいせきだい131ちでん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	
副書名		卷次
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	卷次 第15集
編著者	佐々木俊保・内野美津江・宮川幸佳	
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会	
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048(473)1111	
発行年月日	平成20年6月30日	

ふりがな 所収遺跡名	しょざichi 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号	(°'')	(°'')			
西原大塚遺跡 (第120地点)	志木市幸町 3丁目38街区 1・2画地	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 06"	20050627 ~ 20050707 • 20060530 ~ 20060628	1027.11	保育園建設
西原大塚遺跡 (第131地点)	志木市幸町 3丁目63街区 12~17画地	11228	007	35° 49' 10"	139° 34' 01"	20060830 ~ 20060920	472.21	集合住宅建設
田子山遺跡 (第97地点)	志木市本町 3丁目1816- 14・15番地	11228	010	35° 49' 38"	139° 35' 12"	20070925 ~ 20071002	311.79	建売住宅建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西原大塚遺跡 (第120地点)	集落跡	縄文時代中期後半	住居跡	1軒 加曾利EII式土器	
			土坑	62基 石器	
西原大塚遺跡 (第131地点)	集落跡	弥生時代後期~ 古墳時代前期	住居跡 方形周溝墓	4軒 壺形土器・高環形土器 1基 鉢形土器・壺形土器	
田子山遺跡 (第97地点)	集落跡	平安時代	住居跡 溝跡 掘立柱建築遺構	2軒 須恵器壺形土器 1本 須恵器蓋形土器 1本 壺形土器	

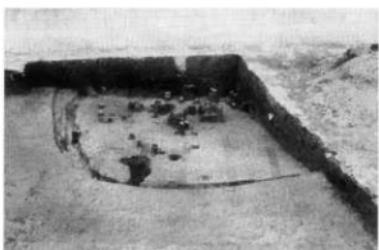
図 版



調査区近景



調査区近景



140号住居跡遺物出土状態



140号住居跡



140号住居跡炉跡



496号土坑



497土坑遺物出土状態



497号土坑（西から）



497号土坑（南から）



498・499号土坑



500号土坑



501号土坑



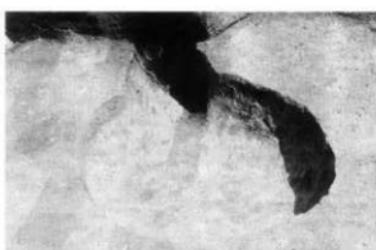
502号土坑



503号土坑遺物出土状態



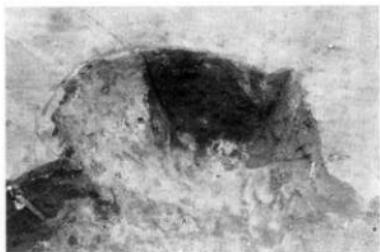
503号土坑



504号土坑



505~507号土坑



508号土坑



509号土坑



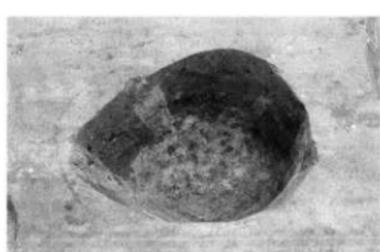
510号土坑遺物出土状態



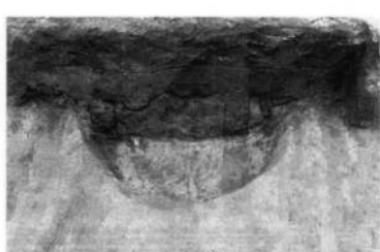
510号土坑



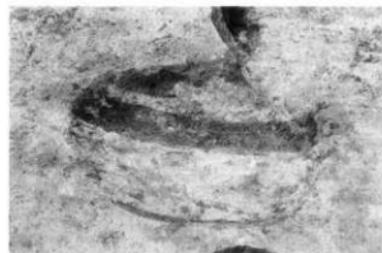
511号土坑



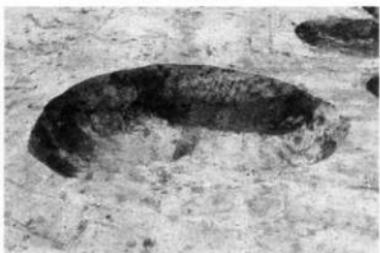
512号土坑



513号土坑



514号土坑



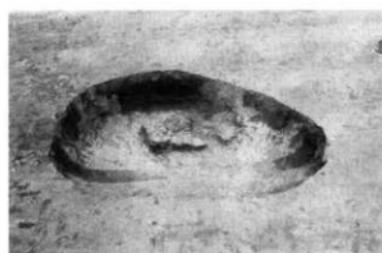
515号土坑



516号土坑遺物出土状態



516号土坑



517号土坑遺物出土状態



517号土坑



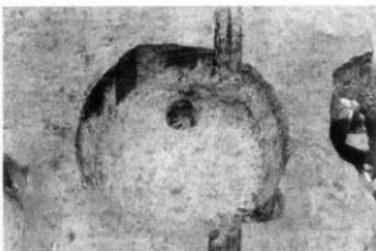
518号土坑



519号土坑



520号土坑



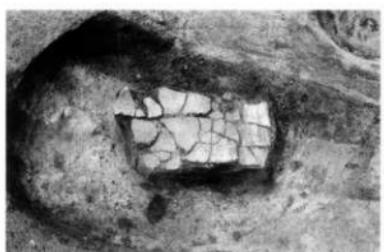
521号土坑



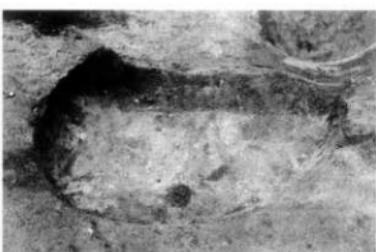
522号土坑遺物出土狀態



522号土坑



523号土坑遺物出土狀態



523号土坑



523・524号土坑



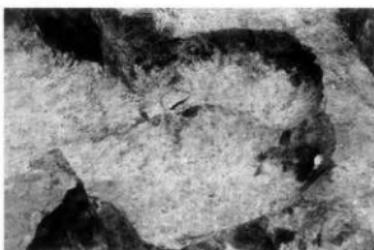
525号土坑



526号土坑



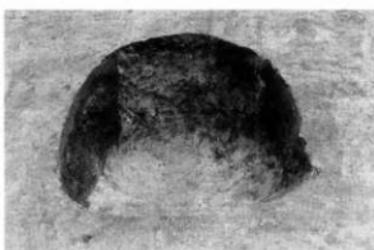
527号土坑



528・530号土坑



529号土坑



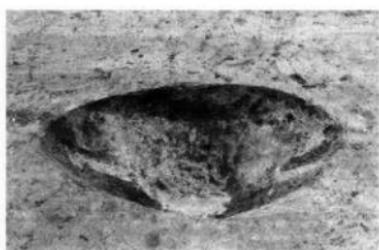
531号土坑



532号土坑



533号土坑



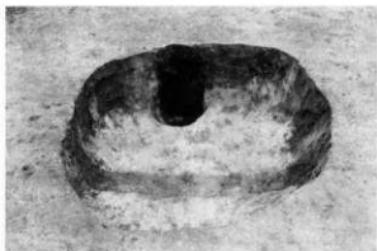
534号土坑



535号土坑



536号土坑遺物出土状態



536号土坑



537号土坑



538号土坑



539号土坑



540号土坑遺物出土状態



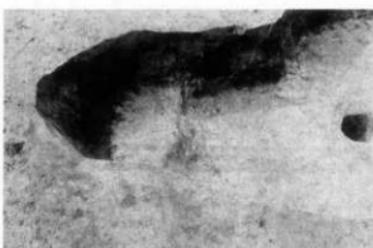
540号土坑



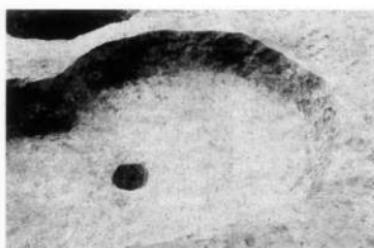
542号土坑遺物出土狀態



542号土坑



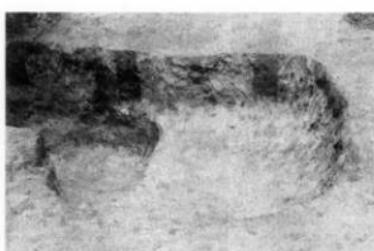
543号土坑



544号土坑



545号土坑



546号土坑



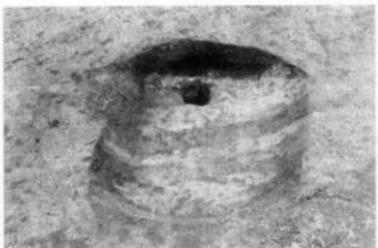
547号土坑



548号土坑



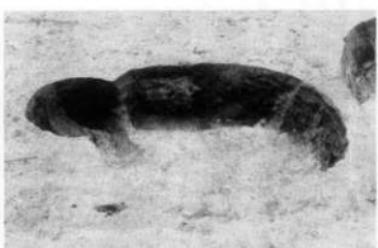
549号土坑遺物出土状態



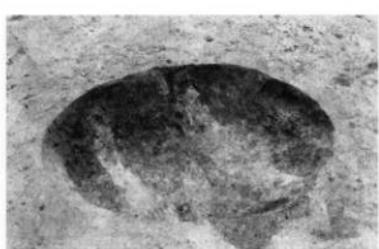
549号土坑



550号土坑



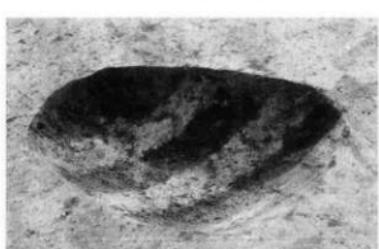
551号土坑



552号土坑



553号土坑



554号土坑



555号土坑



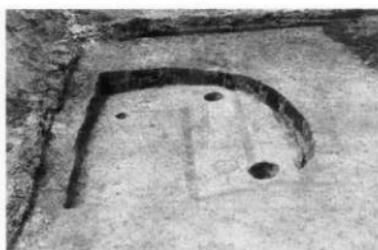
556号土坑



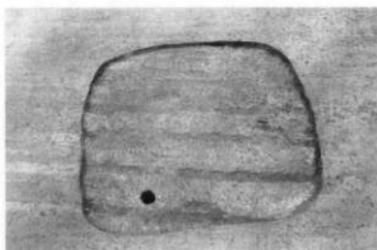
557号土坑



調査風景



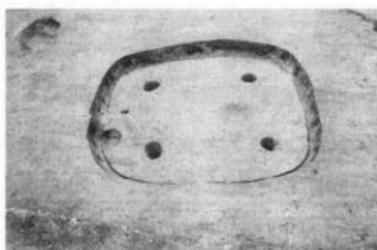
522号居跡



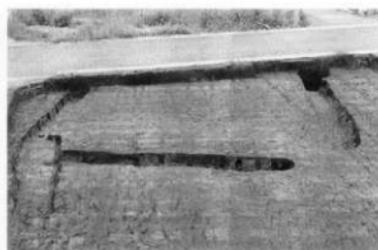
526号居跡



527号居跡

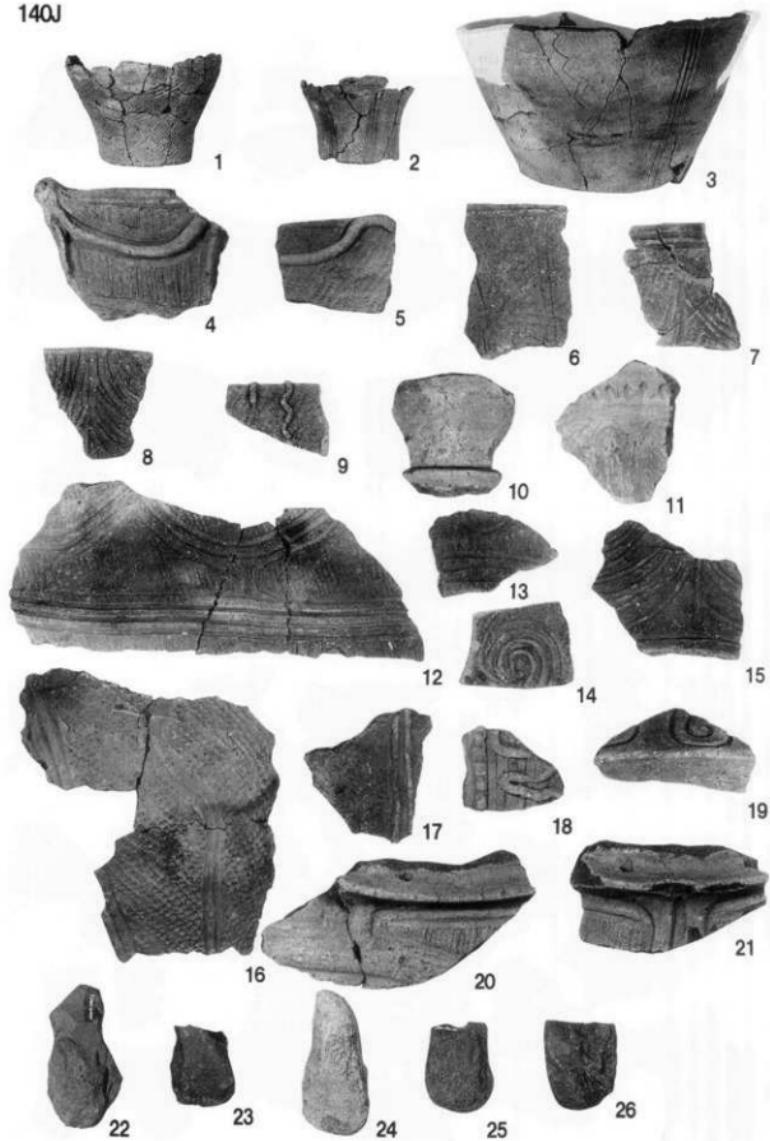


528号居跡

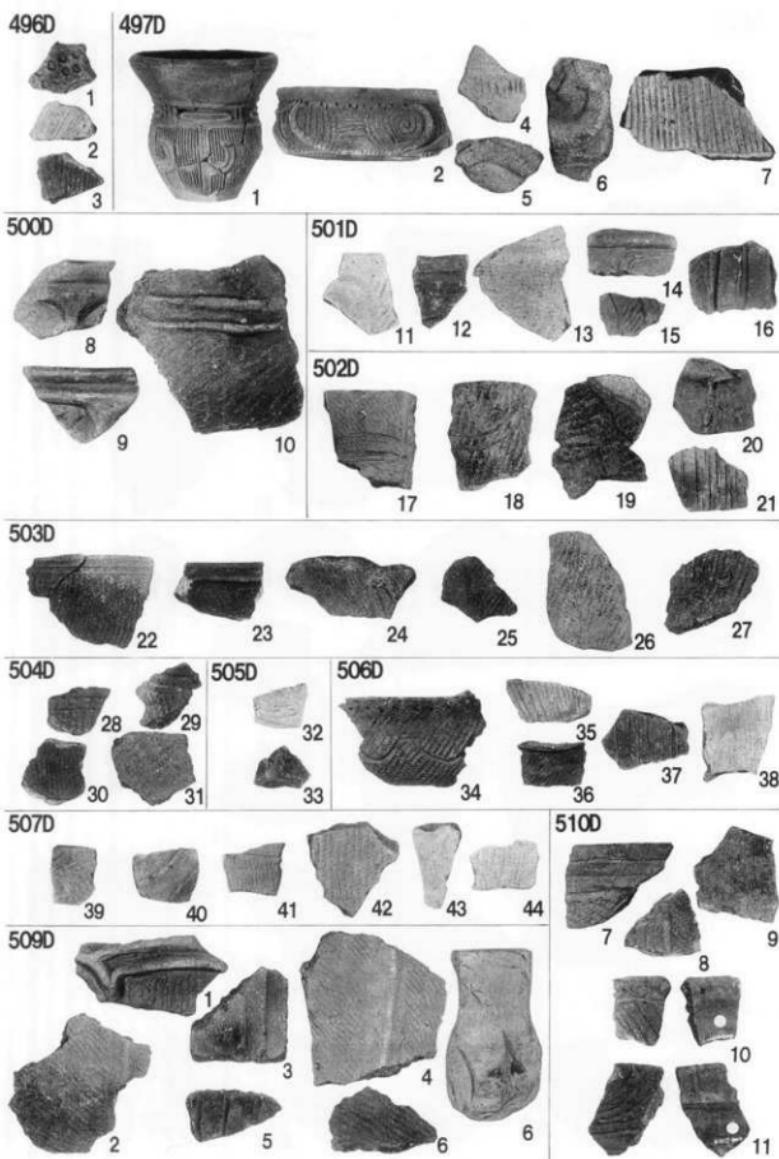


25・26号方形周溝墓

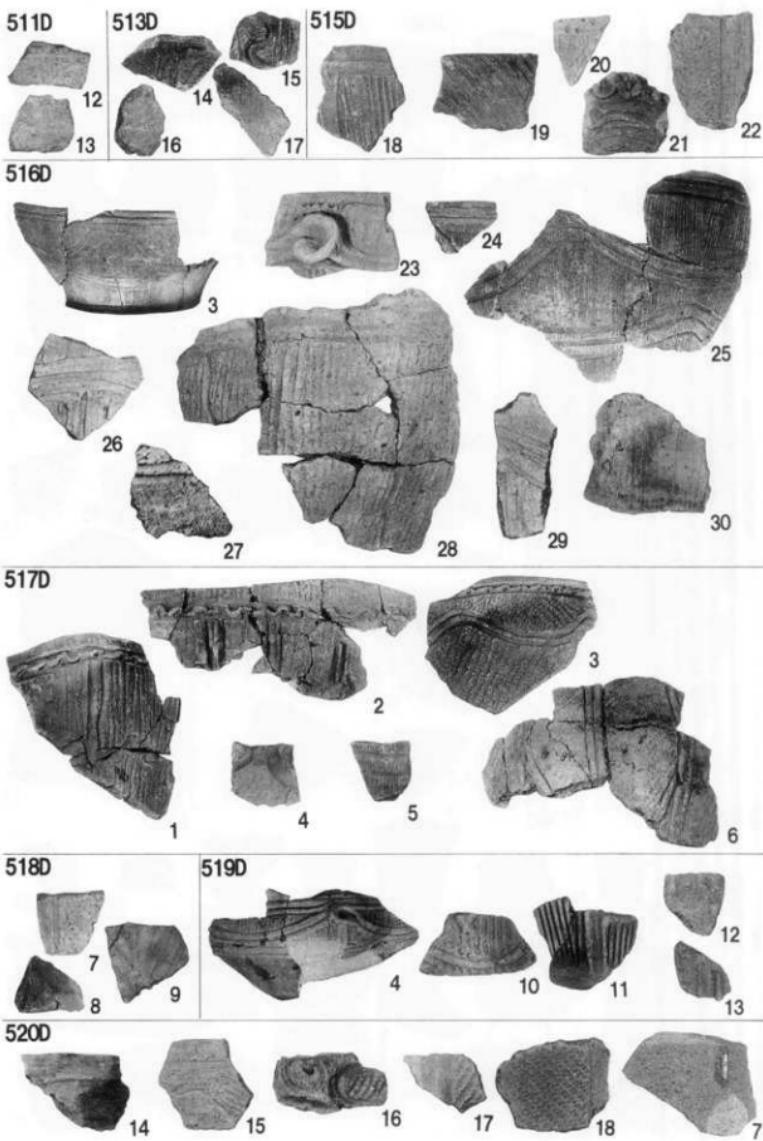
140J



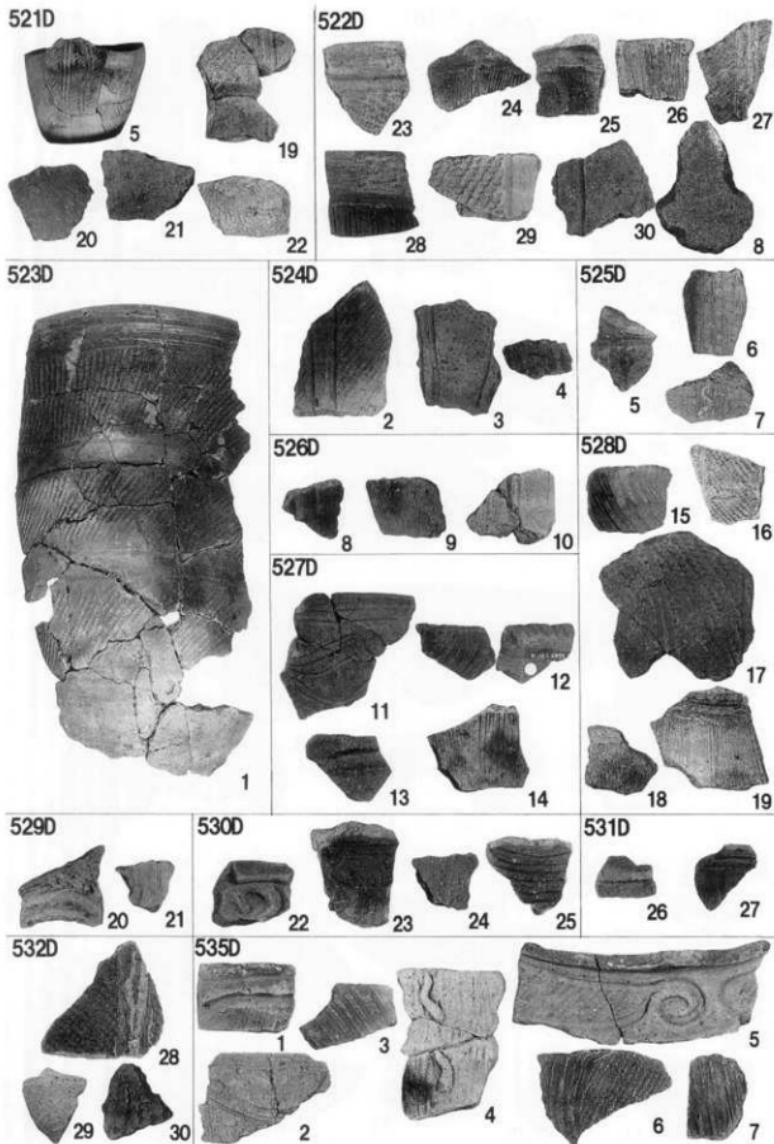
140号住居跡出土遺物



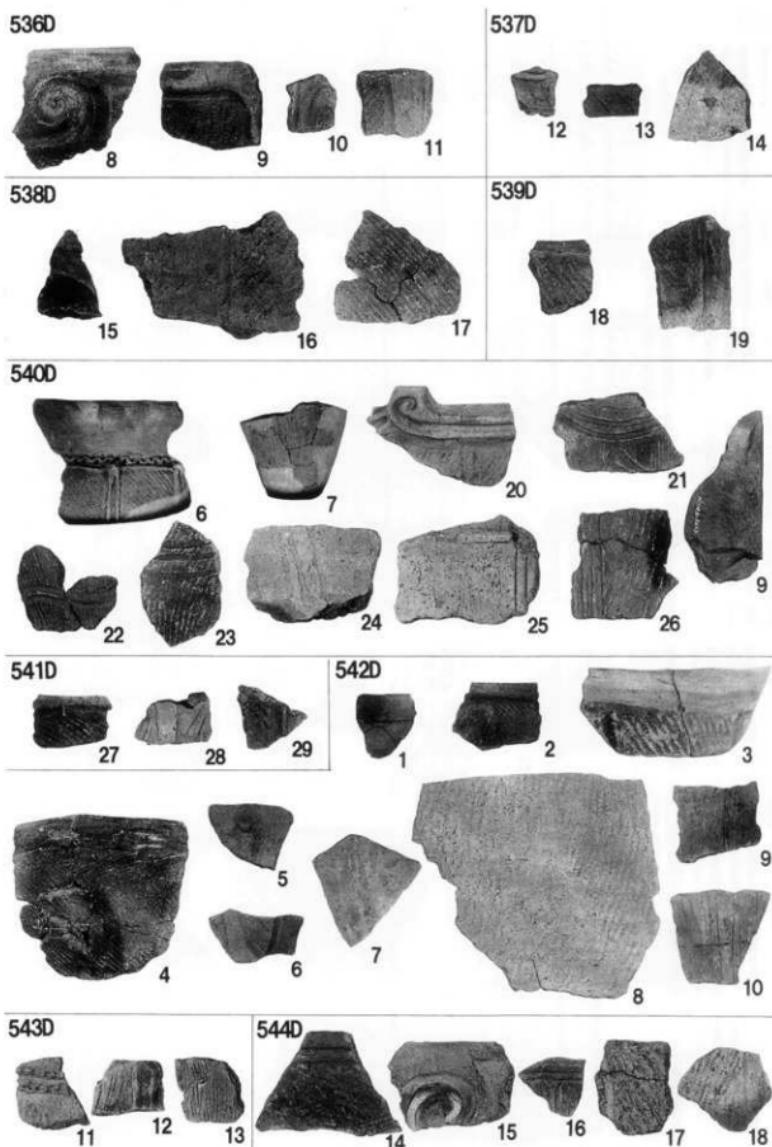
496・497・500～507・509・510号土坑出土物



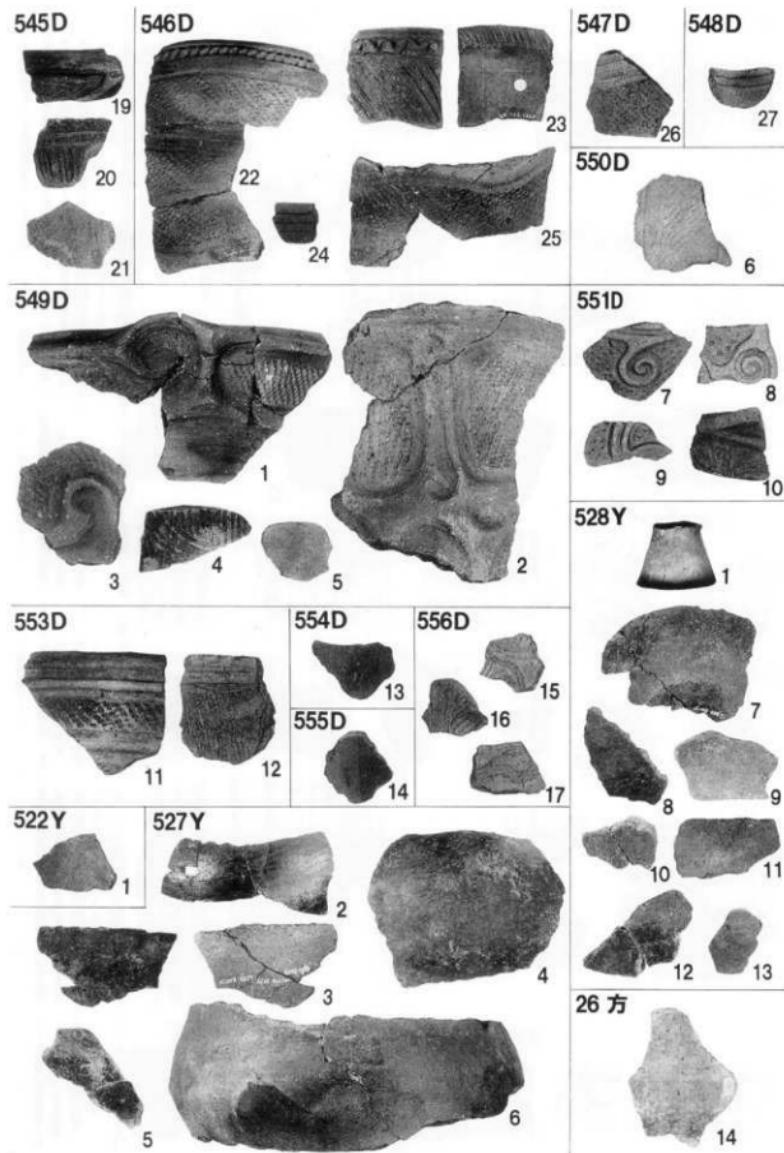
511・513・515～520号土坑出土遺物



521~532・535号土坑出土遺物



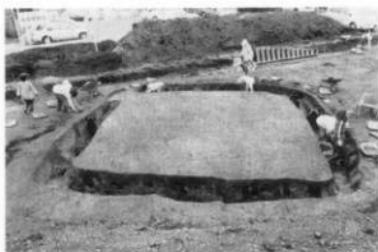
536~544土坑出土遺物



545～551・553～556号土坑出土遺物、522・527・528号住居跡出土遺物、26号方形周溝墓出土遺物



調査区近景



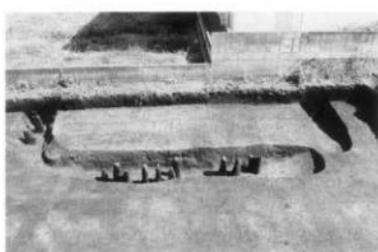
調査風景



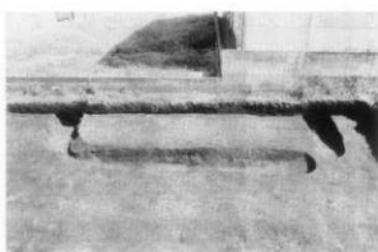
529号住居跡



530号住居跡



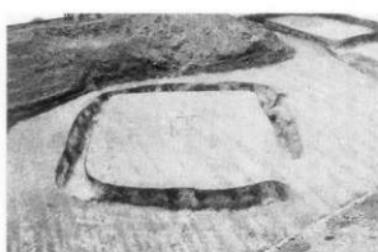
29号方形周溝墓遺物出土状態



29号方形周溝墓



30号方形周溝墓遺物出土状態



30号方形周溝墓



31・32号方形周溝墓遺物出土狀態



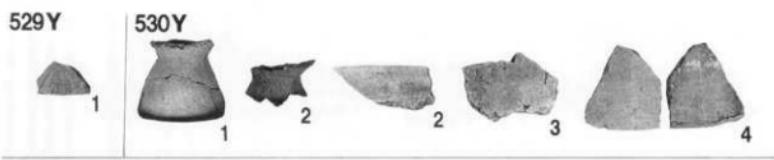
31・32号方形周溝墓



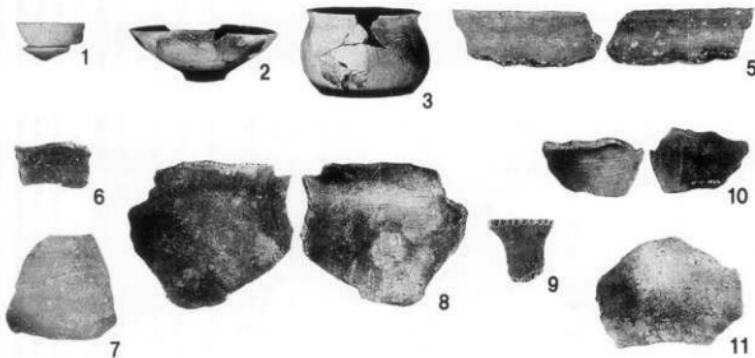
32号方形周溝墓覆土堆積狀態



33号方形周溝墓



29方



529・530号住居跡出土遺物、29号方形周溝墓出土遺物



30~33号方形周溝墓出土遗物



調査区近景



調査風景



69号住居跡遺物出土状態



69号住居跡



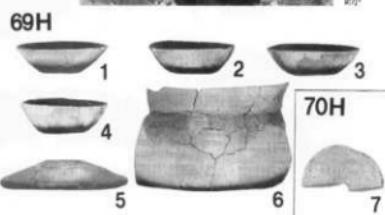
70号住居跡



12号溝跡



3号掘立柱建築遺構



69・70号住居跡出土遺物

志木市遺跡調査会調査報告 第15集

**西原大塚遺跡第120地点
西原大塚遺跡第131地点
田子山遺跡第97地点**

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成20年6月30日
印刷 株式会社白峰社

